

西小田地区遺跡

圃場整備事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査

筑紫野市文化財調査報告書

第 11 集

1985

筑紫野市教育委員会

筑紫野市文化財調査報告書第 / / 集 正誤表

頁	行	誤	正
10	21	Ⅵ 類	Ⅳ 類
"	23	V / a	Ⅳ / a
18	/	Ⅳ / a	Ⅵ / a
19	33	Ⅷ 3	Ⅷ /
22		48 は同安窯系青磁碗Ⅲ 2	
33		6・7 は龍泉窯系青磁碗Ⅰ 5 (6 はⅠ 5 b)	
37	/	Ⅱ a	Ⅰ 2 a
"	19	Ⅵ b	Ⅰ 6 b
46	5	皿 2 は龍泉窯系青磁皿Ⅰ 2	
65	30	/ 2 世紀中頃	/ 2 世紀中頃～後半
"	"	S E 2・S M 2	S E 3・S M 2
66	/	/ 3 世紀初頭	/ 3 世紀中葉

序

当市では農業振興のため圃場整備事業を実施して参りました。このたび御笠地区に引続いて西小田地区の圃場整備を行いました。当地には貴重な文化遺産が数多く、委員会としましては可能な限り遺跡の保存に努めました。しかし、工事の都合上やむなく部分的に発掘調査を行い、遺跡を記録保存することになりました。本書はその調査結果をまとめたものです。

この報告書が埋蔵されていた古代筑紫の姿を後世に残すものとなり、また今後の研究で新らしく書きかえられて行く古代史の糧ともなれば幸いと存じます。

最後に今回発掘に従事された方々のご苦勞と、絶えずご協力を賜わった各方面には厚く御礼申上げる次第でございます。

昭和60年 3 月 30 日

筑紫野市教育委員会

教育長 松 田 康 男

例 言

1. この報告書は、西小田地区圃場整備に伴う西小田地区遺跡の、埋蔵文化財緊急発掘調査である。
2. 発掘調査は、昭和58年度 西小田地区土地改良区の委託を受け、昭和59年度 国・県の補助を受け、筑紫野市教育委員会が実施した。
3. 遺構実測は、主に奥村俊久が当り、昭和58年度、豊福茂美・山野洋一、昭和59年度、高原健・山野の応援を受けた。
4. 遺物実測は、土師器を主に長野智恵子・山崎順子・山本由紀子が行ない、その他は奥村が実測した。
5. 製図は、鶴味加代子が行なった。
6. 写真は、遺構・遺物ともに奥村が撮影した。
7. 陶磁器の分類は、大宰府関係の発掘調査で行なわれているものに準じ、太宰府市教育委員会社会教育課文化財係技師 山本信夫氏の協力を得た。
8. 本書の執筆・編集は奥村が行なった。

本文目次

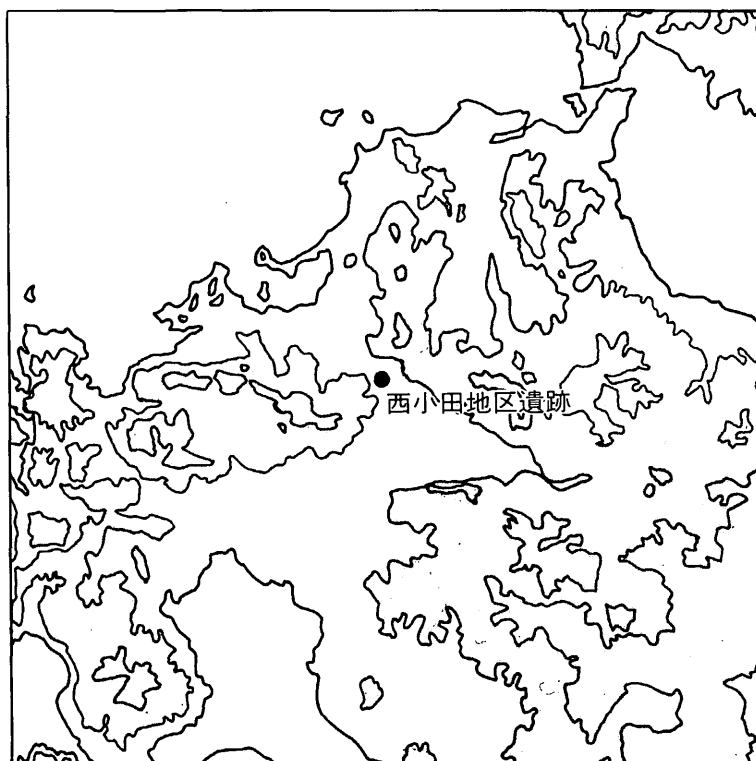
I	調査に至る経過	1
II	位置と環境	2
III	A地区の調査	5
1	調査概要	6
2	掘立建物	6
3	井戸	6
4	土壌	23
5	溝	29
6	竪穴式住居跡状遺構	39
7	ピット出土の遺物	44
8	試掘調査に伴う出土遺物	45
9	縄文時代の遺物	46
IV	B地区の調査	48
1.	調査概要	49
A	第1地点の調査	50
1.	火葬墓	50
2.	土壌	52
3.	井戸	52
4.	溝	52
B.	第2地点の調査	57
C.	第3地点の調査	57
V	まとめ	65

挿 図 目 次

第1図	西小田地区遺跡周辺の遺跡分布図	3
第2図	A地区発掘調査地点地形図	5
第3図	A地区遺構配置図	折り込み
第4図	S B 1～3 遺構実測図	7
第5図	S E 1 遺構実測図	8
第6図	S E 1 出土土器・陶磁器実測図	9
第7図	S E 1 出土石鍋実測図	10
第8図	S E 2 遺構実測図	11
第9図	S E 2 出土土器実測図	13
第10図	S E 2 出土土器・磁器実測図	14
第11図	S E 2 出土石鍋実測図	15
第12図	S E 3 遺構実測図	16
第13図	S E 3 出土土器・磁器実測図	17
第14図	S E 3 出土石鍋実測図	18
第15図	S E 4 遺構実測図	20
第16図	S E 4 出土土器実測図	21
第17図	S E 4 出土器・磁器実測図	22
第18図	S E 4 出土甕実測図	23
第19図	S E 5 遺構実測図	24
第20図	S E 5 出土土器実測図	24
第21図	S D 1 遺構実測図	25
第22図	S D 1 出土土器・磁器実測図	26
第23図	S D 1 出土石鍋実測図	26
第24図	S D 2 遺構実測図	27
第25図	S D 2 出土土器実測図	28
第26図	S M 1～8 断面実測図	30
第27図	S M 9・10断面実測図	31
第28図	S M 1～4 出土土器・磁器実測図	33
第29図	S M 8 出土土器、陶磁器実測図	34
第30図	S M 8 出土磁器実測図	36
第31図	S M 8・10土器・磁器実測図	37

第32図	S M 8 出土陶器実測図	37
第33図	溝出土石鍋実測図	38
第34図	溝出土石製品実測図	39
第35図	S H 1 ・ 2 遺構実測図	41
第36図	S H 1 出土土器・陶磁器実測図	42
第37図	S H 1 ・ 2 出土土器・磁器実測図	43
第38図	S H 1 出土石鍋実測図	43
第39図	S H 1 出土石製品実測図	44
第40図	ピット出土遺物実測図	45
第41図	A 地区出土縄文式土器実測図	46
第42図	「ひかえ提」土層断面図	47
第43図	B 地区発掘調査地点地形図	48
第44図	B 地区第 1 地点遺構配置図	49
第45図	S K 遺構実測図	50
第46図	S K 1 ～ 3 骨蔵器実測図	51
第47図	S D 1 ～ 4 遺構実測図	53
第48図	S D 1 出土陶器実測図	53
第49図	S E 1 出土土師器実測図	53
第50図	S E 1 遺構実測図	54
第51図	S M 1 断面実測図	54
第52図	S M 1 出土土器実測図	55
第53図	S M 1 出土土器・磁器実測図	56
第54図	S M 1 出土縄文式土器実測図	56
第55図	第 2 地点土盛土層断面図	57
第56図	第 3 地点土盛断面実測図	58
第57図	第 3 地点遺構配置図・土盛地形図	59
第58図	S D 1 ～ 9 遺構実測図	60
第59図	S D 10 ～ 18 遺構実測図	61
第60図	S D 19 ～ 28 遺構実測図	62
第61図	S D 17 ・ 20 出土遺物実測図	64

にし お だ
西小田地区遺跡



Ⅰ 調査に至る経過

筑紫野市は、昭和58年度より新農業改善事業の一環として、西小田地区ほ場整備事業を計画し、昭和58年6月8日付で、同市教育委員会に同年度事業予定地内における埋蔵文化財の有無についての調査依頼が行なわれた。これを受けて、市教育委員会では、同年6月13日から同22日まで試掘調査を実施した。この結果、事業地北部の高まりで、11～13世紀頃のものと考えられる土師器や磁器片と共にピット状の遺構が確認された。また、この南には径5m程度の土盛りがあり、周辺には遺構は認められなかったが、何らかの遺跡の可能性があると考えられた。

これらの調査結果と、事業地の中央を走る明治年間に築造された「ひかえ堤」の保存も含め、市と協議を行なった。しかし、事業地北側の高まりにある遺構については、カット面積を半分程度に減らすものの、他の遺構等については保存は無理であるとの結論に達し、事前に埋蔵文化財緊急発掘調査を実施する事になった。昭和58年11月2日、筑紫野市西小田土地改良区と筑紫野市との間で、発掘調査に係る工事委託協定書がとりかわされた。発掘調査は、調査主体を筑紫野市教育委員会とし、昭和58年11月7日より昭和59年1月21日まで現地での発掘調査を実施し、昭和59年3月1日より同23日まで遺物整理作業を実施した。

昭和59年度については、昭和58年度事業中にカットの対象となる水田部を試掘調査し、事業地北側で溝状遺構を検出した。この脇には若干の高まりがあり、ほこらに薬師如来と伝えられる石仏が祀られている。さらに南側に2ヶ所、土盛りがあり、これらの3地点と先の溝状遺構検出地を昭和59年度国庫補助事業として緊急発掘調査を実施した。現地での発掘調査は昭和59年8月20日より同年10月13日まで行ない、遺物整理は昭和59年11月1日より昭和60年1月19日まで遺物整理を実施した。

以上2年度で西小田地区ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は終了したが、県道久光－西小田線をはさみ、昭和58年度に発掘調査した部分をA地区、昭和59年度に発掘調査した部分をB地区とする。さらに、B地区は、溝状遺構と脇の高まり部分を第1地点、南側の2ヶ所の土盛り部分は北から第2、第3地点とした。

調査組織については下記のとおりである。

昭和58年度

総括	筑紫野市教育委員会	教 育 長	松田 康男
庶務		社会教育課長	山村 茂
	社会教育課	社会教育係長	豊福 茂美
		社会教育係主事	山野 洋一
発掘調査		社会教育係主事	奥村 俊久

また、発掘調査で出土した井戸杵を取り上げるに当って、福岡県立九州歴史資料館学芸二課
技術主査 横田義章氏の御指導を仰いだ。

昭和 59 年 度

総括	筑紫野市教育委員会	教 育 長	松田 康男
庶務		社会教育課長	山村 茂
	社会教育課	文化財係長	高原 健
		文化財係主事	山野 洋一
発掘調査		文化財係主事	奥村 俊久

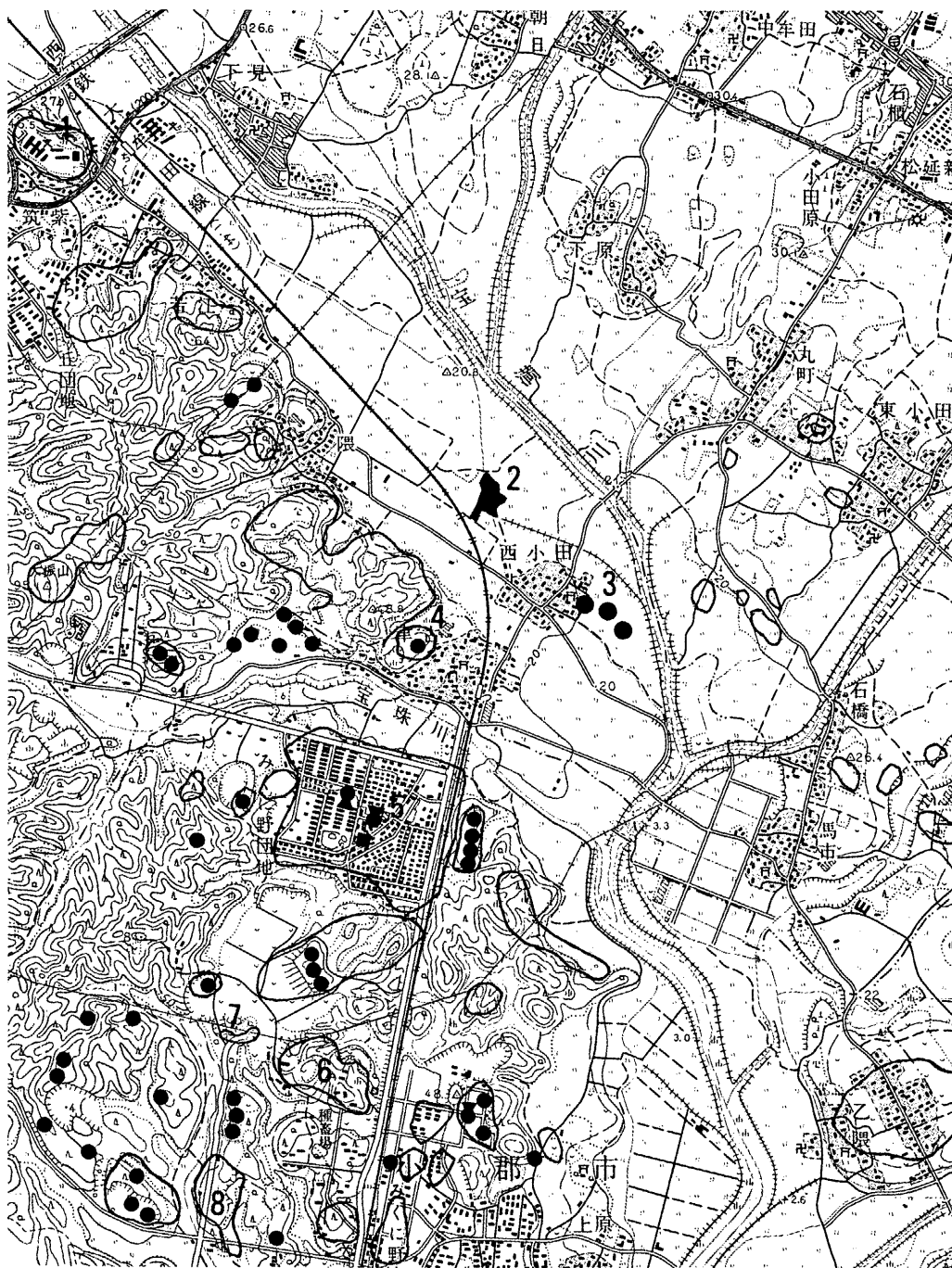
II 位置と環境 (第 1 図)

本遺跡は、福岡県筑紫野市大字西小田に所在する。

筑紫野市の平野部は、福岡平野と筑後平野の接点に位置し、東の三郡山塊、西の背振山塊から派生する山稜によって狭長なものとなっている。この平野の北西には鷺田川があり、御笠川と合流し博多湾へ注ぎ、東には筑後川と合流して有明海に注ぐ宝満川がある。遺跡はこの宝満川中流域西岸にある。

筑紫野市の北部は太宰府の郭内に含まれ、塔原廃寺^{註1}や杉塚廃寺^{註2}などが所在し、万葉集や梁塵秘抄にも詠まれた吹田の湯は今日も二日市温泉として生きずいている。これらの東には天拝山^{註3}があり、そのふもとにある武蔵寺は、その名が今昔物語、宇治拾遺物語、梁塵秘抄にも見える。

武蔵寺の境内からは、今日まで11基の経塚が発見されており、うち3本には銘文が残り、寛治6年(1092)、康和5年(1103)などの年号が見えるものもある。また、市の北東部には大宰府から米ノ山峠を越えて都へ通じる官道^{註4}の、最も大宰府よりの駅家である盧城駅家がある。市の南部には筑紫氏の宅跡といわれる地域があり、この一部が発掘調査され、弥生時代や古墳時代の遺構のほか^{註5}に白磁劃花文磁と無文白磁碗が各1点入った土壌を一基検出した。ここよりやや南に位置する近世長崎街道の筑前六宿^{註6}のひとつ原田宿の北端には延喜式にその名が見える筑紫神社がある。この長崎街道は前記の遺跡の付近を通り、やはり筑前六宿に数えられ、市の西部に位置する山家宿を経て、豊前国に入る。本遺跡は、さらに南に位置し、小郡市との境に位置する。この付近から小郡市北部の宝満川東岸丘陵には、隈遺跡・津古内畑遺跡・津古遺跡・種畜場遺跡・ハサコノ宮遺跡・横隈山遺跡のほか枚挙にいとまがないほど弥生時代を中心とする大遺跡群がある。本遺跡から宝満川ぞいに3kmほど下ると東岸に筑後国御原郡日方郷に比定されている干潟遺跡^{註7}がある。そのほか周辺部の歴史時代の遺跡としては、本遺跡より7kmほど南に、40棟の掘立柱建物や柵列、溝などが検出され、官衛跡とされる小郡遺跡がある。また、経路は明確でないが、いわゆる延喜道も比較的近い位置を通っていたと思われる。



第1図 西小田地区遺跡周辺の道路分布図（縮尺1/25000）

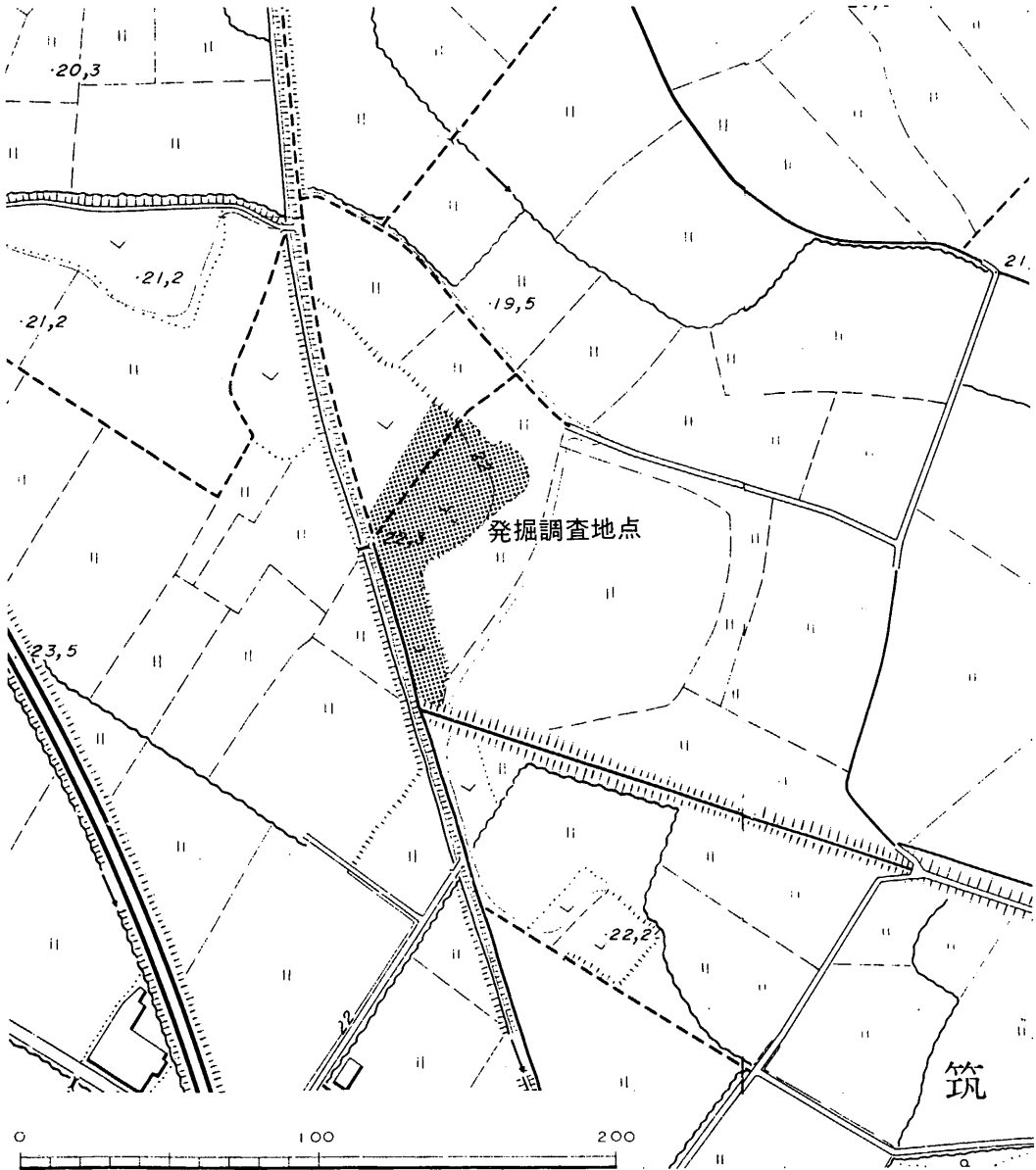
1. 矢倉遺跡 2. 西小田地区遺跡A地点 3. 西小田地区遺跡B地点
4. 津古内畑遺跡 5. 津古古墳群 6. 三沢蓬ヶ浦遺跡 7. ハサコの宮遺跡
8. 北牟田遺跡

（遺跡の範囲は「福岡県遺跡等分布地図（筑紫野市・春日市・大野城市・筑紫郡編）」
1980 福岡県教育委員会 による）

註

- 註1 鏡山猛『太宰府都城の研究』風間書房 1968 現在、県立九州歴史資料館で実施されている発掘調査等で、各種問題点が生じているが、氏の案に替り得るものは今だに見いだせない。
- 註2 『塔原廃寺』福岡県文化財調査報告書第35集 福岡県教育委員会 1967
- 註3 『杉塚廃寺』筑紫野市文化財調査報告書第4集 筑紫野市教育委員会 1979
- 註4 『武蔵寺経塚』武蔵寺史編纂会 1970
宮小路賀宏『武蔵寺第11号経塚発掘調査報告』古文化談叢第12集 九州古文化研究会 1983
- 註5 筑紫野市教育委員会が昭和53年度御笠地区ほ場整備に伴う発掘調査で、奈良時代の大規模な建物跡が発見され、同駅家である可能性が高いと考えられる。
- 註6 『矢倉遺跡』筑紫野市文化財調査報告書第8集 筑紫野市教育委員会 1982
- 註7 現在の筑紫神社は「筑紫宮縁起」及び「棟札」に享徳2年（1453）に筑紫能登守経門、筑紫左近将監俊門が神殿を建立したとあるのが最古の資料である。
- 註8 『干潟遺跡Ⅰ』福岡県文化財調査報告書第59集 福岡県教育委員会 1980

Ⅲ. A地区の調査



第2図 A地区発掘調査地点地形図(縮尺1/2500)

1 調査概要 (第3図 図版1)

A地区の調査は大きく3点に分けられる。第一に事業予定地北部の高まりにある生活遺跡群があげられる。第二はその南側に位置する直径約5m、高さ約1mの土盛りであるが、断面を観察しつつ掘り下げたが、キメの細かい砂層が頂部から裾部に至るまで盛られており、東半分の土を取り除いたが、下に遺構は検出されなかった。第三は明治年間に築造された「ひかえ堤」で、東西各1ヶ所の断面を観察した。

A地区の調査で主体をなすものは、前述の事業予定地北部の生活遺構群である。調査前は畑であり、水田からの比高は50～150cm程度である。縁辺部は「ひかえ堤」築造の際に削り取られ、調査区南側は垂直に落ちる。北東部は徐々に標高が下り、遺構もみられなくなる。

A地区で検出した遺構は、掘立建物(SB)3棟、井戸(SE)5基、土壇(SD)2基、溝(SM)10条のほか300近いピットを検出した。一般にこの種の遺跡では、ピットの数の割にまとまりがないといわれるが、本遺跡の調査もそれを追認するにとどまった。掘立建物は2棟、井戸も2基が明らかな切り合いを示している。また、掘立建物の中に位置して竪穴式住居跡状の遺構(SH)が切り合って2軒検出されたが、不明瞭な点が多い。

2 掘立建物 (第4図)

掘立建物は「く」の字状を呈す調査区の屈曲部周辺で検出された。3棟のうち2棟(SB1・2)は規模の大きなものであるが、その東に位置する一棟は小規模のものである。

SH1 真北より西に60°の方位をとる。南西側に東柱をもっており、桁行3間、梁行2間以上、庇1間の規模である。柱穴は90～150cm程度の不整円形プランで、柱間は桁行9.3尺、梁行10.4尺、庇6.3尺を測る。

SB2 SB1とほぼ同位置に建てられ、磁北の方位をとる。柱穴は北西隅を中心に5本が検出され、柱間はそれぞれ7.1尺、11.2尺を測る。南端の柱穴には柱の表皮部が依存し、直径50cmを測る。また隅の柱穴には底部に石を置き礎板としている。

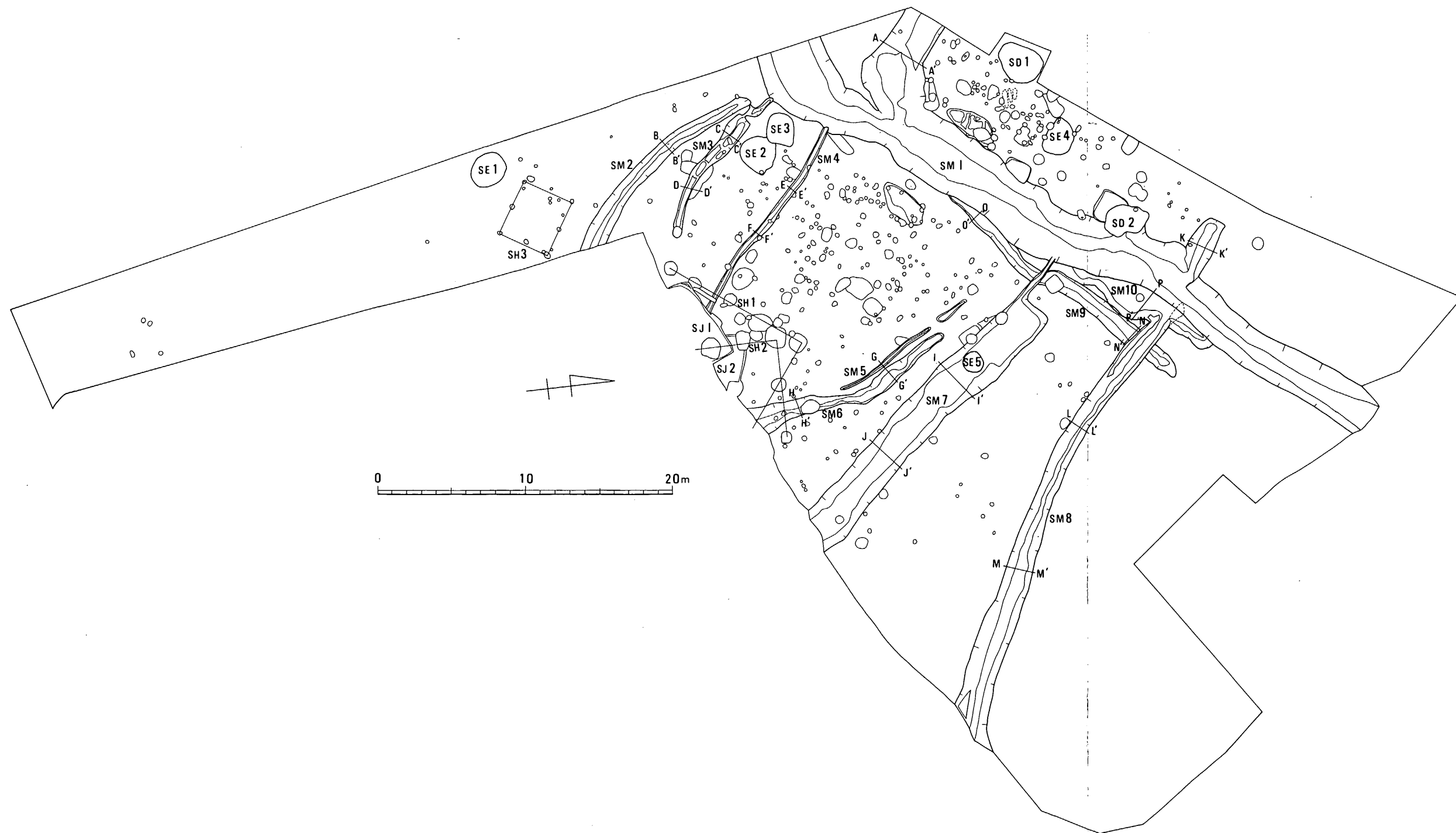
SB3 2間×2間の建物で、N-65°-WとSH1に近い方位をとる。柱間は6尺×6.5尺を測る。中ほどの相対する柱穴が、やや北西にずれる。

3 井戸

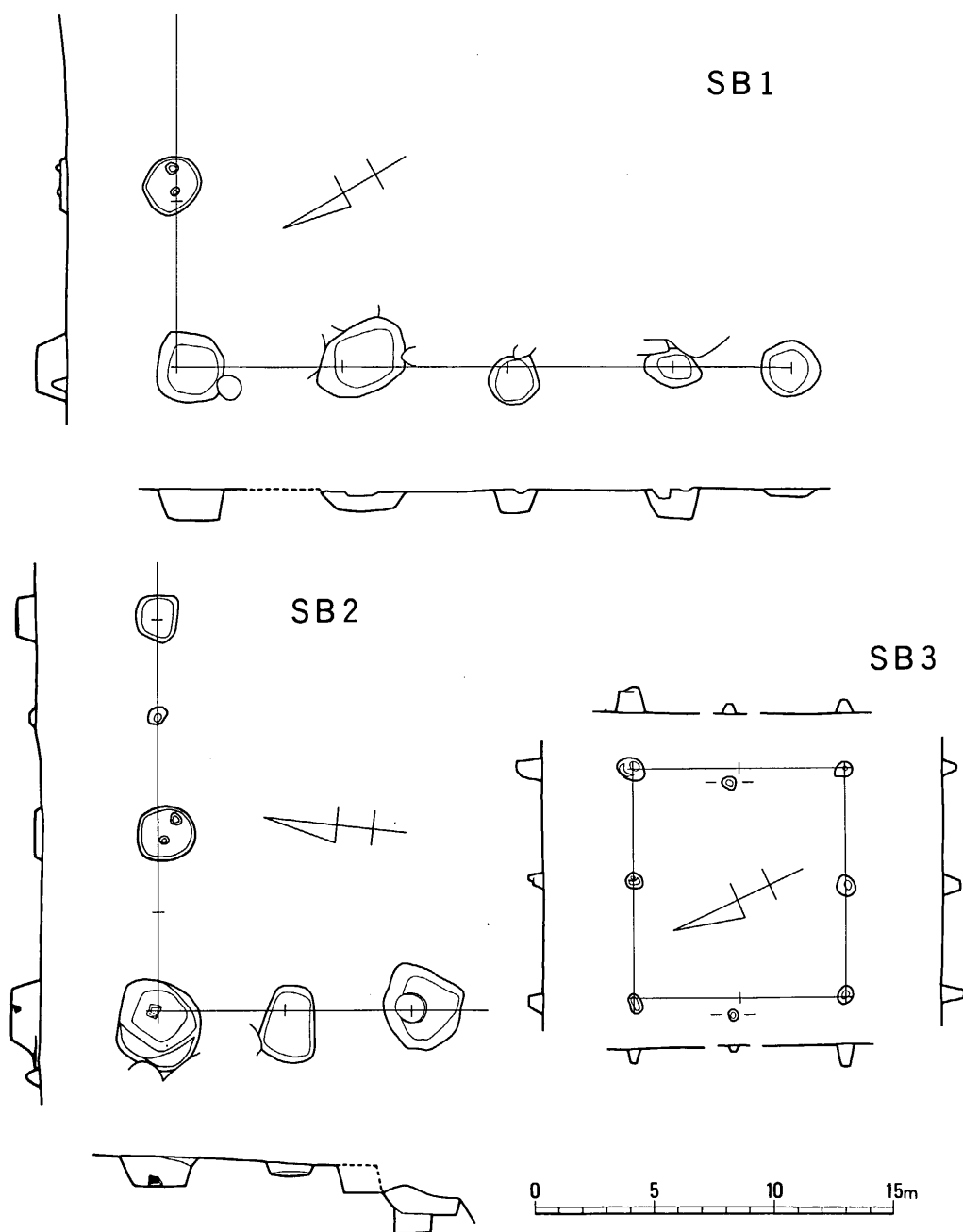
井戸は5基のうち4基(SE1～4)は調査区西半で検出され、1基(SE5)は調査区中央部で検出した。また3基の井戸には井戸枠などが遺存する。

SE1 (第5図・図版2)

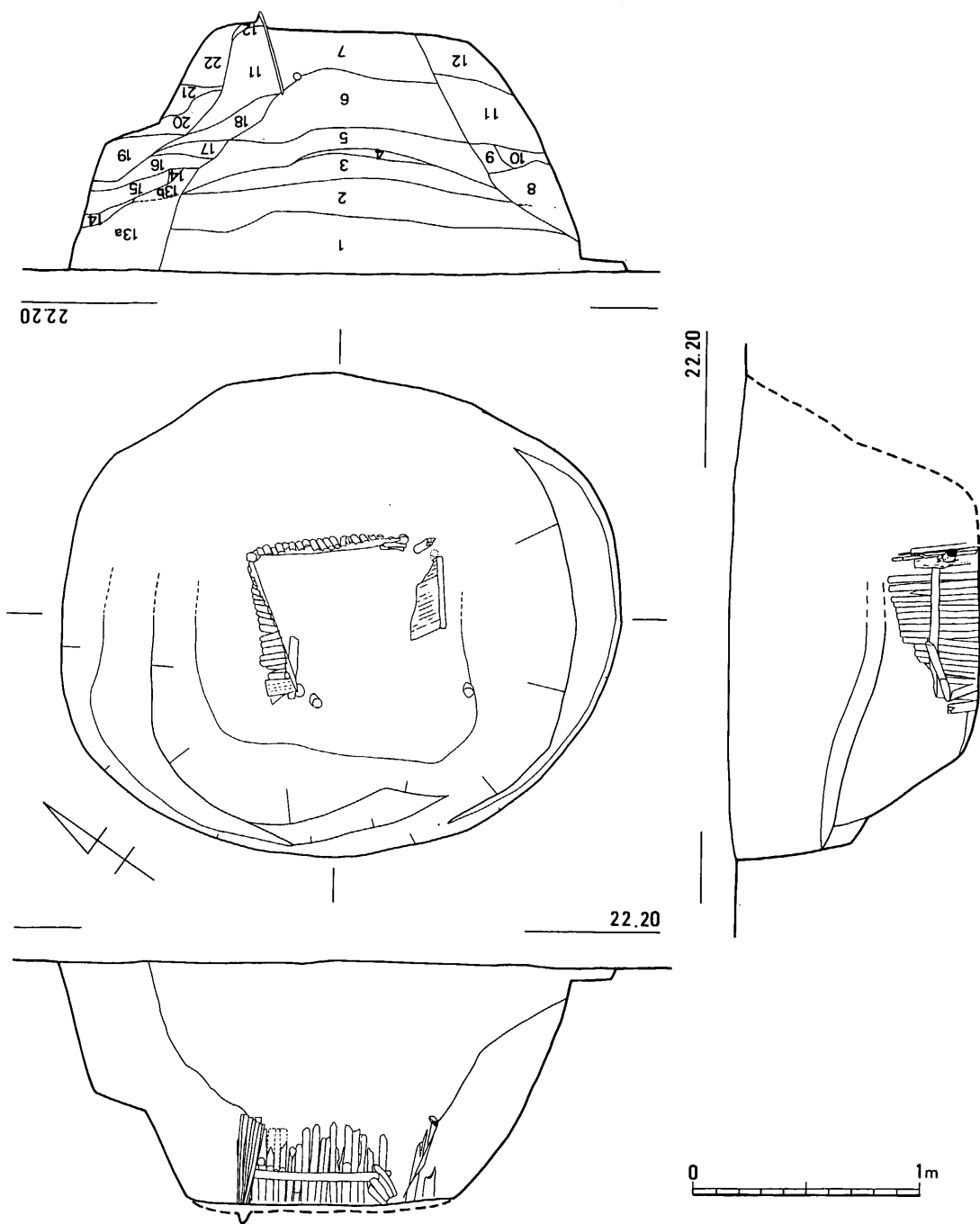
上面プランは2.45～2.12mの円形、床面は約1.1mの隅丸方形を呈す。深さ約1mを測る掘り方の中に四方形の井戸枠を組んでいる。井戸枠はかなりゆがみがあるが、一辺約85cmと推定さ



第3図 A地区遺構配置図(縮尺1/300)



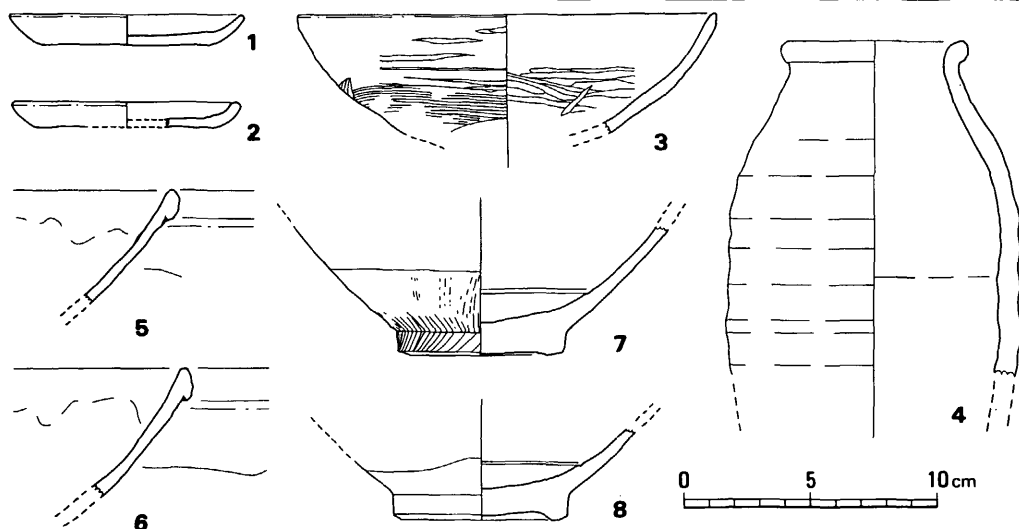
第4図 SB1～3遺構実測図(縮尺1/60)



第5図 SE 1 遺構実測図 (縮尺1/30)

SE01土層観察表

- 1層 淡茶褐色土層（よくしまった層である）
- 2層 淡茶褐色土層（1層よりやや暗い，よくしまった層である）
- 3層 淡茶褐色土層（2層よりやや暗い，よくしまった層である）
- 4層 3層土＋黒色土層（しまりが弱い）
- 5層 茶褐色土層
- 6層 淡黒褐色粘質土層（鉄分がシミとなって入る）
- 7層 淡青灰色砂層（鉄分がシミとなって入る）
- 8層 暗茶褐色土層（5層土よりやや暗い）
- 9層 15層と同じ
- 10層 暗灰色砂質土層（9層土が混る）
- 11層 暗青灰色粘質土層（18層土・6層土の青味が強い土を混入する。鉄分をシミ状に含む）
- 12層 濃青灰色粘質土層（やや鉄分をシミ状に含む）
- 13層 青灰色砂質土層
- 14層 暗茶褐色土層
- 15層 黄褐色土層（キメの極めて細かい土壌で，ローム化しつつある様な状態）
- 16層 暗茶褐色土層（14層より淡い）
- 17層 暗黄褐色砂質土層
- 18層 淡黄褐色砂質土層（17層より淡いが，かなり濁った色調を呈す。鉄分をシミ状に含む）
- 19層 淡黄褐色砂質土層（比較的キメが細かく，ローム化しつつある様な状態）
- 20層 青灰色粘質土層
- 21層 青灰色砂層（地山土）
- 22層 青灰色粘質土層（16層とほぼ同じ土壌であるが，16層の方がやや濁る）



第6図 SE1出土土器・陶磁器実測図（縮尺1/3）

れる。構造は隅木に直径約4cmの丸木杭を打ち，その間に竹をならべて打ち込んでいる。竹は大半が半截され，割った方を内面に向け組まれる。横棧は木材が用いられ，隅木に枅を作り接続される。西側の隅木は横棧ごとに別々の隅木が用いられ，東側のものもその可能性が高い。

断面を観察すると、掘り方と裏込めの状態が観察される。1～7層は井戸内部で、南側は井戸枠の傾斜を保ち、深さ約40cmの位置まで直線的に伸びる。北側は井戸枠直上から大きく開き、深さ約50cmの位置から立ち上る。このような状況から、遺存する井戸枠は深さ40cmほどの位置までつくられており、北側上部が崩れて破棄されたものであろう。8～18層は、この井戸に伴う裏込めで、下層はやや粗く埋められる。19～22層は、この井戸以前に掘られた井戸の裏込めである可能性が高く、21層などは地山の土が埋められている。

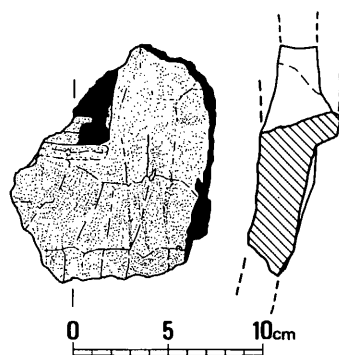
出土遺物（第6・7図 図版6）

土師器

皿a（1・2） 口径9cm，器高1～1.2cmを測る。1は糸切り離しの底部を有すが，2は強い板状圧痕のため確認しえない。

瓦器

椀（3） 底部を欠失する。体部下半は糸切り離しの痕をそのまま残す。外面のミガキは粗くヨコナデにより器面が突出した部位にのみ行なわれる。内面のミガキは比較的に施される。色調は口縁部のみ黒灰色で，ほかは全て淡灰色を呈す。



第7図 SE1出土石鍋実測図
(縮尺1/4)

陶器

壺（4） 褐釉系陶器である。口縁部は折り曲げ玉縁とし，体部はゆるやかに張り最大径11.6cmを測る。

白磁

椀（5～8） 5・6は口縁部を大きめの玉縁にするVI類で，やや青味を帯びる釉がかかる。7・8は底部である。体部外面はヘラ削りされ，高台が厚く，削り込みも僅かである。内面見込み部に沈線状の段を有しV1aに相当する。

その他にVI1bと，VII1bの皿の小片が出土した。

青磁

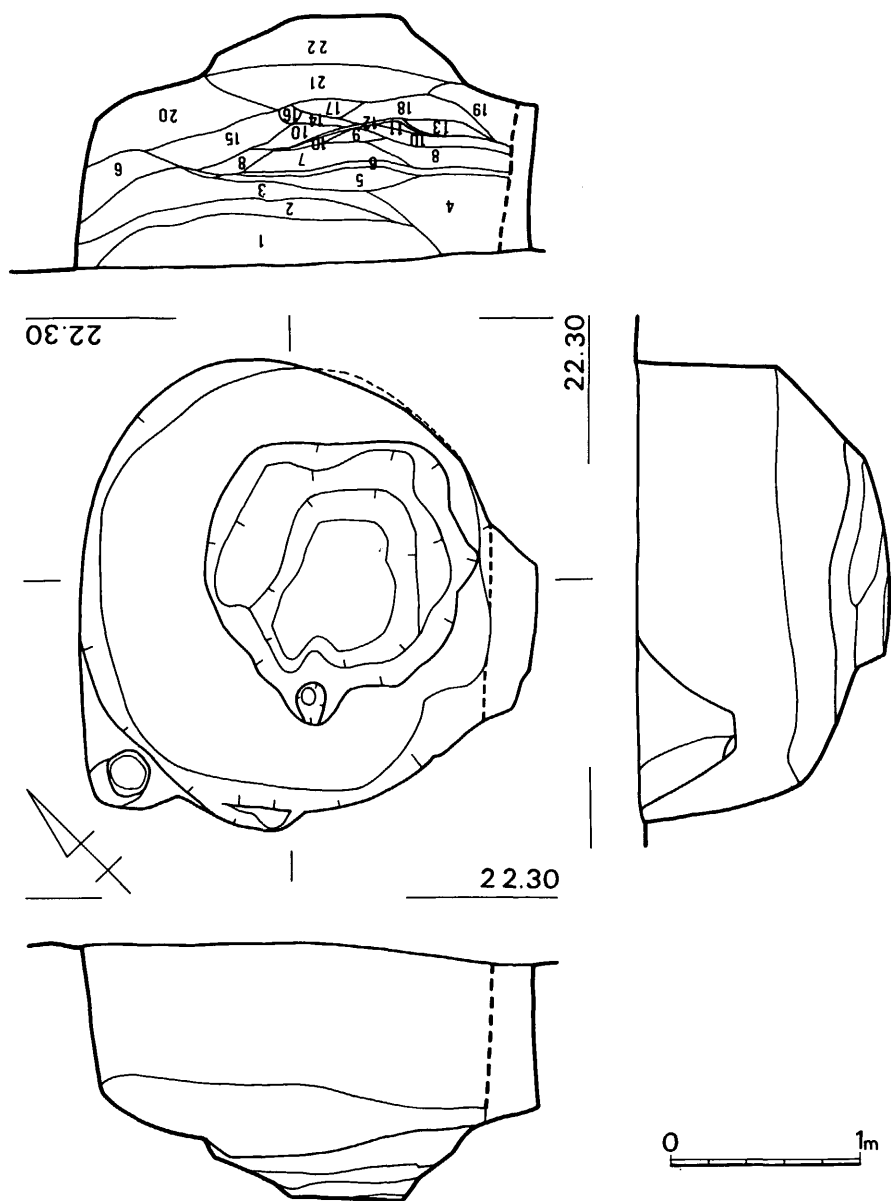
椀 龍泉窯系のものと思われる小片が出土した。

石鍋

口縁部に近い部位の小片で，滑石製である。器壁は厚く，縦長の取手をもつものと思われる。

SE2（第8図 図版2）

SE3から北側を切られた井戸で，井戸枠はすでに抜かれている。上面プランは2.2～2.3m，深さ1.25mを測る。床面は井戸枠を抜く際に崩れたのであろうか，かなり明瞭さを欠くが，中央部は一辺1m程度の隅丸方形プランで，1段深くなっている。



第8図 SE 2遺構実測図(縮尺1/40)

断面は下層において比較的北側からの投げ込みが多く、上層では南東側からの投げ込みが多いようである。また埋土のほぼ中位に木質の層が見られた。

出土遺物(第9・10・11図 図版6・7・8・12)

土師器

皿a(1~44) 1/4程度以上残存しているものは66個体を数え、そのうち1層からの出土が

SE02土層観察表

- 1層 淡茶褐色土層 (大量の土器片を含む)
- 2層 淡茶褐色土層 (1層よりやや淡い)
- 3層 淡灰褐色土層
- 4層 淡灰褐色土層 (3層より淡い)
- 5層 淡灰褐色土層 (3・4層より灰色味が強い)
- 6層 褐色土層 (やや灰色味を帯びローム様となる)
- 7層 黄褐色土層 (灰色土や褐色土を混入)
- 8層 淡灰色土層 (黄褐色土や褐色土を混入)
- 9層 黒色土層 (スス・灰状となった層。ここで焼やしてはいない)
- 10層 暗灰褐色土層 (粒子が細かく、粘質を帯びる)
- 11層 暗茶褐色土層 (粒子が細かく、粘質を帯びる。やや灰色味を呈す)
- 12層 木質
- 13層 淡青灰色粘質土層 (わずかに淡灰色粘質土が混入する)
- 14層 黒褐色土層 (やや粘質を帯びるが、よくしまった層である)
- 15層 淡灰色土層 (8層よりやや暗く、淡青灰色粘質土を含む。粘質を帯びるが、粒子が淡い)
- 16層 淡赤褐色砂層 (鉄分を含んだ砂)
- 17層 灰色粘質土層 (青灰粘質土層を若干含み、しまりがよい)
- 18層 暗青灰色粘質土層 (粒子が細かく、しまりがよい)
- 19層 淡青灰色砂層と淡青灰色粘質土が交互に層をなしている。
- 20層 淡青灰色粘質土 (13層と類似するが、灰色土が多く層状に混る)
- 21層 濃青灰色粘質土 (18層より淡く、粒子もやや大きくなる。下部はしまりが弱い)
- 22層 青灰色粘質土 (やや濃い、21層より淡い、粒子は21層より大きく、微砂粒程度なる粘質砂である)

62個体を占める。2層からは2点、3・22層から各1個体の出土があった。口径8.3～9.3cm, 器高0.8～1.4cmを測る。底部の状況が確認可能なものは全て糸切り離して、板状圧痕をもつものがほとんどである。44は煤の付着が著しい。

皿c (45) 口径9.6cm, 器高1.8cm, 高台は高さ1.1cmを測る。高台を除けば皿aと同じ形態を呈し、底部は糸切り離してである。

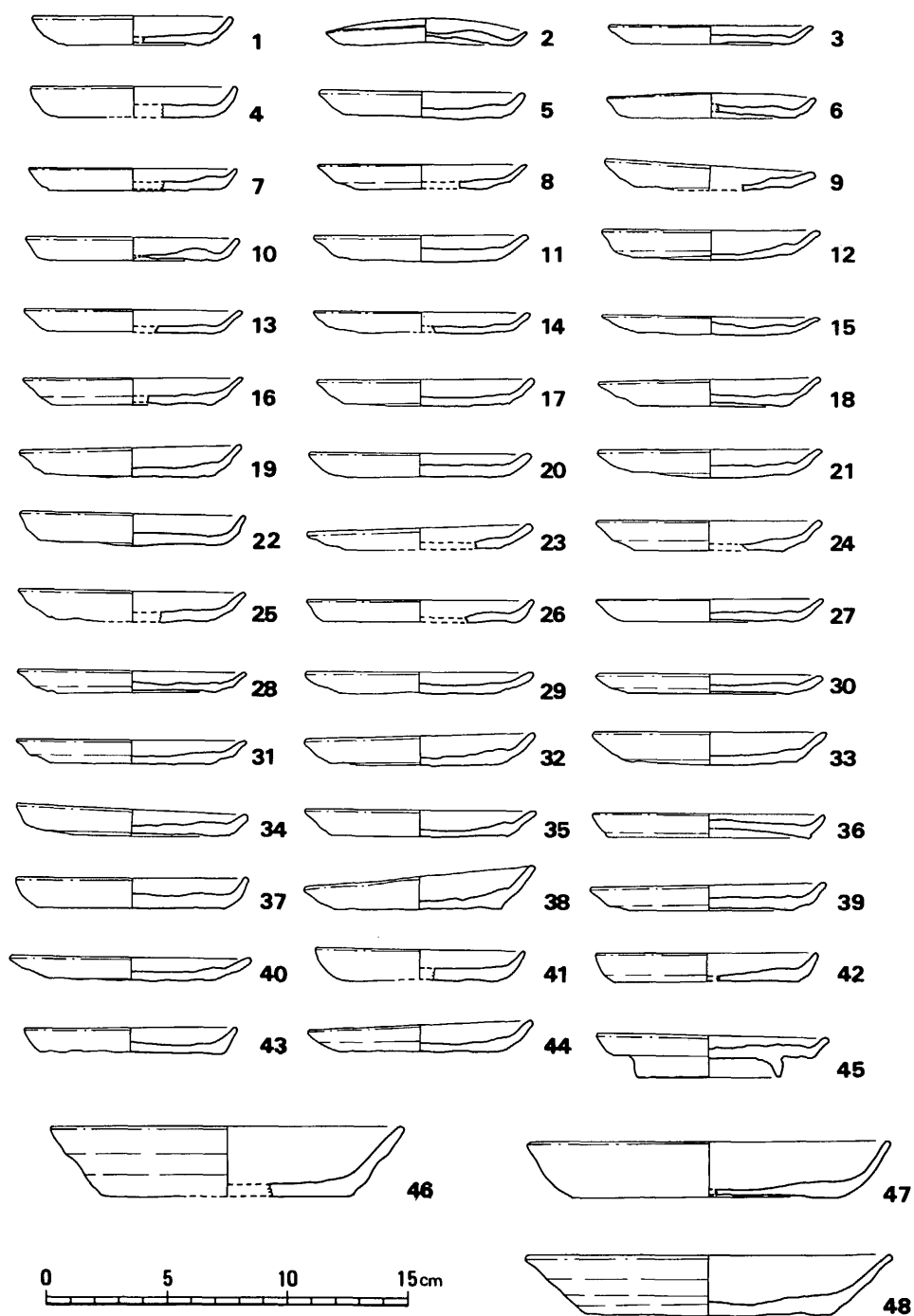
杯a (46～58) 1/4以上残存しているものは14個体を数え、1層から9個体、II層から2個体、III・IV層から各1個体、及び層位は明確でないが下層から1個体が出土した。口径は14.6～15.6cm, 器高2.5～3cmを測り、底部の状況が確認できるものは全て糸切り離して、板状圧痕がつくものが大半を占めるのは、前述の皿と同じ状況である。

瓦器

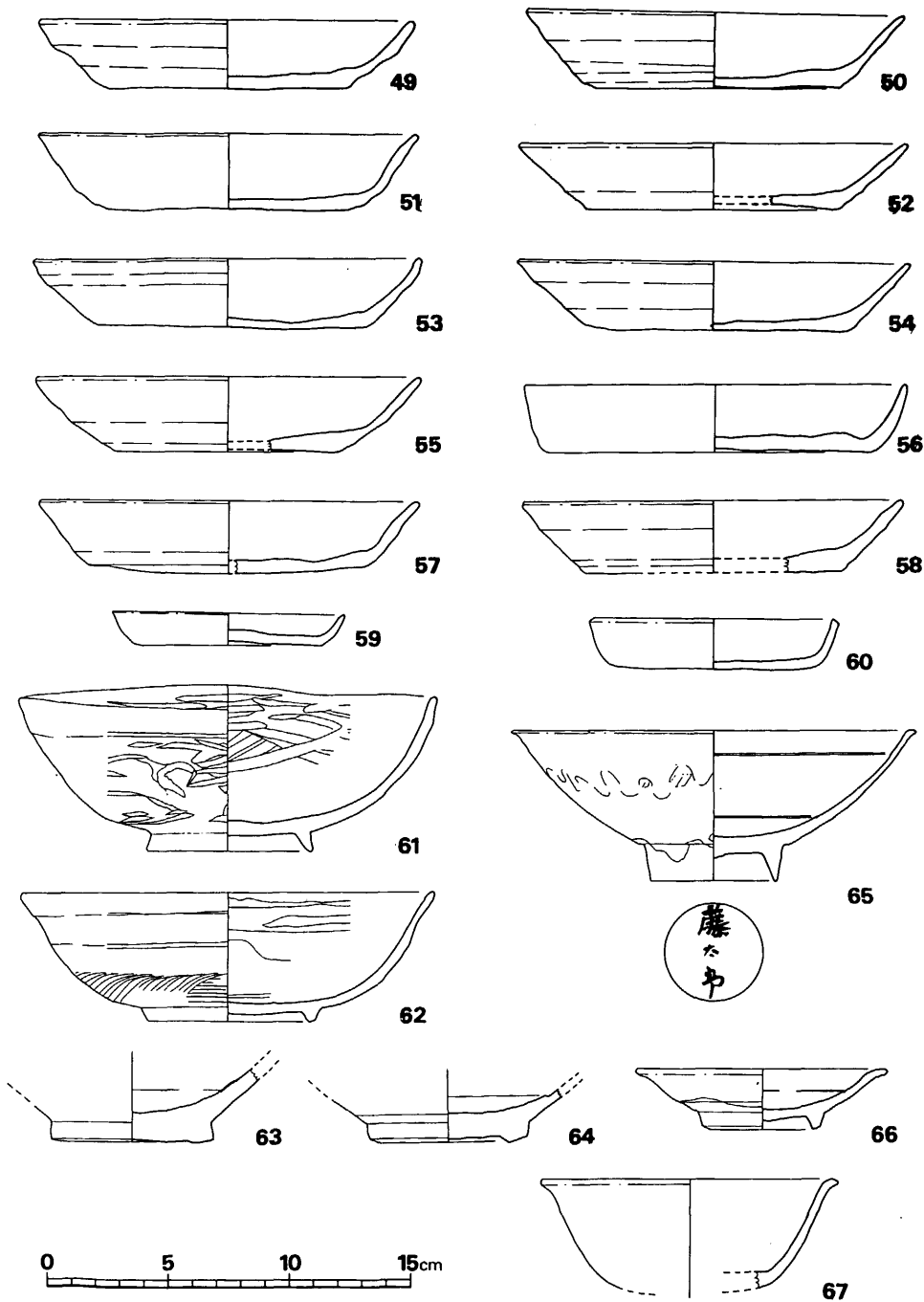
皿 (59) 口径9.6cm, 器高1.4cmを測る。底部は糸切り離して、形態・手法は土師器皿aと同じものである。

杯 (60) 口径10.2cm, 器高2.1cmを測る。杯にしては小形で、皿に近い法量を示す。体部にはミガキが施され、底部は糸切り離してである。

碗 (61・62) 61はややゆがみ、口縁部はヨコナデされるが、体部外面には指頭痕が多い。外面のミガキは調整による突出部のみに行なわれるが、内面は器面の凹凸も少なく、ミガキも密に施される。色調は青灰色～黒色を呈し、焼成も良好である。62は体部内外面ともヨコナデ



第9図 SE2出土土器実測図(縮尺1/3)



第10図 SE 2 出土土器・磁器実測図（縮尺1/3）

され、ミガキは十分でない。色調は淡灰色を呈し、焼成は軟質である。61・62とも糸切り離され、62には板状圧痕が残る。

白磁

碗 (63~65) 63・64はIV 1 aの底部で、高台は厚く、削り込みも僅かである。65は高い高台をもち、口縁部は水平に引き出され、V 4 aに属するものである。釉は青緑色を帯び、高台を除く全体に施釉される。外面見込みには「藤太郎」の墨書が見られる。

皿 (66) 口縁部が大きく外反し、高台は高い。釉は内面全体と、外面は体部中ほどまで施釉される。III 2に属するものである。

白磁は他にSM 6や表土からも出土した未分類の皿の小片が出土した。

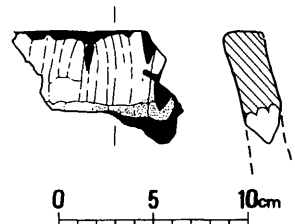
青磁

小碗 (67) 体部は直線的にのび、口縁部は短かく外反する。釉の発色は緑色が強い。龍泉窯系青磁I類に属するものである。

青磁は他に、同安窯系青磁碗I 1 bの体部小片が出土した。

石鍋

滑石製の口縁部片が出土した。



第11図 SE 2 出土石鍋実測図
(縮尺1/4)

SE 3 (第12図 図版2・3)

SE 2を切って掘られた井戸で、井戸枠は竹で構成される。

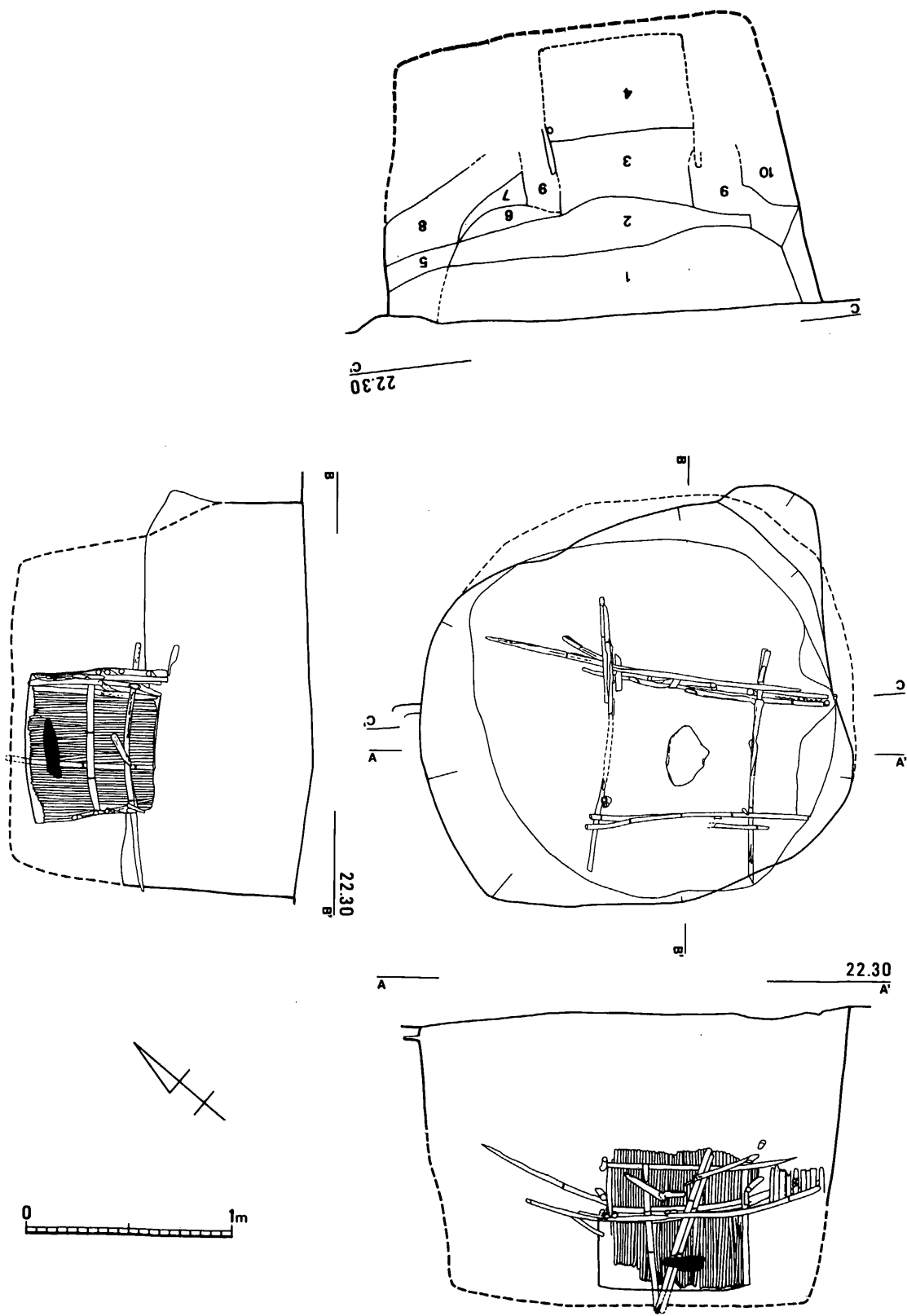
上面プランは直径1.8~2.1m程度の隅丸方形に近い円形を呈す。深さは約1.4mである。井戸枠は高さ60cmほど遺存していたが、北西部は調査中に崩壊した。構造は半截した竹を一辺60~70cmの四方形に立ててならべ、それを上下二ヶ所ではさみ横棧とする。横棧は丸のままの竹を用いる。側板にも部分的に丸のままの竹を立て補強し、北東部側板は横棧の内側に丸のままの竹を立て、さらにそれを横棧で押さえている。井戸枠の裏面は、井戸枠を取り上げるため十分に調査できなかったが、北東部の裏込めでは多量の竹が見られた。井戸枠内中央部の底に近い位置に認められた。石下は泥状となっており、井戸の使用終了後まもなく投げ入れられたものと思われる。

出土遺物 (第13・14図 図版8)

土師器

皿 a (1・2) 口径9.2~9.4cm, 器高0.9~1.2cmを測る。いずれも糸切り離して、2には板状圧痕がみられる。

杯 a (3・4) 口径14.4~15.2cm, 器高2.5~2.8cmを測る。4は井戸枠内の低位からの出土である。



第12図 SE 3 遺構実測図 (縮尺1/30)

SE 0 3 土層観察表	
1a層	青灰色土層
1b層	青灰色砂質土層
2層	明褐色土層（細かい砂粒でローム化しつつある様な状態，非常によくしまっている）
3層	青灰色粘質土層
4層	濃青灰色粘質土層
5層	淡灰色砂質土層
6層	淡青灰色粘質土層（灰色粘質土を多く混入し，全体に暗い色調を呈す）
7層	淡青灰色砂質土層
8層	灰色砂質土層（やや青味を帯びる）
9層	暗青灰色粘質土層
10層	明青灰色粘質土層

瓦器

碗（5・6） 口縁部は17.6～17.8cmを測る。5は小片である。ミガキは内外面とも密に行なわれる。6は逆三角形の低い高台をもち、内面には板状圧痕が見られる。焼成は5は良好であるが、6は軟質で器面が磨滅している。

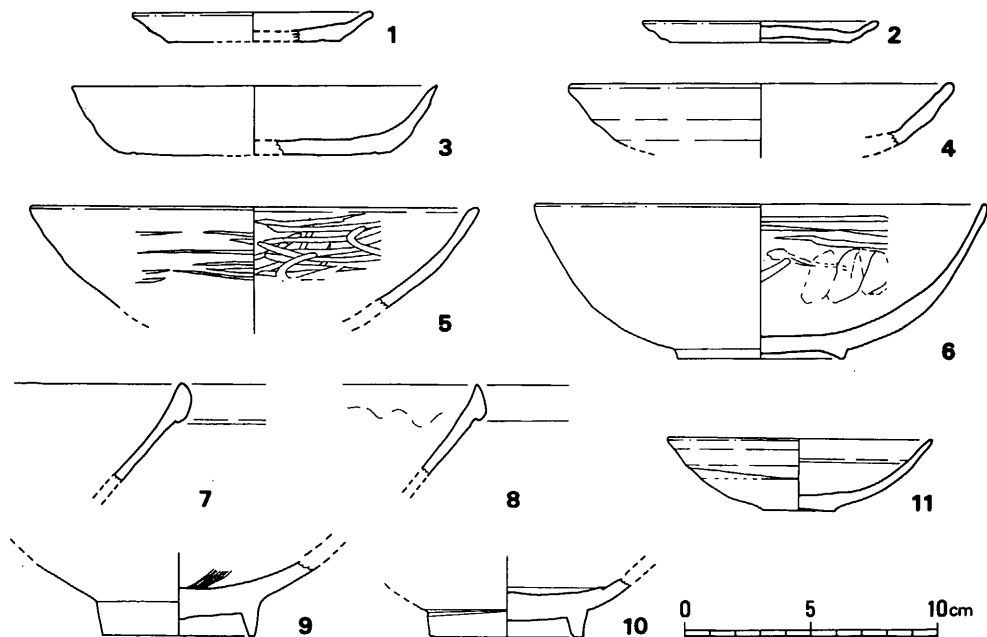
陶器

褐釉系陶器の壺，または鉢になると思われる小片が2点出土した。

白磁

碗（7～10） 7・8は口縁部を玉縁にするIV類の小片である。9・10は高く直立した高台をもつV類の底部で、9には櫛目文が残る。

皿（11） 比較的器壁が薄く，底部はやや上げ底状になる。体部は内弯気味に立ち上り，口



第13図 SE 3 出土土器・磁器実測図（縮尺1/3）

縁部は僅かに外傾する。釉は黄緑色を帯び、外面体部から内面全体に施釉される。IV 1 a に属するものである。

他に碗II 1・V 1・V 4 a に属す小片が出土した。

青磁

龍泉窯系碗I 2～4 に属する底部が出土した。

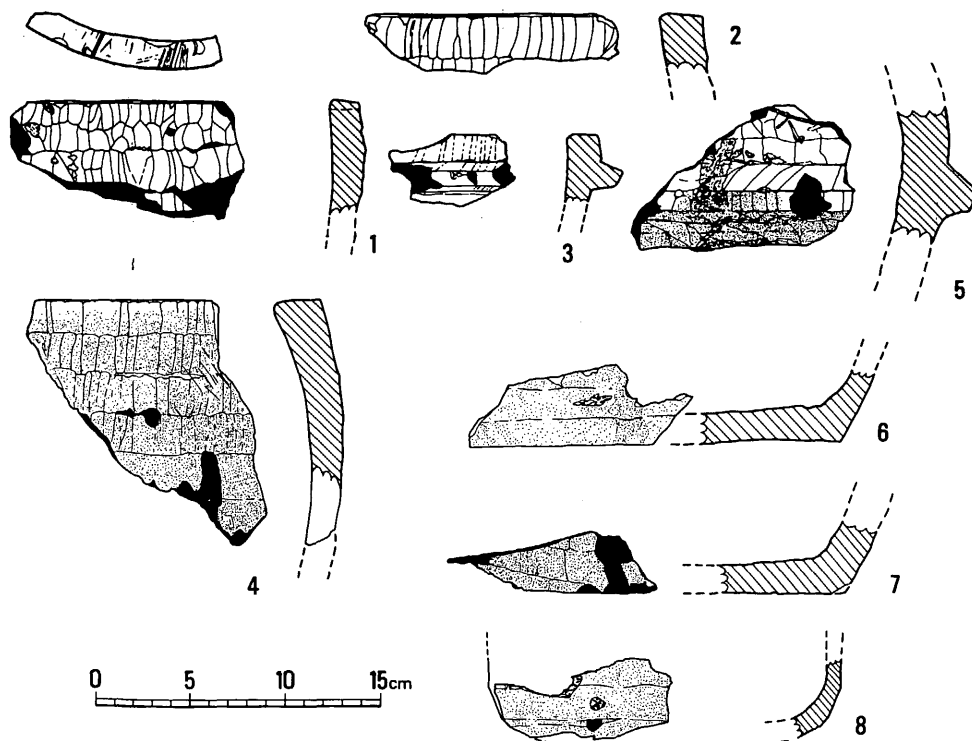
石鍋（1～8）

SEの3は石鍋の出土量が多く、全て滑石製である。

1は口縁13.8cmと推定される口縁部で、上端の2ヶ所に切り込みが認められる。3は口縁下1.5cmに幅約1.5cmの鏝を削り出す。4は井戸枠内の石の下から出土したもので、復原口径は約45cmである。外面全体に煤が付着する。5は鏝が認められるため、口縁部に近い部位の破片であろう。鏝は幅2.5cmを測り、下面には煤が付着する。6～8はいずれも底部で、煤の付着が著しい。8は6・7のように角ばることなく、ゆるやかなカーブを作り出している。

種子

モモの種が4個体出土した。



第14図 SE 3 出土石鍋実測図（縮尺1/4）

SE 4 (第15図 図版 3)

上面プランは西側をピットに切られ、明瞭さを欠くが、直径 2 m 前後の円形を呈す。床面は 65～90cm 程度の不整長円形で、深さ 90cm を測る。

出土遺物 (第16・17・18図 図版 8・9・12)

土師器

皿 a (1～26) 1/4 以上残存するものは 38 個体で、うち 37 個体が 1 層からの出土で、残りの 1 個体が II 層から出土した。口径は 7.4～10cm、器高は 0.8～1.2cm を測るが、大半は口径 9～9.5 cm の範囲内に集中する。36 個体は底部の状態が観察され、いずれも糸切り離しで、板状圧痕をもつものも多い。

杯 a (27～47) 1/4 以上残存するものは 11 個体で、27 を除き口径 15.4～17.8cm、器高 2.4～3.1 cm を測る。1 は小形のもので、口径 11.9cm、器高 2.3cm を測る。底部を欠失する 2 個体以外は糸切りが見られ、5 個体に板状圧痕がつく。

高台付碗 (34) 1/4 程度の破片である。高台はとれ、磨滅が著しい。口径は 16cm と推定され、器高は 6.5cm 程度になるものと思われる。

黒色土器

碗 (35) A 類の底部片で 4 層上位より出土した。全体に磨滅が著しい。

瓦器

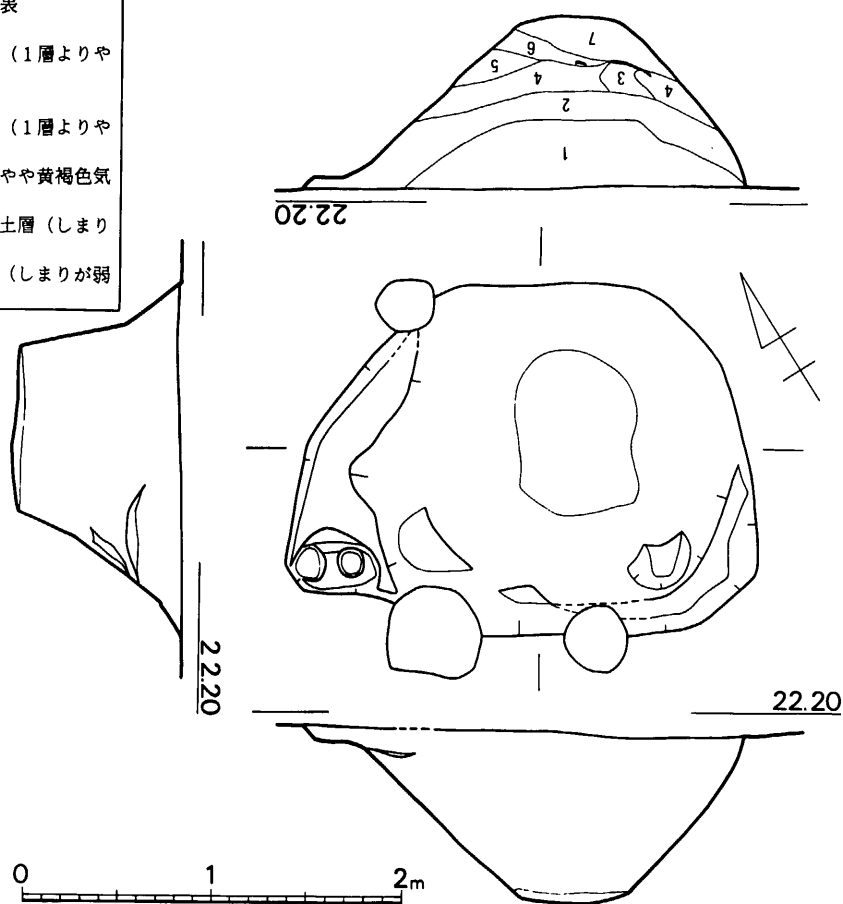
皿 (36) 底部は糸切りで、形態や調整などは土師器皿 a と同じである。

碗 (37・38) 口径 16.4～16.8cm、器高 5.4～5.8cm を測る。37 は完形であるが、焼成があまり器面の磨滅が著しい。ミガキは明瞭に観察できないが、内外面に比較的密に行なわれているようである。38 は底部のみ完存し、口縁部は一部しか残っていない。底部には僅かに板目が残る。ミガキは内外面とも施されるが、外面をより密に施す。切り離しは糸切りである。

白磁 (39～47)

碗 (39～46) 39 は玉縁をなす IV 類である。40 は底部が厚く、高台の削り込みも浅い IV 1 a に属す。42 は V 類の底部で、比較的厚く、直立した高台を有す。41 はほぼ完形で、口縁部の引き出しが弱く、端部は丸くおさまる。高台の削り込みはやや浅めで、底部は厚い。釉は緑色を帯び、外面は口縁下 3 cm たらずの部位までしか施釉されていない。43・44 はいずれも 1/4 前後の口縁部の破片で、43 は 41 と同様に施釉が浅い。45 はほぼ完形である。底部は細く、高い。外面体部には化粧土が施される。41・43～45 はいずれも V 4 a に属し、ヘラ削りが体部下位でおさまっている。46 は完形に近いもので、口縁部は短かく引き出され、体部は直線的に外傾して立つ。高台は広めで、内面の削り込みも比較的浅い。内面口縁下に沈線を有し、見込みも段状の沈線をめぐらす。釉は強い緑色を帯び、高台を除き全面に施釉されるが、内面見込みは輪状にカキ取られる。VIII 3 に属すものである。

SE04土層観察表	
1層	暗茶褐色土層
2層	暗茶褐色土層（1層よりやや淡い）
3層	暗黄褐色土層
4層	暗茶褐色土層（1層よりやや暗い）
5層	茶褐色土層（やや黄褐色気味）
6層	濃青灰色粘質土層（しまりが強い）
7層	淡茶褐色砂層（しまりが弱い）



第15図 SE 4 遺構実測図（縮尺1/40）

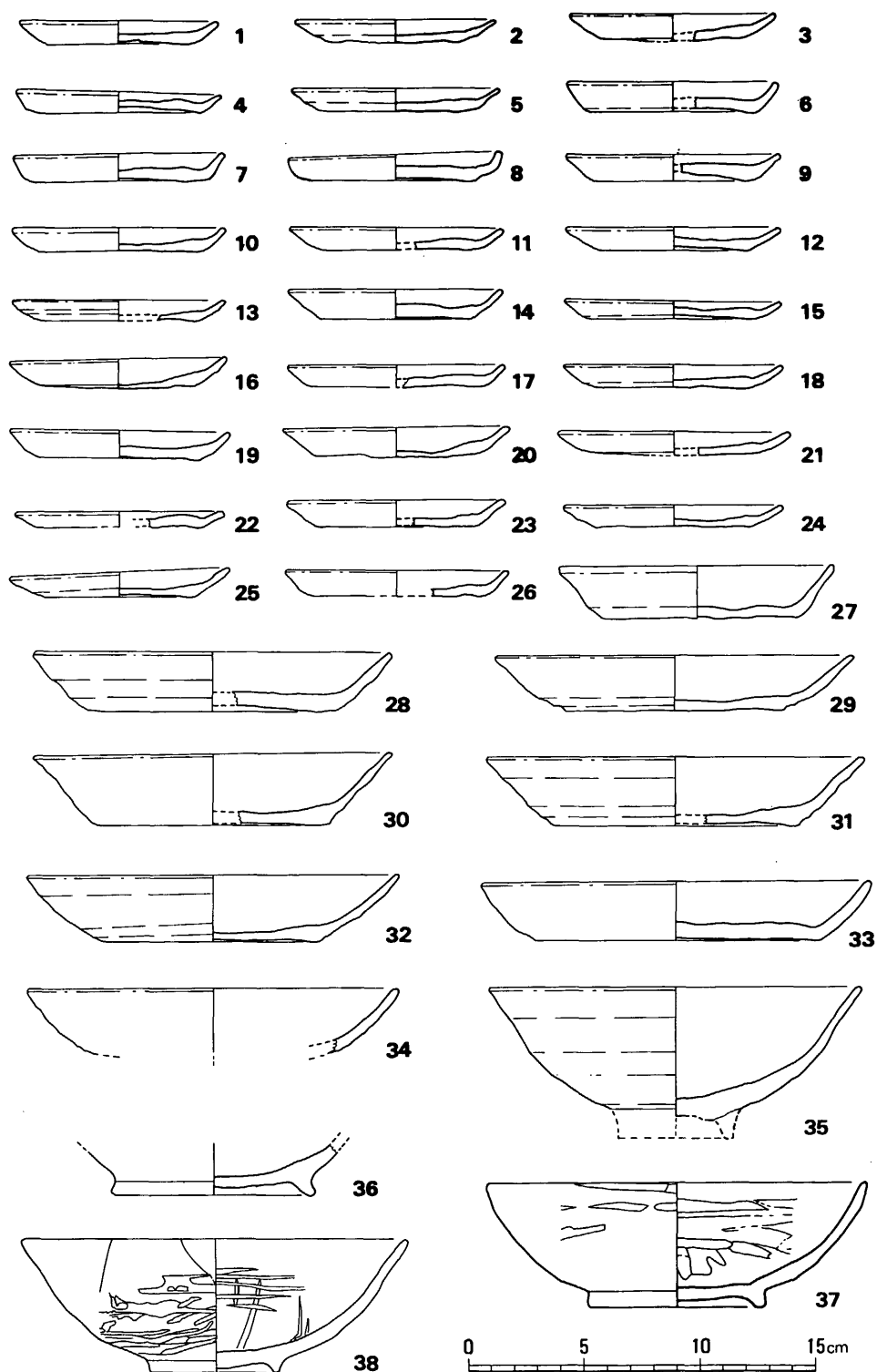
皿（47） 外面はゆるやかなカーブを描くが、内面は体部で内弯し、その屈曲部の内面に沈線状の段をもっている。釉は空色を帯び、厚目に施釉される。底部の釉は施釉後、削り取っている。内面見込みには草花文と思われる文様が彫られる。Ⅷ 1 に属するものである。

白磁は他に皿Ⅲ 1 の口縁部片が出土する。

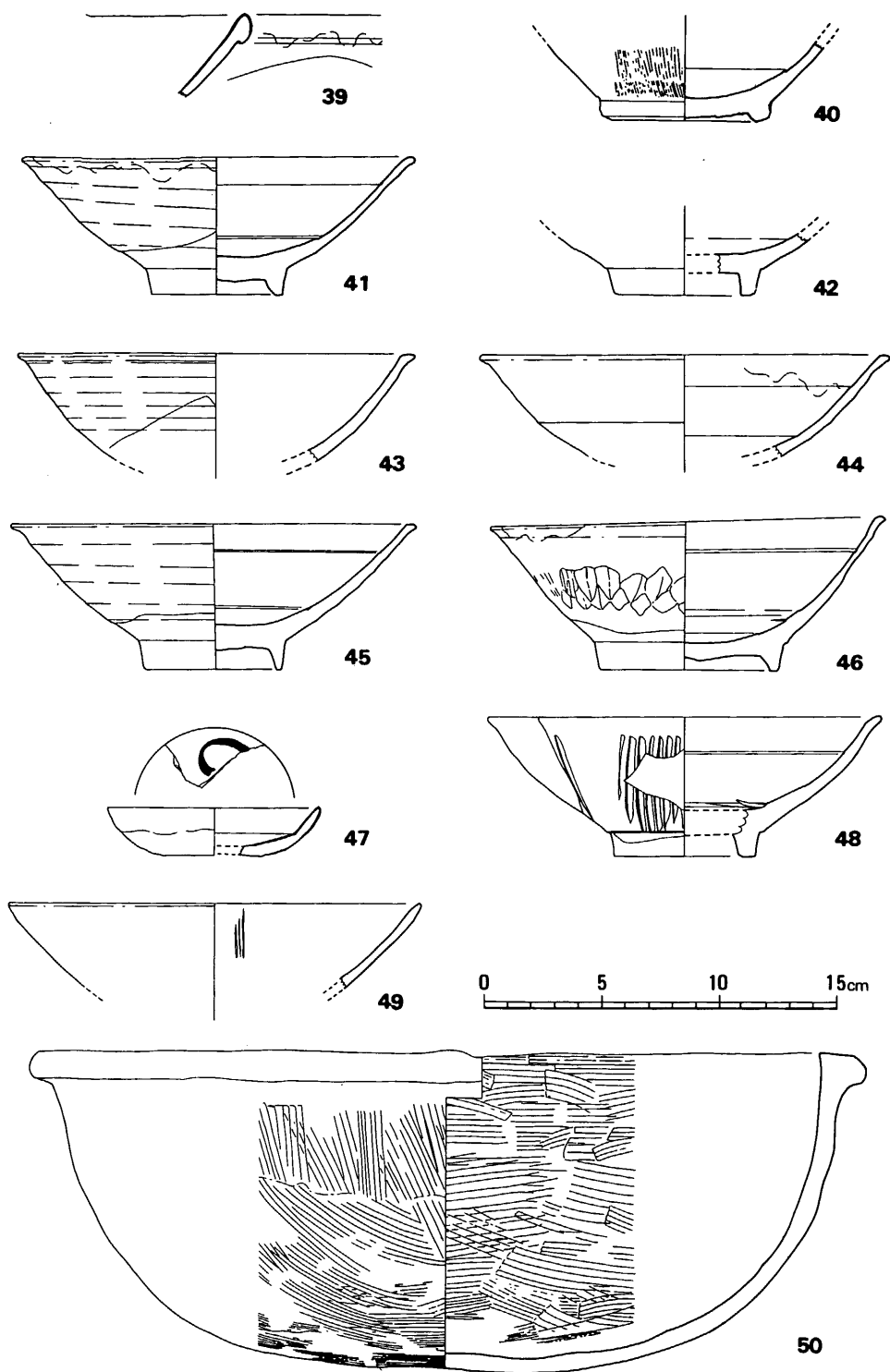
青磁

碗（49） 1/5程度の口縁部片である。体部上位は比較的直線的に外傾し、口縁部は僅かに立ち上る。胎土は暗灰色を呈し、釉は緑色を帯び、非常に薄く施釉される。内面には櫛目が認められる。

青磁は他に龍泉窯系青磁碗Ⅰ 1，Ⅰ 4 bなどの小片が出土した。



第16図 S E 4 出土土器実測図 (縮尺1/3)



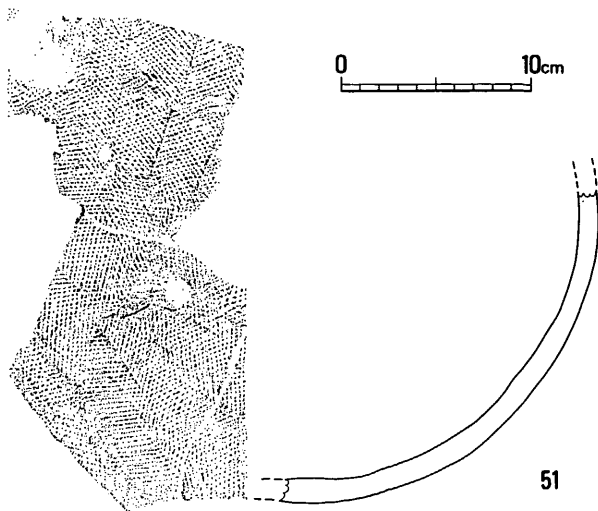
第17図 SE 4 出土土器・磁器実測図 (縮尺1/3)

土鍋

口縁部は短かい逆し字状を呈し、口縁下はほぼ垂直に下る。体部下半はゆるやかなカーブを描き、底部は平坦面を有す。調整は口縁部にヨコナデを行い、他は刷毛目を施す。

甕

断面部から3層と7層にはさまれて出土したものである。破片下端が、底部中央になると思われる。内面は粗れ調整は不明であるが、外面は稜杉状の叩きを半分ずつずらし、格子を組むように施される。外面底部には赤変が見られる。



第18図 SE 4 出土甕実測図 (縮尺1/4)

SE 5 (第19図 図版3)

上面プランは直径1.4mの円形を呈す。深さ約60cmを測る。掘り方は深さ30cmで、さらに曲物を埋め込む。曲物は上端で直径約35cmで、高さは23cmであるが、断面を観察すると30cm余りあったものと推測される。曲物の中からは土鍋と木片が出土した。

出土遺物 (第20図)

瓦器

碗(1) 底部を欠失する1/3程度の破片で、体部下半には糸切り離しの痕を比較的よく残す。焼成はあまく、磨滅が著しい。

土鍋(2)

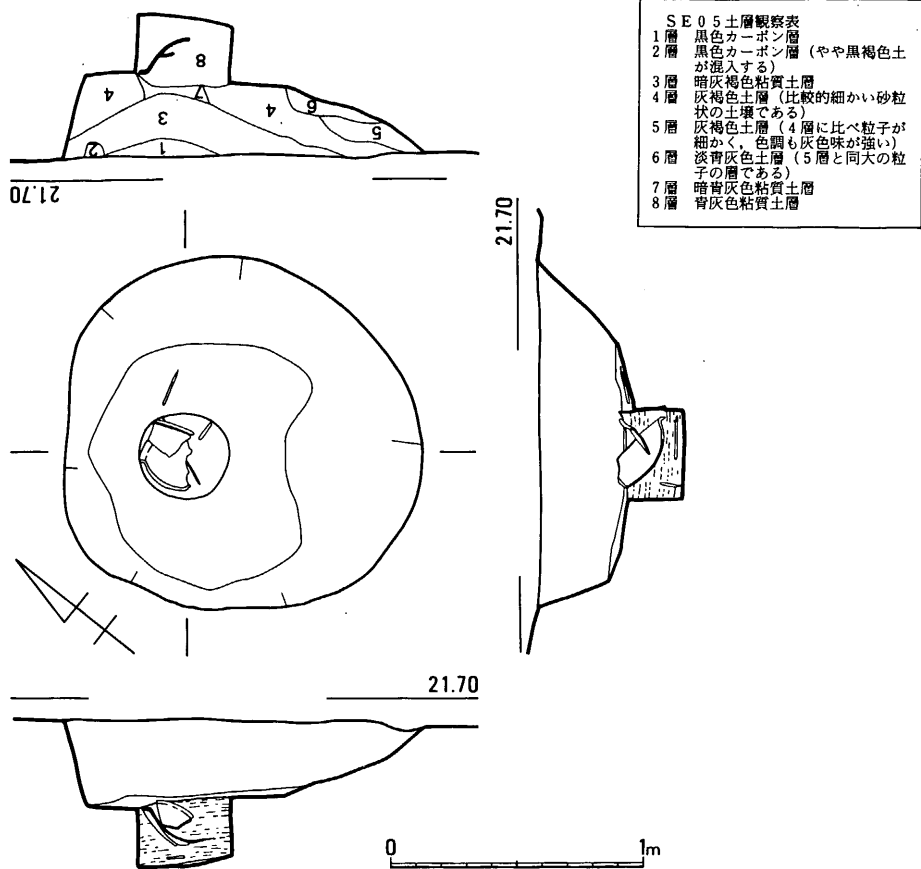
大形のもので口径47cmを測る。口縁部は外弯し、体部上位は直線的に外傾する。体部下半は丸味をもって下るが、底部は欠失して不明である。外面体部上位から口縁部にかけて煤が付着する。内面は一体に焦げつきが見られる。胎土は粗く、砂粒が多い。

4 土壌

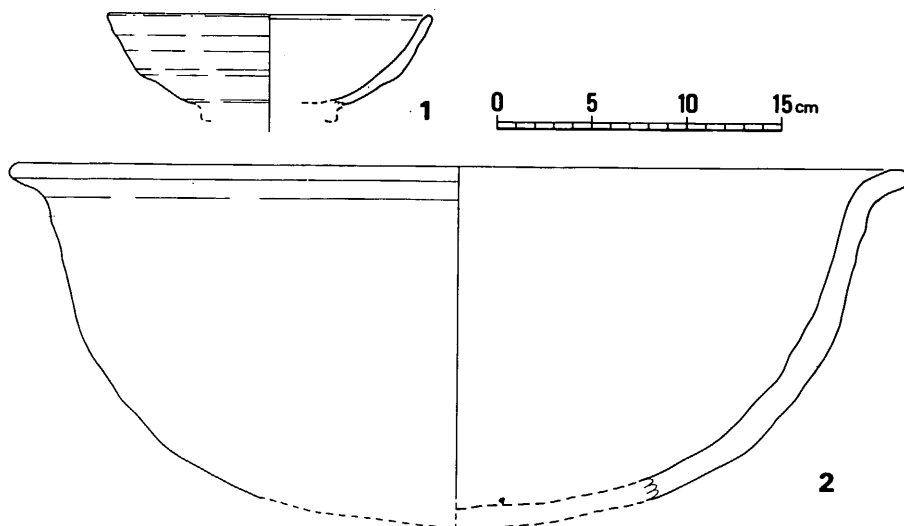
土壌は調査区北側で2基検出された。

SD 1 (第21図 図版4)

調査区西隅で検出した土壌である。上面プラン1.5m×1.2mの卵形を呈し、深さは20cm余りを測る。西側から東側にかけて徐々に深まり、東側はまっすぐに落ちている。床面には礫が3



第19図 SE 5 遺構実測図（縮尺1/40）



第20図 SE 5 出土土器実測図（縮尺1/4）

個認められた。

出土遺物 (第22・23図 図版9・13)

土師器

皿 a (1~4) 1/4以上残存するものは8個体出土した。口径8.4~9.6cm, 器高1~1.9cmを測る。全て糸切り離しで, 板状圧痕が6個体に認められた。

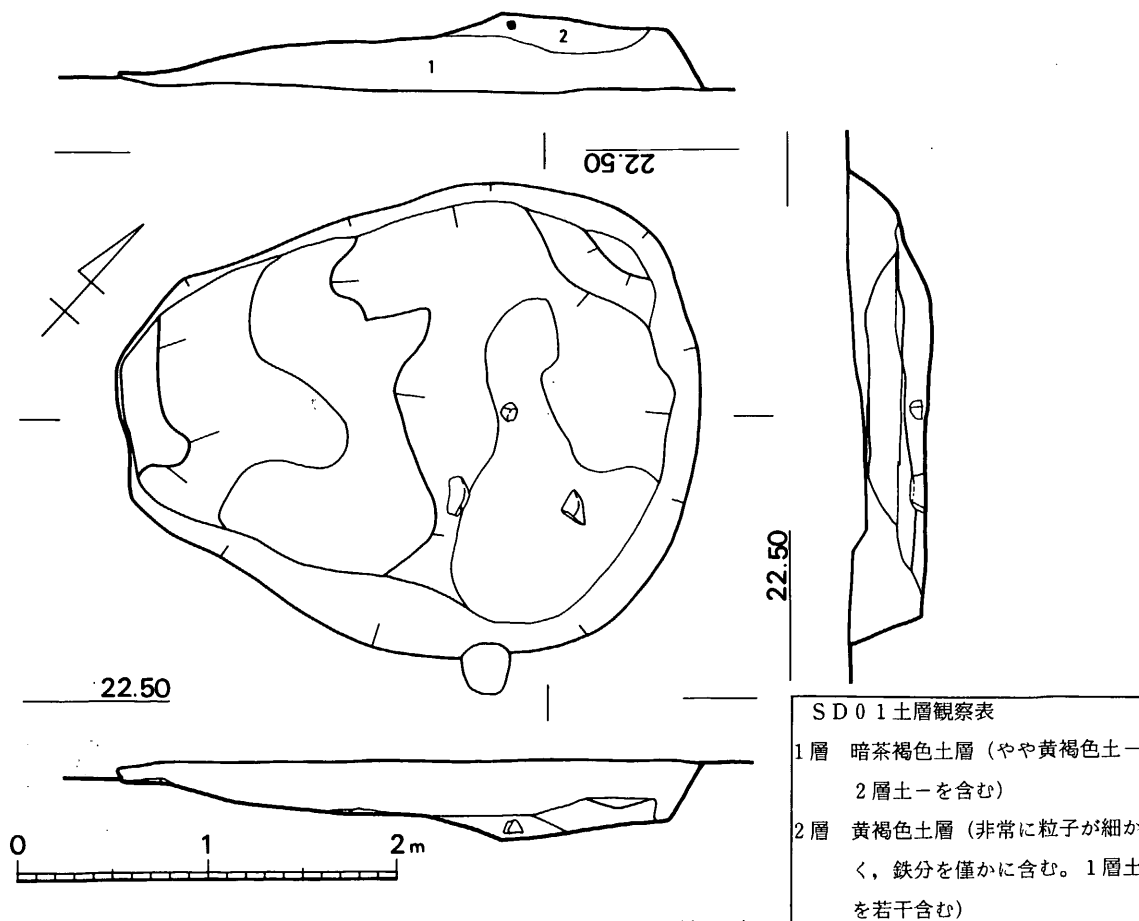
瓦器

皿 (5・6) 口径9.6・10.2cmで, 6はやや大形である。5の底部は糸切りで, 体部下半はヘラ削りされる。また体部内外面にはミガキが施される。6は焼成があまく, 器面が磨滅する。

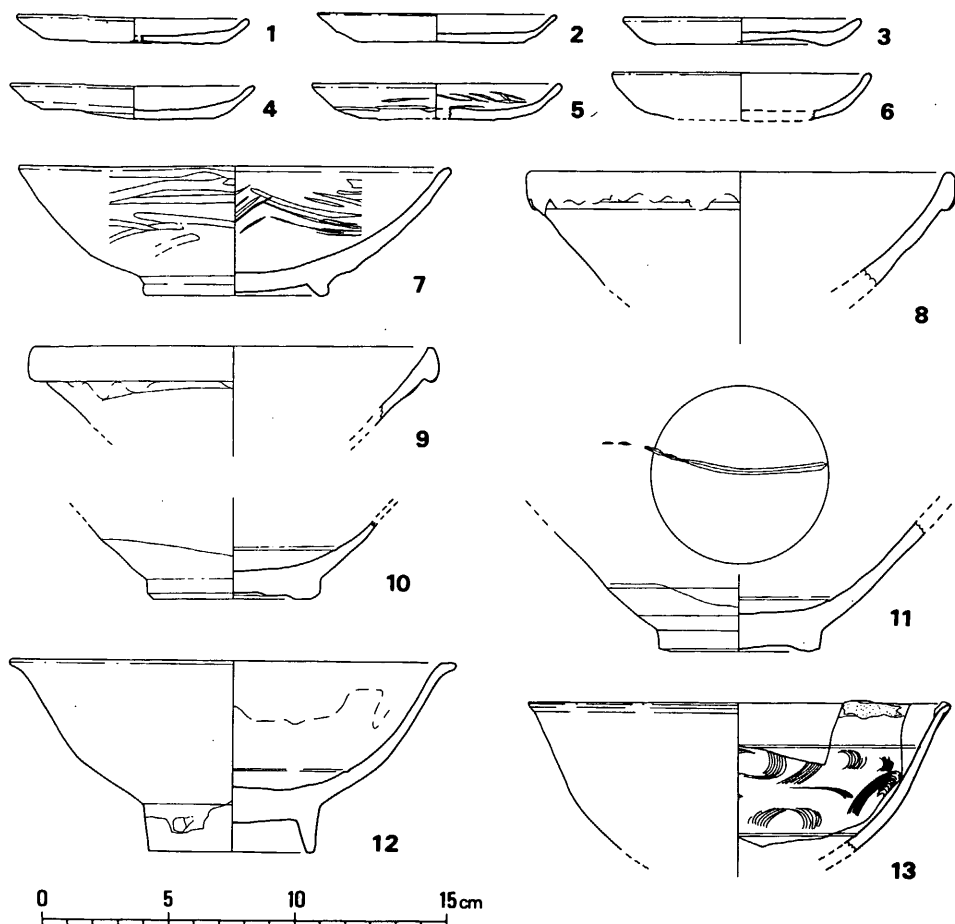
椀 (7) ほぼ完形である。高台は外傾に傾斜して貼付され, 内面には板状圧痕が残る。焼成があまく, 器面はやや磨滅しているが, 内外面に密にミガキが施されている。

白磁

椀 (8~11) 8・9は口縁部を玉縁にするIV類である。9は淡黄褐色の胎土を呈す。釉は黄灰色を帯び, 外面の施釉は口縁下約3.5cmにとどまる。8は空色を帯びる釉が施される。

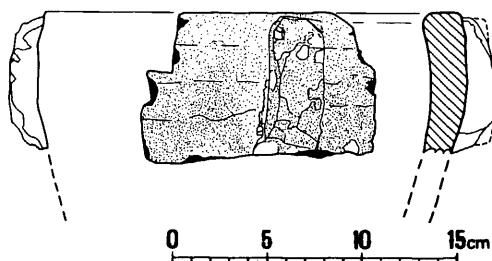


第21図 SD 1 遺構実測図 (縮尺1/4)



第22図 SD1出土土器・磁器実測図（縮尺1/3）

10・11は底部が厚く、高台の削り出しが浅い。内面見込みには沈線状の段をもつ。IV I aに属するものである。11は施釉前、見込みにヘラ状工具で一本の沈線を入れる。12は口縁部が水平に引き出され、高台は細高い。底部はやや厚目である。釉は黄灰色を帯び、高台を除く全面に施釉され、一部は高台上位まで流れる。V 4 aに属するものである。13は口縁部から体部にかけての



第23図 SD1出土石鍋実測図（縮尺1/4）

の小片である。口縁部は斜め上方に引き出され、内面に焼成の際に付着した別の磁器の釉と胎土が見られる。また、内面口縁下と見込みに沈線をめぐらし、その間に櫛で花文を描く。V 4 bに属するもので、釉は緑色を帯びる。

石鍋

縦長の取手をもつ口縁部の小片で、滑石製である。口径は22cm程度と推定される。器面はかなり粗れ、外面は煤が一面に付着する。

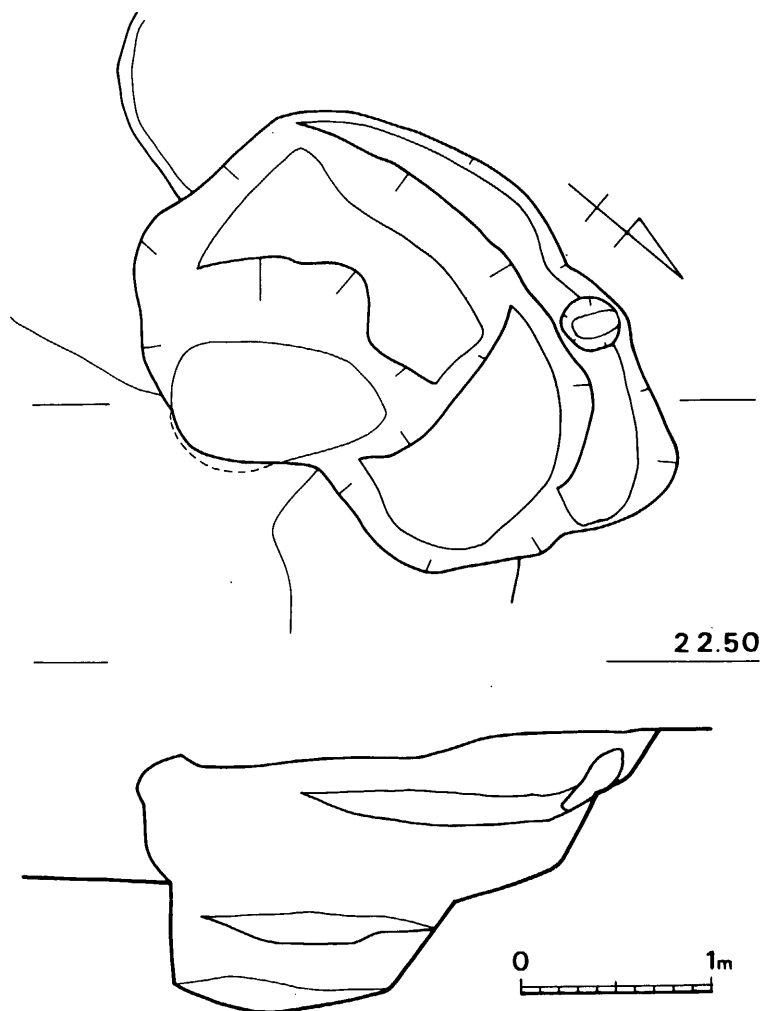
SD 2 (第24図)

溝1に切られた土壌である。南北1.3mを測り、3ヶ所に段を設け、徐々に深くなる。床面は50cm×35cmの卵形を呈し、井戸であった可能性もある。

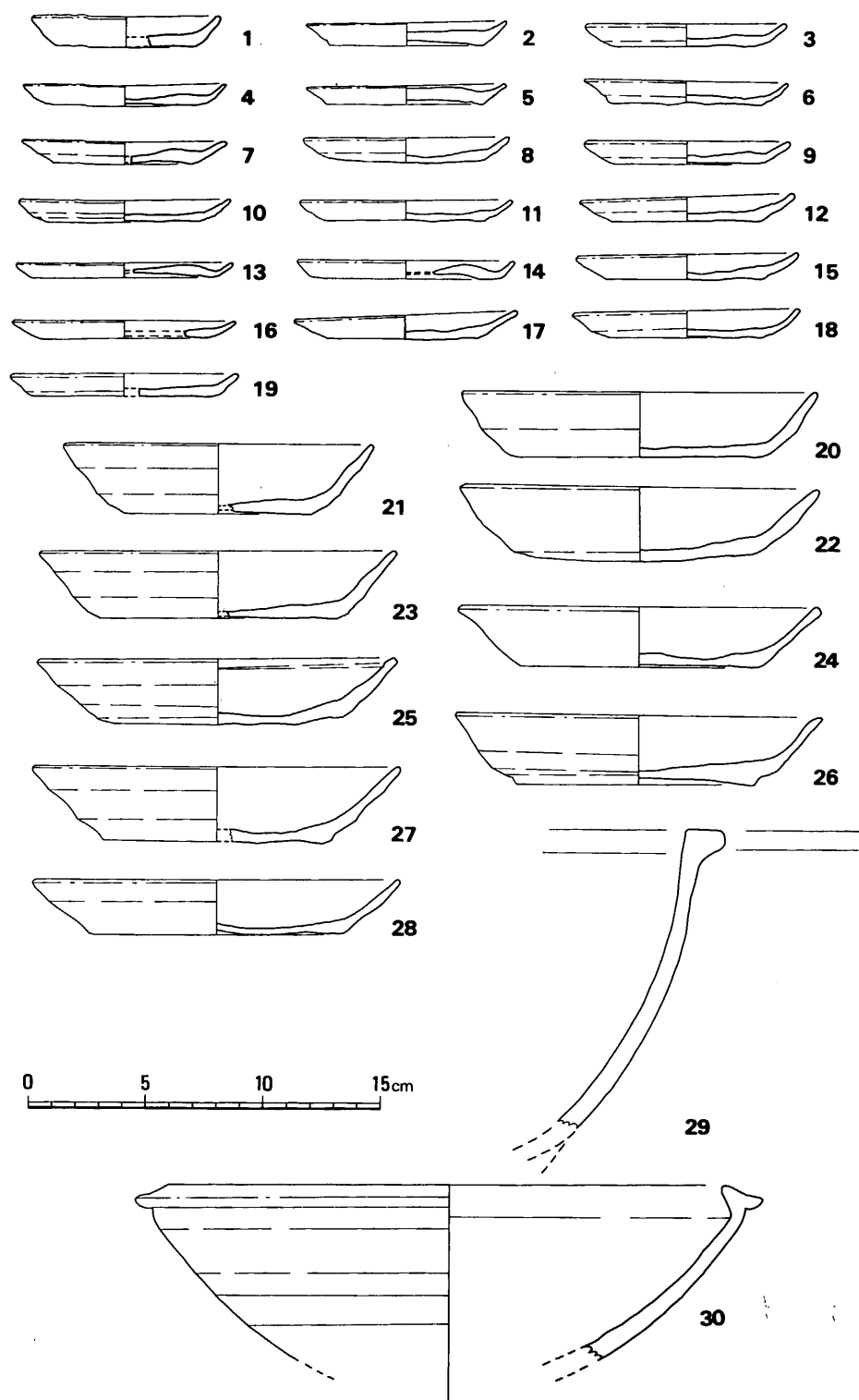
出土遺物 (第25図 図版9・10)

土師器

皿a (1~19) 口径は8~9.7cm, 器高0.8~1.3cmを測る。底部の切り離しが確認できるも



第24図 SD 2 遺構実測図 (縮尺1/40)



第25図 S D 2 出土土器実測図 (縮尺1/3)

のは全て糸切りであるが、他の遺構出土のものに比べ、板状圧痕を有するものが少ない。1は他の皿に比べやや小形である。

杯 a (20~28) 21を除き口径15.1~15.6cm, 器高2.4cmを測る。21は他の杯に比べ小形で、口径13.2cm, 器高3cmを測る。21は小片からの復原である。底部は切り離しが確認できるものはすべて糸切りである。

土鍋 (29)

口縁部の小片で、器壁は比較的薄い。口縁下には刷毛目が認められるが、全体に磨滅が著しい。

陶器

鉢 (30) 口縁部を「く」字状に深く折り曲げ、「T」字形をなす。体部は口縁部近くまでヘラ削りされる。胎土は明褐色を呈す。VI類に属するものである。

5 溝 (第26・27図 図版4)

溝は10条を検出した。

SM1 ほぼN-35°-Eに方位をとり、調査区を横切る形で検出された。西側は2本に分かれ、一本は北西方向に大きく向きを変える。規模は北側の分岐点から中ほどにかけて幅約4~3.5m, 深さ約60cm, 東側では幅約3m, 深さ約50cmを測る。断面は西端一ヶ所のみを観察であったが、調査全般にわたって青灰色土のI層が埋土の大半を占めていた。

SM2 調査区西側で検出された溝で、東側へやや弧を描いている。非常に残りが悪く、幅1.5~0.8mほどで、深さは最も深い部分で20cm余りを測る。

SM3 SM2の北西脇から南東へ向い検出された。上部に炭を混えた層が観察された。南端はピット状となっているが、このピットが溝に伴うものかどうかは確認しえなかった。

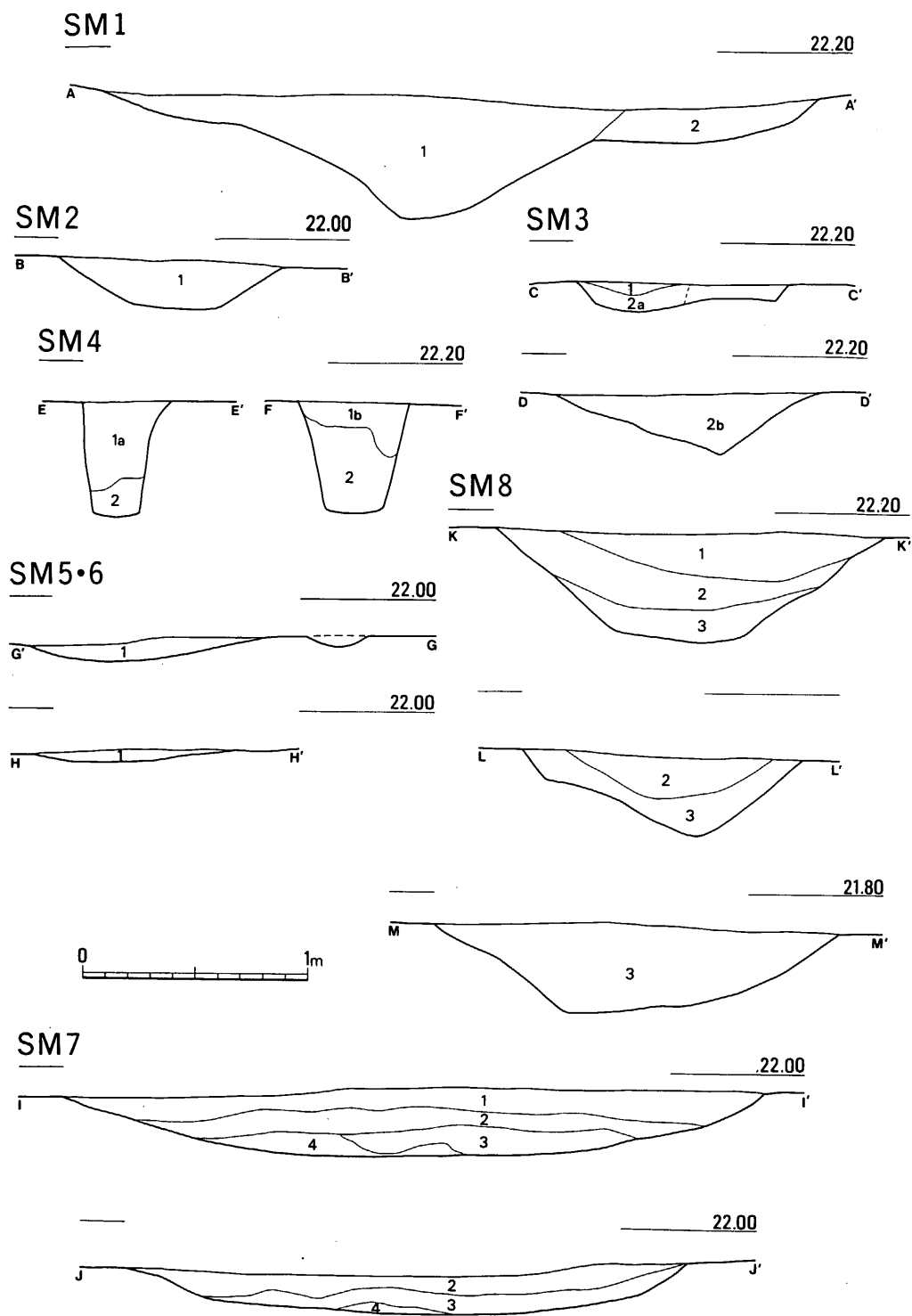
SM4 凹状に掘られた溝で、幅約40~50cm, 深さ約50cmを測る。N-50°-Wにほぼ直線的に検出された。I層は炭を含むが、II層は堅くしまっていた。

SM5 調査区の中央をほぼN-38°-Wに方位をとり流れる。溝の残りはきわめて悪く、全長10m余り遺存するにすぎない。

SM6 溝5の東側脇で検出された溝で、残りが悪く北側は消失する。幅は1~1.5m程度、深さは10cm足らずで、南側は西へやや弧を描く。

SM7 調査区のほぼ中央をN-40°-Wの方位をとり、直線的に流れる溝である。幅は2.5~3m, 深さ約30cmを測る。北西端は東側がせばまり、幅30cmほどで西壁添いに流れる。

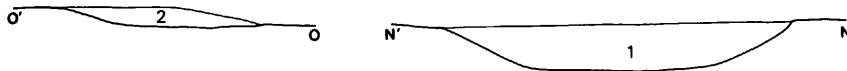
SM8 SM7のさらに南に位置し、幅1.5~2mを測る。北西端はSM1を越え、4m先が端部である。北西部はSM7とほぼ同じ方位で流れた後、中ほどから東に屈曲しN-65°-Wの方位をとる。南半は多くの遺物を包含していた。



第26図 SM1～8断面実測図 (縮尺1/60)

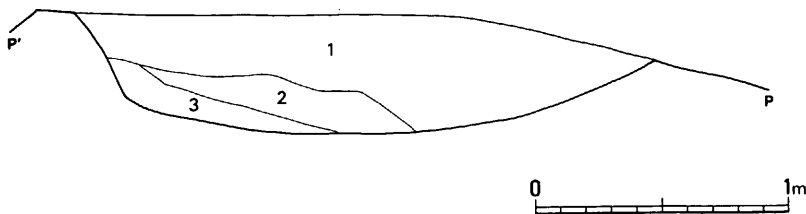
SM9

22.00



SM10

22.00



第27図 SM9・10断面実測図 (縮尺1/60)

SM01土層観察表

1層 青灰色土層

2層 暗茶褐色土層

SM02土層観察表

1層 茶褐色土層

SM03土層観察表

1層 暗茶褐色土層 (多量の炭と焼土を含むか、2cm以下の小さなブロックが混在する)

2a層 暗茶褐色土層

2b層 淡茶褐色土層

SM04土層観察表

1a層 淡黒褐色土層 (若干炭を含み、下位に行くほど1b層に近い色調になる)

1b層 暗茶褐色土層 (炭を極僅かに含む)

2層 灰褐色土層 (灰色にやや黄褐色味がかった色調で、よくしまっている)

SM05・06土層観察表

1層 暗茶褐色土層 (比較的しまりが弱い)

SM07土層観察表

1層 淡灰褐色土層 (非常に細かい砂粒をベースに1mm大の砂粒を含む)

2層 淡灰色土層 (1層と同じ性格の土であるが1mm大の砂粒がやや多い)

3層 淡灰褐色土層 (ベースは1・2層と同じ性格であるが、1~2mm大の砂粒を若干含む)

4層 淡茶褐色土層 (1~3層と同じ性格の土をベースとするが、1mm以上の砂粒は極少ない)

SM08土層観察表

1層 黒褐色土層 (炭化物・焼土を含む)

2層 茶褐色土層 (1層に比べ、やや粒子が大きい)

3層 淡茶褐色土層 (砂質に近く、粘質・しまりとも弱い)

SM09土層観察表

1層 暗茶褐色土層 (0.5~2mm程度の砂粒を若干含む)

2層 暗茶褐色砂質土層 (0.5mm以下程度の比較的細かい砂粒を中心とする)

SM10土層観察表

1層 暗茶褐色土層 (比較的細かい粒子をベースに1mm大の砂粒をやや多く含む)

2層 暗灰色砂質土層 (非常に細かい粒子をベースに1~3mm大の砂粒を多く含む)

3層 暗褐色土層 (比較的細かい粒子をベースに1mm大の砂粒をやや含む。全体に若干粘質を帯び、しまりも比較的良好)

SM9 SM7・8に直交して流れ、幅1m前後を測る。東端はSM8の先2.5mにあり、西側はSM1に切られる。

SM10 SM9とほぼ同じ方位をとると思われるが、SM1から切られ一部分の確認に終わった。深さ50cmを測る。

溝出土土器・陶磁器（第28・29・30・31・32図 図版10・11・12・13）

SM1

白磁碗（1） ほぼ中央部から出土したもので、完形である。内面口縁下と見込みに沈線をもつ。V4aに属すものである。

SM2

土師器

皿a（2～4） 口径はいずれも8.2cmで、器高は1～1.5cmを測る。底部はすべて糸切り離しで、2・3に板状圧痕が認められた。

杯（5） 口径13cm、器高3cmを測り、底部は糸切り離しである。

陶器

壺 無耳の壺の口縁部が出土した。

白磁

碗 IV類の口縁部、V類・VIII類の底部片が出土した。

土師器皿a（8） 口径9.8cm、器高1.1cmを測る。底部は糸切り離しである。

SM4

土師器

皿a（9～11） 口径9～9.8cm、器高1.2～1.6cmを測る。9・10には糸切り痕が認められた。

杯a（13～15） 口径12.1～12.8cm、器高2.6～2.8cmを測り、13・14は糸切り痕が認められた。

丸底の杯（12・16～20） 12は口径9.1cm、器高2.8cmを測る口形のものである。口縁部の一部には内外面に煤が付着する。16～20は口径15.3～16.3cm、器高3.4～3.7cmを測る。20には糸切り痕と板状圧痕が認められた。

碗（21） 口径16.8cm 器高5cmを測る。高台は短かく外傾してとりつけられる。器面は磨滅が著しいが、内外面に煤の付着が認められた。

瓦器

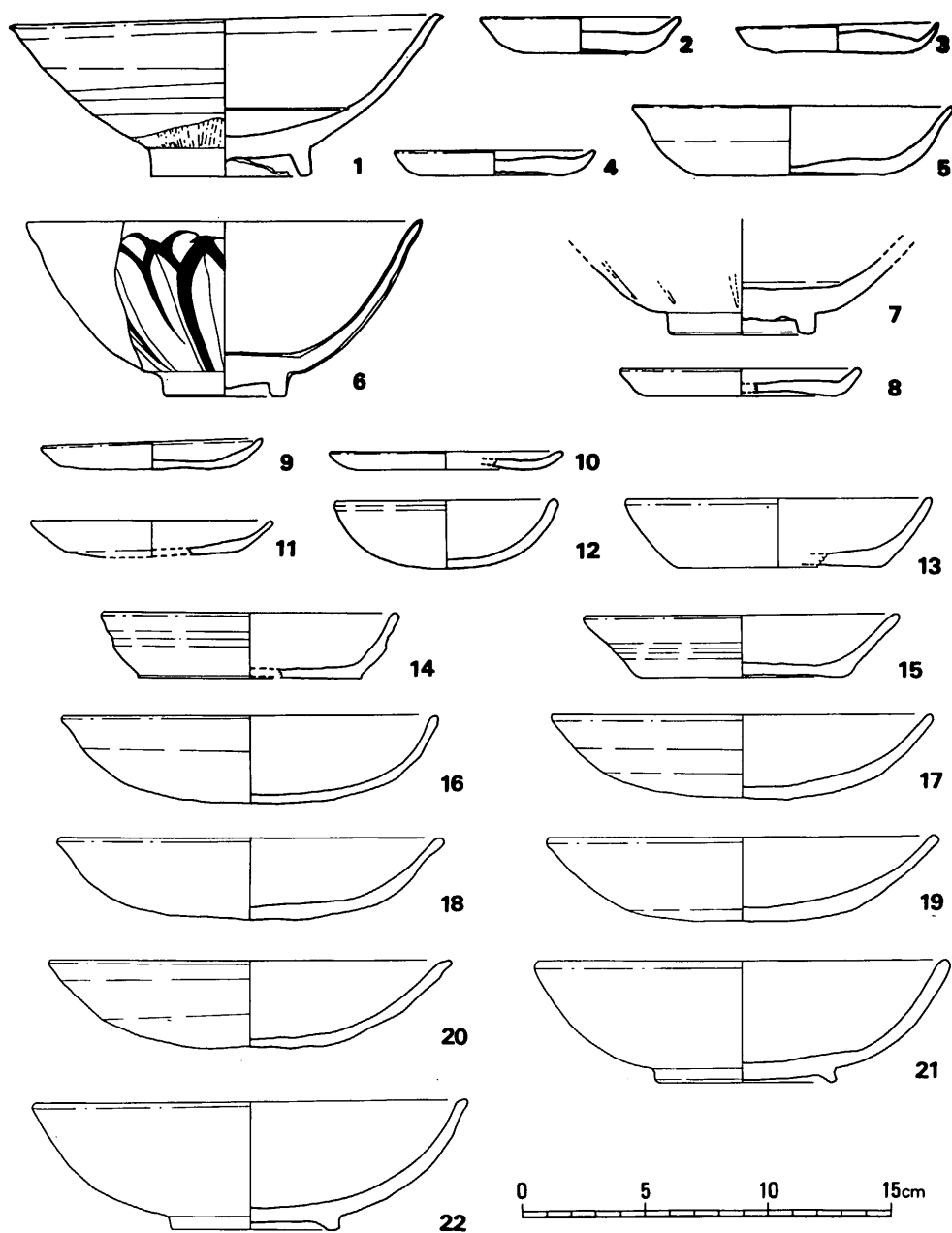
碗（22） 口径17～17.7cm、器高5.1～5.4cmのややいびつな形態を呈す。焼成があまく、全体に磨滅が著しい。

SM8

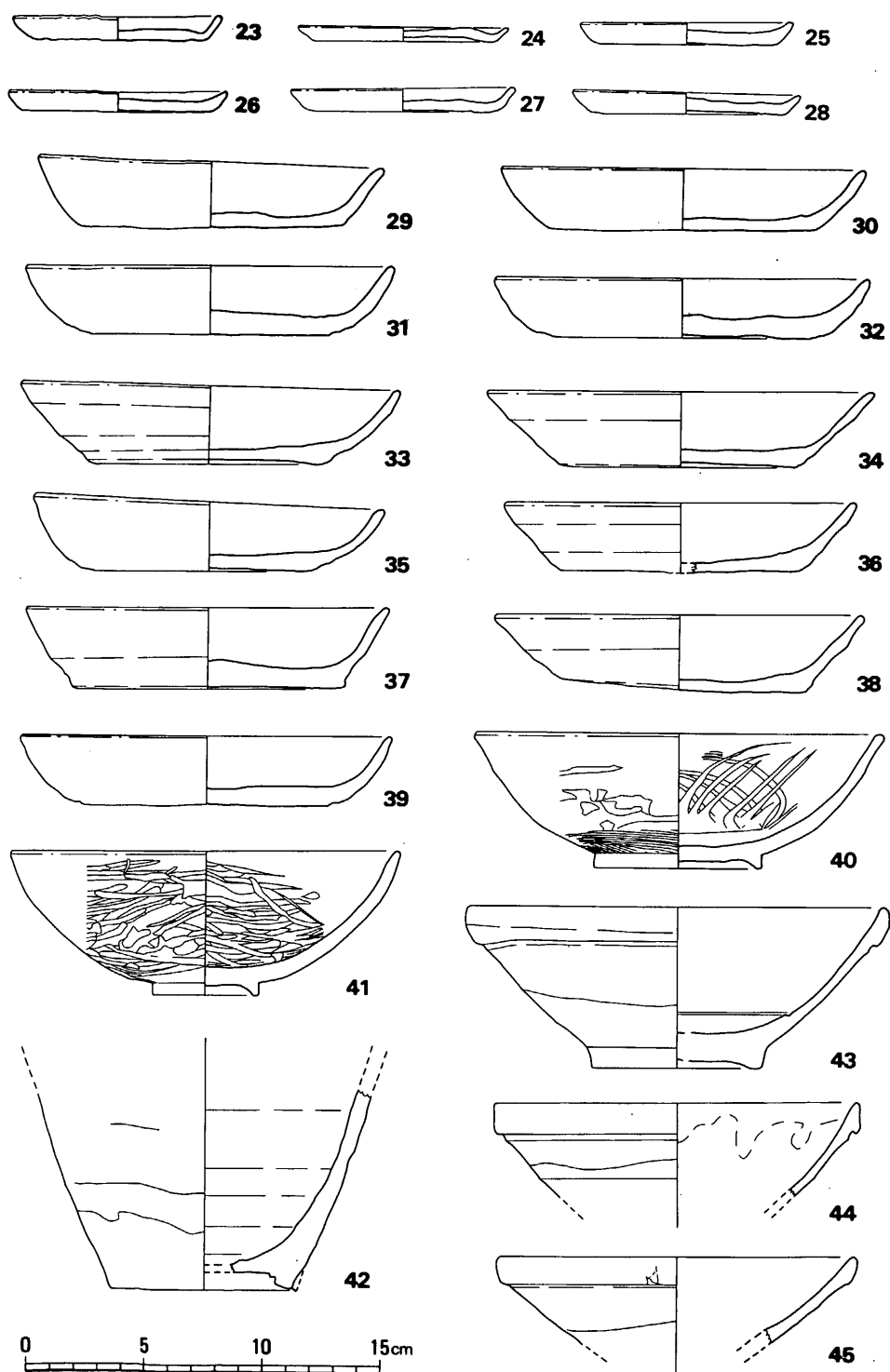
土師器

皿a（23～28） 口径8.8～9.6cmを測る。器高0.7～1cmを測る。底部の状況が観察されるものは全て糸切り離しである。

杯a（29～39） 口径14.6～15.8cm、器高2.7～3.5cmを測る。底部は糸切り離しで、5個体に板状圧痕が観察された。



第28図 SM 1～4 出土土器・陶磁器実測図（縮尺1/3）



第29図 SM 8 出土土器・陶磁器実測図 (縮尺1/3)

瓦器

碗 (40~41) 口径17.2・16.4cm, 器高5.7・6.2cmを測る。40は糸切り離しの痕をよく残し、体部内外面はミガキが施される。外面のミガキは器面の突出部のみに粗く施される。内面は底から左右に交差する弧を描くミガキが施される。焼成はあまく、器面はやや磨滅する。41は内外面の広い範囲にわたりミガキが施される。焼成は良好で、体部上位と下位の一部が焼成時にはじけている。

陶器

壺 (42) 四耳壺の底部と思われるもので、底径は8cmを測る。外面はへう削りが施され、内面はヨコナデされる。砂粒は比較的多いが、焼成は良好である。

甕 (65) 口縁部と底部を中心とする部分的な破片である。体部上位から大きく内弯する形態と考えられる。外面口縁部外側に耳をもつ、耳をもつ破片は1点のみの出土であったため、本来の耳の数は不明である。内面口縁下には凹線をめぐらす。釉は灰緑色を呈し、口縁部周囲を除く外面に施され、内面には暗褐色の釉を施す。IV 2 類に属するものであろう。

陶器は他に壺の小片が出土した。

白磁

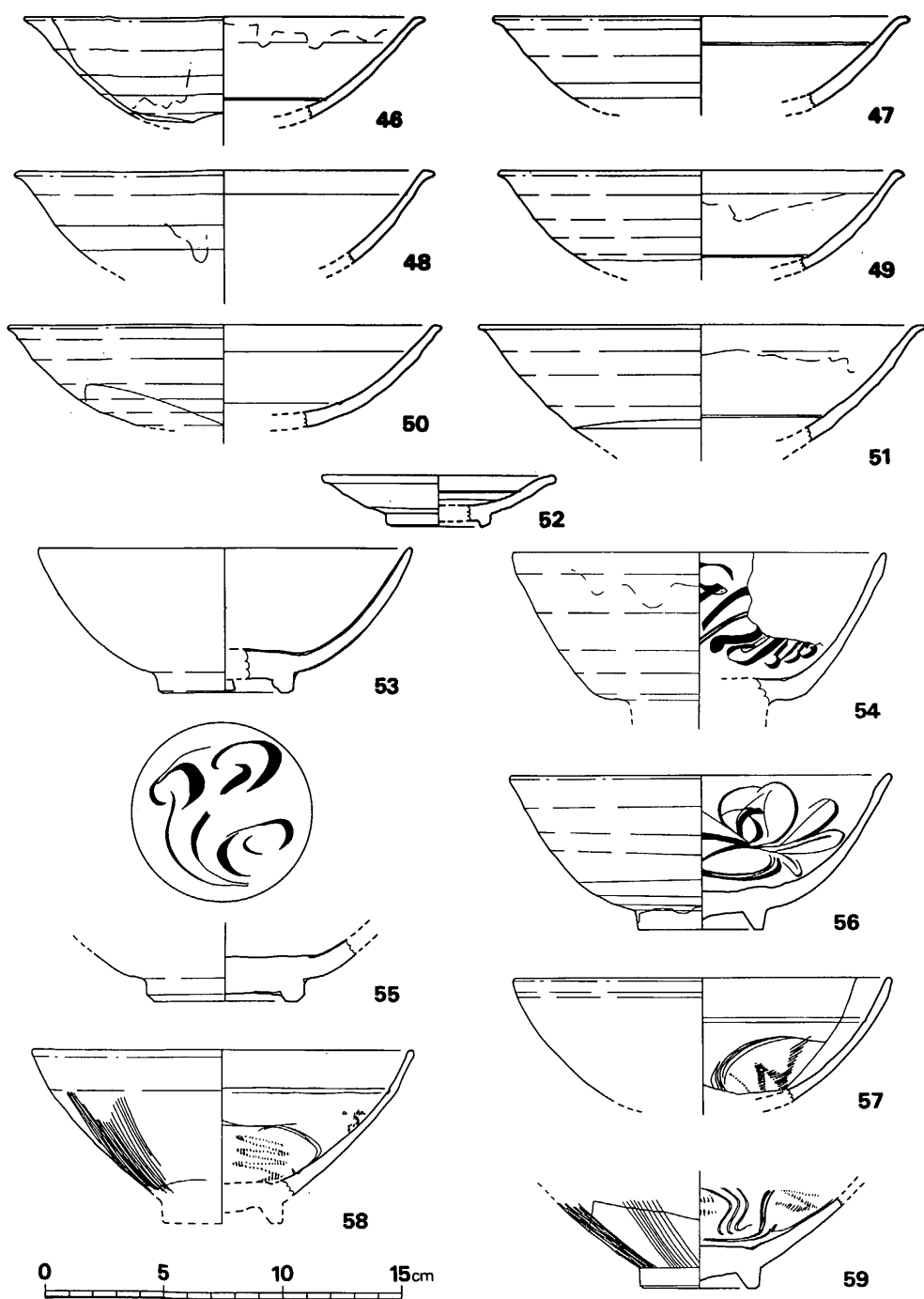
碗 (43~51) 43~45は口径15.4~17.8cmを測りIV類に属するものである。43は口縁部の1/3程度の残存である。底部は厚く、高台の削りも僅かで、内面見込みに沈線状の段をもつIV 1 aである。46~51は口径16.8~18.6cmを測り、いずれも底部を欠失する。口縁部は水平に引き出され、内面口縁下に沈線をめぐらす。V 4 aに属するものである。

皿 (52) 1/3程度の破片である。口縁部はやや外反し、内面口縁下に沈線をめぐらす。釉は強い緑色を帯び、見込みの部分は釉を輪状にカキ取っている。III 1 aに属するものである。

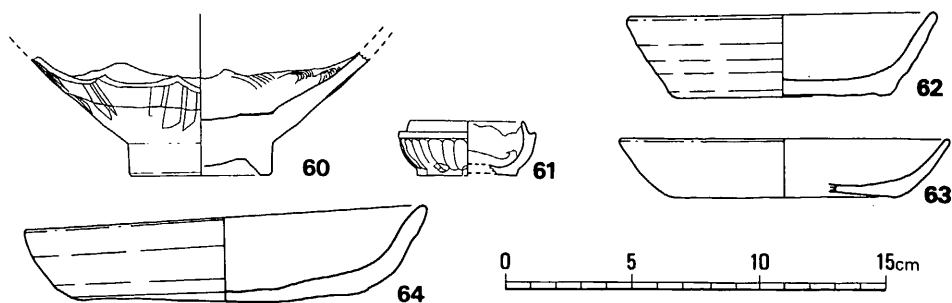
白磁は他に 碗II・V類, 皿II・IX類, また森田勉氏がE類として分類されているものなどの小片が出土した。

青磁

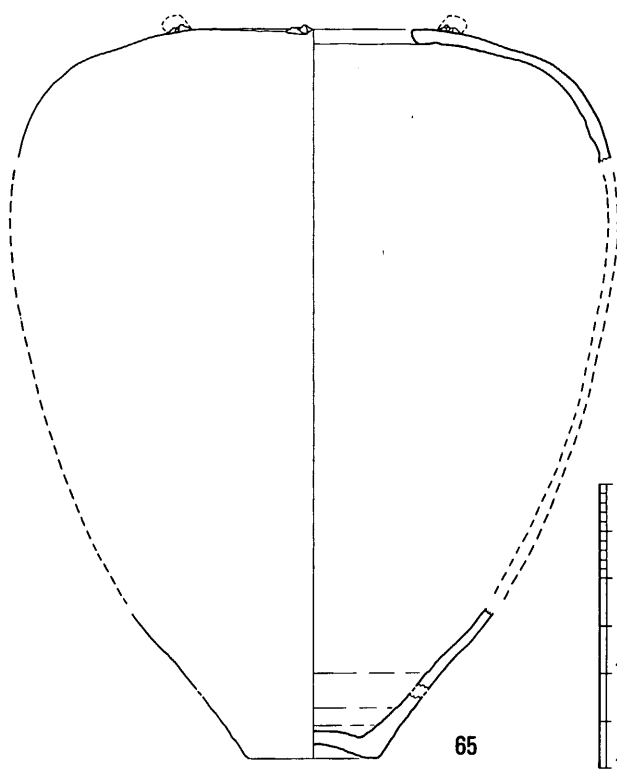
碗 (53~60) 53~56は龍泉窯系青磁である。53は高台が断面四角形を呈す。釉はやや青味を帯びる緑色を呈し、やや厚目に施釉され、高台裏面まで流れる。I 1 に属す無文の碗である。54は底部を欠失する1/5程度の破片で、体部には蓮花の葉を横から見た文様を入れる。I 2 bに属するものである。55は断面四角形の高台をもつ底部で、内底見込みにキノコ状の文様を3個片彫りしている。I 4 に属するものであろうか。56はほぼ半分程度が残存する。高台裏面は比較的深く削り込まれる。体部内面は草花文を片彫りする。釉はやや黄色を帯びる緑色を呈し、



第30図 SM 8 出土磁器実測図 (縮尺1/3)



第31図 SM 8・10土器・磁器実測図（縮尺1/3）



第32図 SM 8 出土陶器実測図（縮尺1/8）

高台部にも部分的に釉が流れる。II aに属するものである。

57～60は同安窯系青磁である。57は底部を欠失する。体部から口縁部にかけてやや内弯気味に立ち上り、内面口縁下に凹状の浅い沈線をめぐらす。内面にはヘラによる片彫りと、櫛状工具によるジグザク文様を入れる。I 1 aに属するものである。58・59は57の外面に櫛目を入れたもので、I 1 bに属するものである。60は底部の器厚が極めて厚く、釉は体部下位までしか施釉されない。外面にはヘラ状施文具による片彫り風の沈線を数本単位で施す。内面は櫛状工具による花文が認められ、III 1 bに属するものであろう。

青磁は他に龍泉窯系青磁碗 I 5 b, VI b, 皿 I, また同安窯系青磁で内

面見込みの釉を輪状にカキ取るものなどが出土した。

青白磁

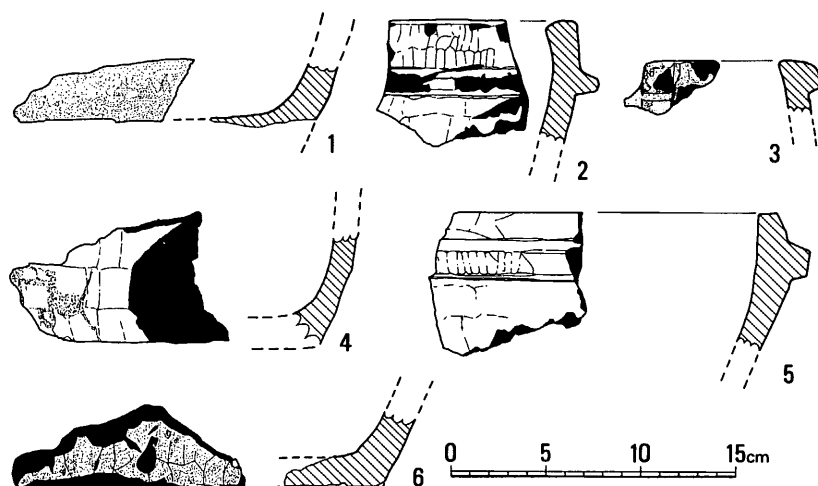
碗 (61) 合子の身である。受け部は短かく引き出され、体部には蓮弁が削り出される。

SM10

土師器杯 (62～64) 口径12.2～15.8cm, 器高2.3～3.3cmを測る。底部は糸切り離して、64には板状圧痕が認められた。

溝出土石鍋（第33図）

SM3・6・8～10から破片が出土した。全て滑石製である。1はSM3から出土した底部で、外面は煤の付着が著しい。2はSM6から出土した口縁部片で、口縁下約2.5cmの部位に幅約1.5cmの鐙をめぐらす。3はSM8の下位から出土したものである。口縁部に一辺1.5cmほどの方形の取手をもつ小形石鍋である。外面は全面に煤が付着する。4はSM9の下位から出土した底部片である。外面は磨滅し削りの状況は明瞭ではない。一端は大きく剥落するが、この部分も煤が付着しており、剥落後も使用されていたようである。5・6はSM10から出土したものである。5は口縁下約1.5cmに幅2cm程度の鐙をめぐらす。6は底部の破片で、外面は煤の付着が著しく底部も端から2～3cmの所まで付着する。内面底部には、剥離した部分も含め焦げつきがみられる。



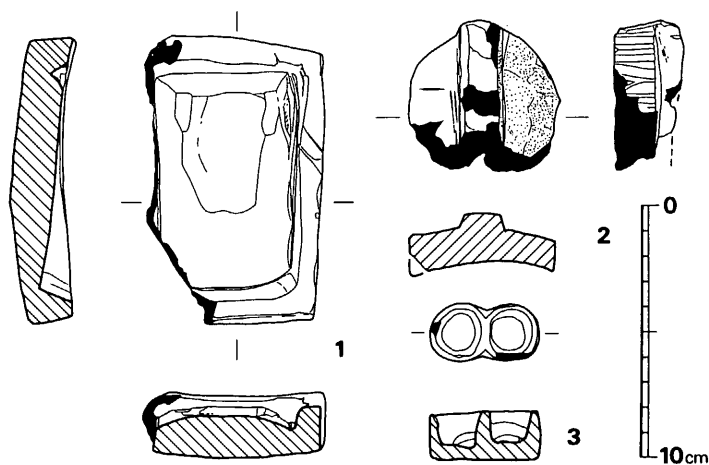
第33図 溝出土石鍋実測図（縮尺1/4）

溝出土石製品（第34図）

硯（1） SM2の上位から出土したものである。左側を欠失するが、長さ11.5cmを測り、幅は8cm程度と思われる。滑石製の石鍋を再利用したもので、裏面には煤が残る。また2/3程度はノミで削り、平坦面を作り出している。陸部は僅かに凹状を呈し、硯の中ほどからゆるやかに落ち海部へ至る。また陸部の周囲には海部から続く溝がめぐらされる。全体にノミ痕が残り、調整はノミが用いられたのであろう。

用途不明石製品（2・3） 2はSM6から出土したものである。滑石製石鍋の二次加工品で、鐙を中心に円形に削り出したものである。3はSM9から出土したもので、径1.5cmほどの円形の穴を2連もつ滑石製品である。

溝出土銅製品 SM10より銅碗片が出土した。約3.5cm×7cmが遺存する。



第34図 溝出土石製品実測図（縮尺1/3）

6 竪穴式住居跡状遺構

SH 1（第35図）

埋土は砂であり、大半を洪水などによって攪乱され、地山も砂であったため判断を誤り、床面を貫いた。

出土遺物（第36・37・38・39図）

調査中に攪乱部を判別しえなかったため、出土遺物も攪乱部のものが多く混る。

土師器

皿 a（1～7） 1/4以上残存するものは9個体あり、口径7.2～9.2cm，器高1.1～1.4cmを測る。8個体の底部が観察可能で、すべて糸切り離しであった。

杯 a（8～12） 1/4以上残存するものは8個体あり、口径11.8～15.9cm，器高1.4～3.2cmを測り、7個体が底部の観察が可能で糸切りが観察された。

瓦器

碗（13・14） 13は1/3ほどの破片で、高台ははずれる。口縁部は強くヨコナデされ、器面は内外面ともよくミガキが施される。焼成はあまい。14は口縁部を欠失する1/3ほどの破片である。ミガキは内外面とも密に施されている。

瓦質土器

鉢（15・16） いずれも小片である。15は口縁部を強く折り曲げた形態を呈す。16は口縁端部を軽く上方へ引き上げるもので、片口になるものかもしれない。

陶器

壺（17～18） 底部の1/3ほどを欠失する。胎土は灰色を呈し、0.3～0.5mm大の砂粒を多く含

む。残存部に釉は認められない。18は口縁部から体部にかけての1/4ほどの破片である。いずれもA類に属するものである。

白磁

皿(19) 小片である。口縁部は口禿になり、体部上位までヘラ削りされる。口縁端部及び体部下位以下には施釉されていない。IX 2 に属するものである。

白磁は他に碗V・IV類、皿IX 1・VI類の小片が出土する。

青磁

碗(20) 底部の1/3ほどの小片である。高台は断面四角形で、底部は比較的厚い。体部外面には蓮弁の文様を有す。釉は僅かに青味を帯びる緑色を呈す。龍泉窯系青磁I 5 b に属するものである。

青磁は他に龍泉窯系青磁杯III 1, 同安窯系青磁碗I 1 b, 皿Iの小片が出土している。

石鍋

いずれも滑石製である。1は口径約29cmで口縁下約2.8cmの位置に幅約1.5cmの鐏をめぐらす。鐏下は口縁部に比べ器壁を薄く仕上げている。2は口径約24cmで、やや銅部が張る。口縁部には取手がつく。3は底部のみの破片で、底径32cmほどに復原された。外面は体部から底部に至るまで煤が付着する。

石製品

短冊形を呈すと思われるもので、一端の中央に径1cmの穴を一つ穿っている。厚さは約1.5cmを測る。石製を加工したものであろう。

SH 2 (第35図)

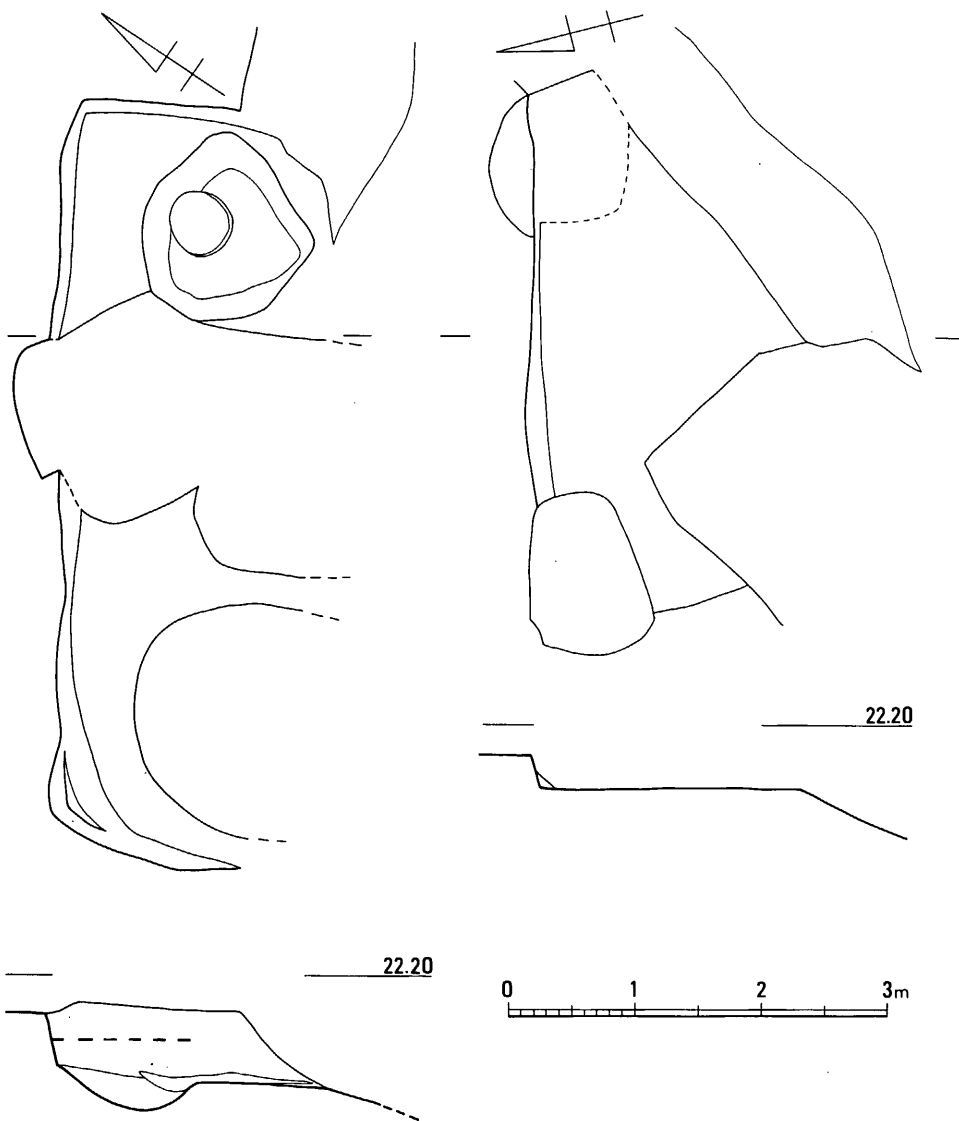
SH 1 に切られたもので、残存する部分は僅かである。深さは40cm足らずである。

出土遺物 (第37図)

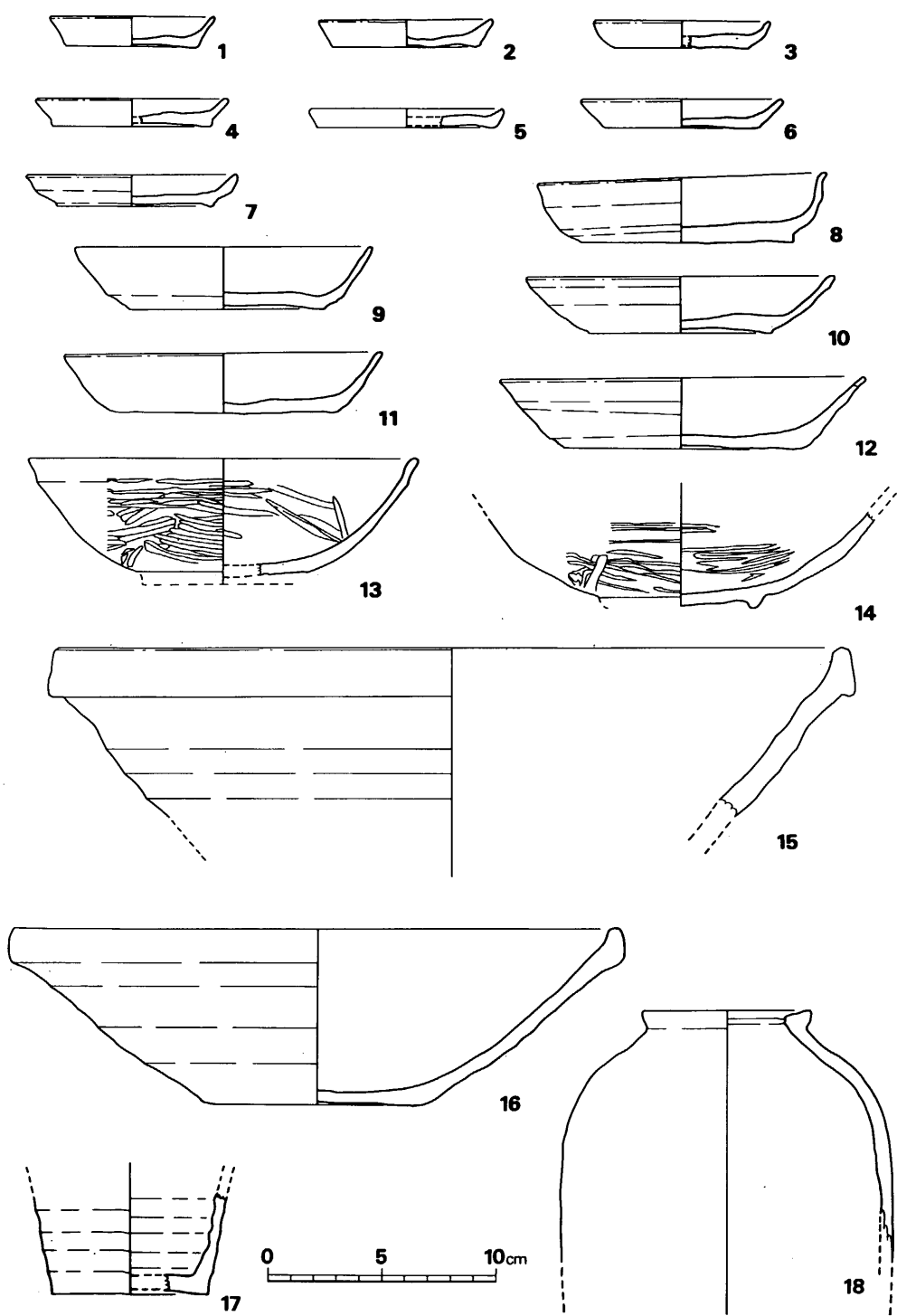
土師器

皿a (21) 口径9.3cm, 器高1cmを測り、底部は糸切りで、板状圧痕が残る。

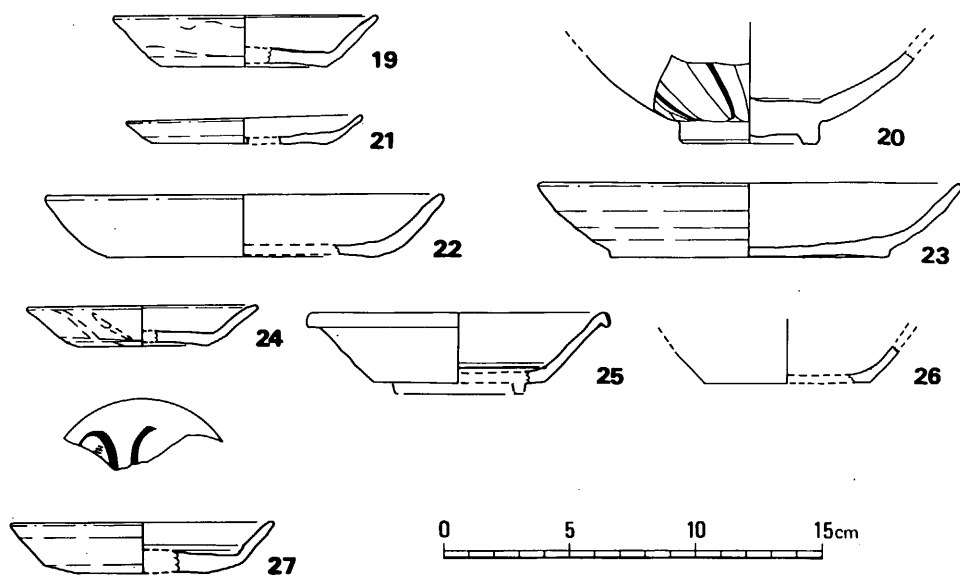
杯a (22・23) 口径15.8・16.7cm, 器高2.5・3cmを測る。底部はいずれも糸切りで、23には板状圧痕が認められる。



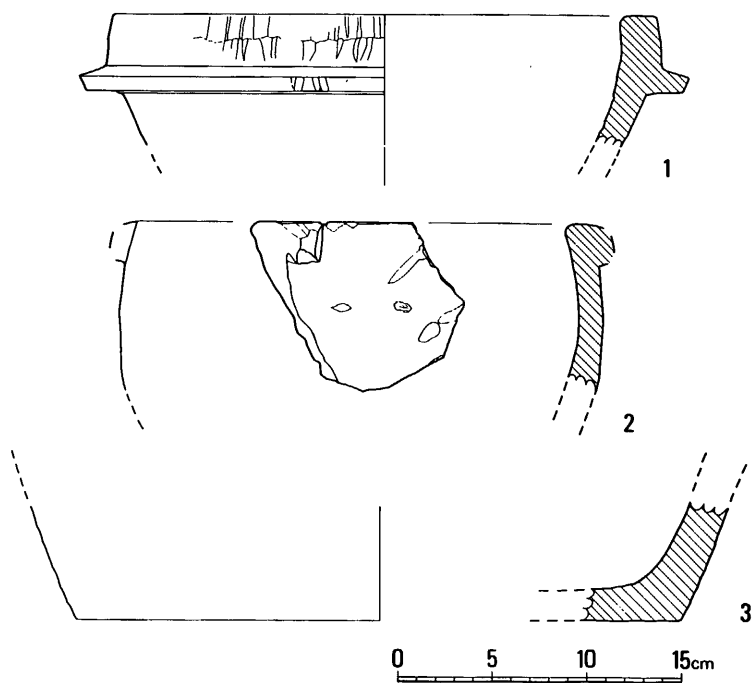
第35図 SH 1・2 遺構実測図 (縮尺1/60)



第36図 SH1出土土器・陶磁器実測図（縮尺1/3）



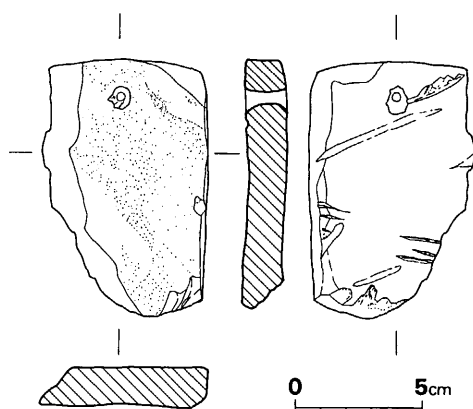
第37図 SH 1・2 出土土器・磁器実測図 (縮尺1/3)



第38図 SH 1 出土石鍋実測図 (縮尺1/4)

白磁

皿(24~26) 24は口縁部が口禿になったもので、底部は僅かに上げ底気味となる。釉は空色を帯び、口縁部を除く全面に施釉される。IX 1 aに属すものである。25・26はSE 2や表土からも出土する未分類のものである。口縁は下方に短かく折り曲げられ、体部は直線的に外傾する。内面は見込みに沈線状の段を有す。釉は緑色を帯びた空色を呈し、外面底部を除く全面にやや厚く施釉される。25・26は同一個体の可能性もある。



第39図 SH 1 出土石製品実測図(縮尺1/3)

青磁

皿(27) 体部中位で大きく屈曲し、立ち上る。内見は体部と見込みの境に段を有す。底部の釉は全体に施釉後カキ取られる。内面見込みにはヘラによる片彫りと櫛によるジグザグ文様が見え、同安窯系青磁皿 I 2 に属するものである。

7 ピット出土の遺物(第40図)

ピットからも土師器を中心に多くの遺物が出土した。

土師器

皿 a 1/3以上残るものは40個体あり、口径7.2~1.3cm, 器高0.7~1.7cmを測る。口径のピークは8.4~8.6, 9.0~9.3の2ヶ所に認められる。底部の状況が確認できるものは全て糸切り離してある。

杯 a 1/3ほど以上残るものは10個体で、口径12~16.6cm, 器高2.3~3cmを測る。底部は全て糸切り離して、大半が板状圧痕が残る。

土鍋

口縁部の破片が2個体出土し、それぞれ口径52.8, 43cmに復原された。口縁部は逆L字状を呈し、ヨコナデされる。体部は刷毛目調整される。

瓦質土器

鉢の口縁部片と底部片がそれぞれ2個体出土した。

瓦器

碗(1) P112からの出土である。外面はヨコナデされ、突出部のみミガキが施される。内面もミガキが施されるが明瞭に観察されない。焼成は良好で、暗灰色を呈す。

白磁

皿(2) P158からの出土である。口縁部は僅かに外反し、平坦な底部を有す。釉は空色を帯び、口縁部の釉はカキ削られる。IX 1 Cに属するものである。

須恵器

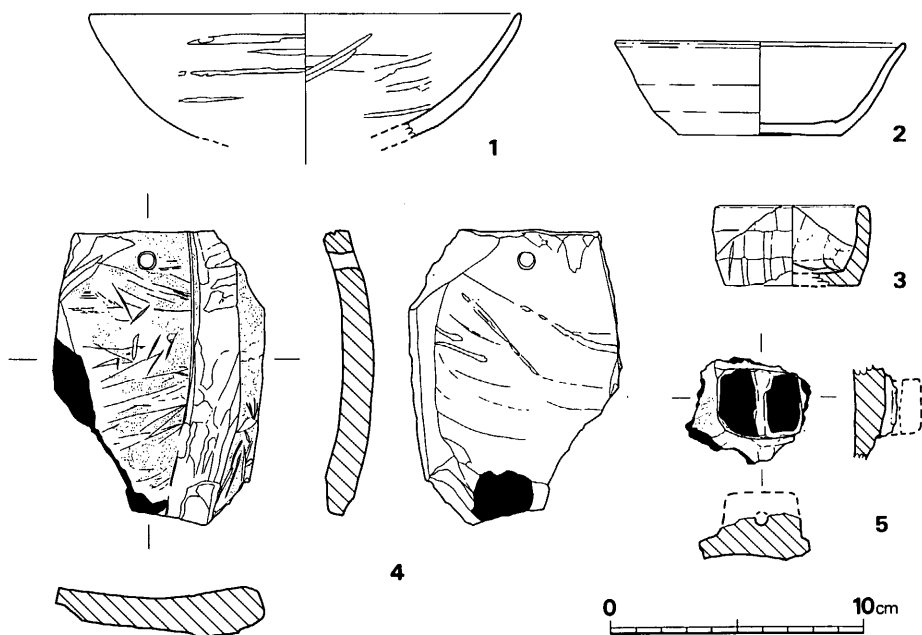
高坏の脚部が出土した。中位に二条の沈線がめぐり、裾端部は僅かに下方に引き出される。

石鍋

3はP6から出土した小形のもので、口径6.2cm、器高5.2cmを測る。石材は滑石を用いるが、全体に黒味がかった色調を呈す。このほかにP111・P138から幅2cmの鐙をもつものと、縦長の取手をもつ破片がそれぞれ1点出土している。

石製品

4はP111から出土したものである。滑石製石鍋を転用しており、鐙を削り落とし、面をそろえる。長さ11.5cm 幅8.2cmを測る短冊形のもので、一端の中央に径0.8cmほどの穴を穿つ。5はP250から出土したもので、滑石製石鍋を転用したもので、2.5cm×3cmの取手に径1cmほどの穴を穿ったものである。縁辺には加工痕はみられない。



第40図 ビット出土遺物実測図(縮尺1/3)

8 試掘調査に伴う出土遺物(第41図)

試掘調査において、遺構面まで下げた際に出土した遺物のうち、遺存度の良い磁器を掲載した。

白磁

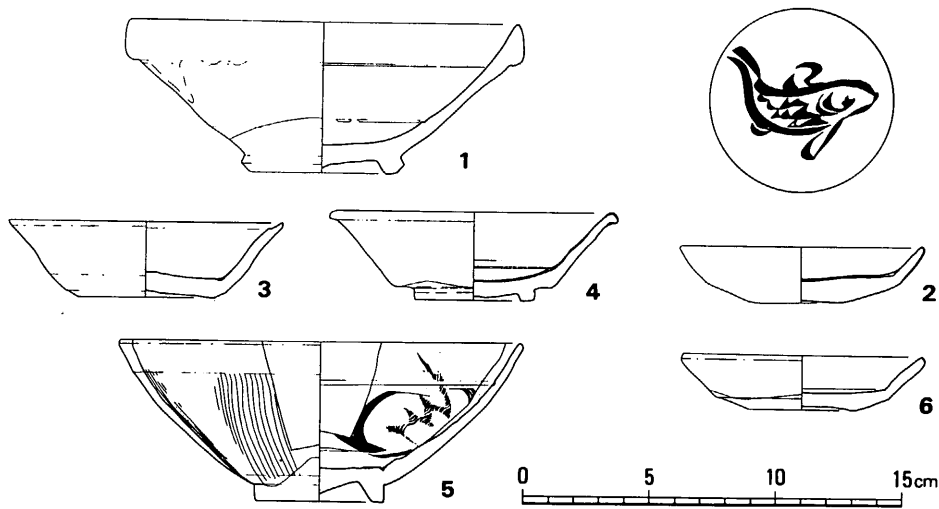
椀（1） 口縁が玉縁を呈し、高台は高い。内面口縁下に沈線をめぐらし、見込みにも沈線状の段を有す。胎土は灰色を呈すが、高台裏面は焼成が十分でなく淡黄褐色を呈す。釉は青緑色を帯び、薄く施釉される。IV 2 に属するものである。

皿（2～4） 2は体部は「く」字状を呈し立ち上る。底部は僅かに上げ底気味となり、器壁が厚い。内面にはヘラ描きの魚文が施される。釉は緑色を帯び、やや厚目に施釉される。3は体部が直線的に外傾し、底部は僅かに上げ底気味となる。釉は空色を帯び、全面に施釉後、口縁部はカキ取られる。IX 1 C に属するものである。4は未分類のもので、口縁部は下方に短かく折り曲げられる。体部は直線的に外傾し、底部端部より約0.7cmの位置に断面四角形の短かい高台をもつ。釉は青緑色を帯び、外面底部を除き、やや厚目に施釉される。

青磁

椀（5） 口縁部は僅かに外反し、内面口縁下に凹状の沈線をもつ。内面体部にはヘラ状施文具による片彫りの文様と櫛状工具によるジグザグ文を施す。同安窯系青磁 I 1 b に属するものである。

皿（6） 体部中位で屈曲し「く」字状を呈す。体部と見込みの境に沈線状の段を有す。釉は外面屈曲部以下は施釉されない。同安窯系青磁 I 1 a に属するものである。

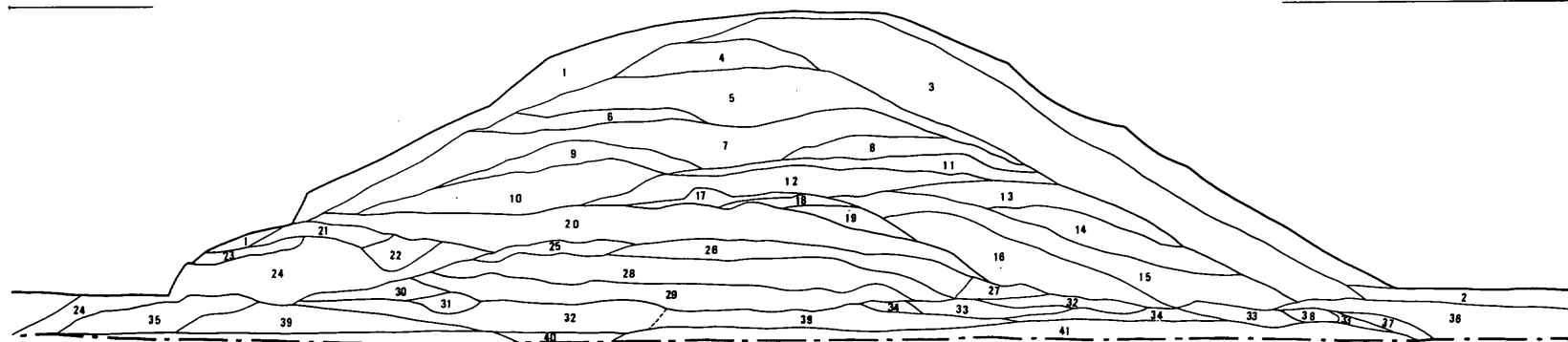


第41図 表土出土磁器実測図（縮尺1/3）

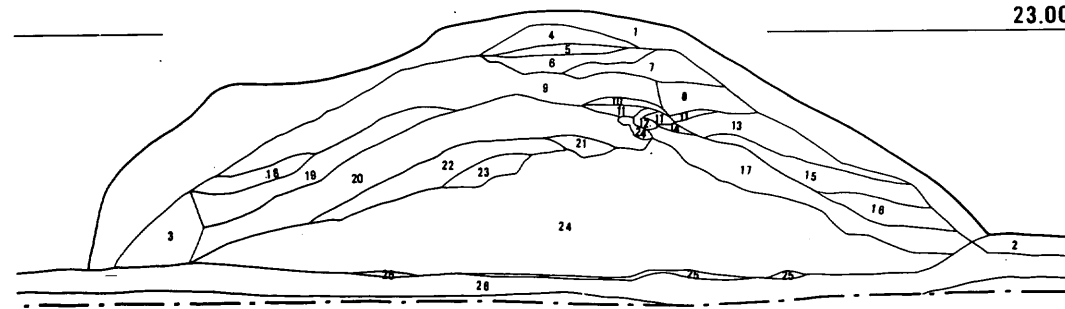
9 縄文時代の遺物

甕の底部である。断面台形を呈す。底径は8.9cmを測り、クジラの脊椎圧痕が残る。土器はS E 3 脇の遺構面の浅い窪みにへばりつくようにして出土した。他にも調査中、甕の破片が若干出土した。

23.00

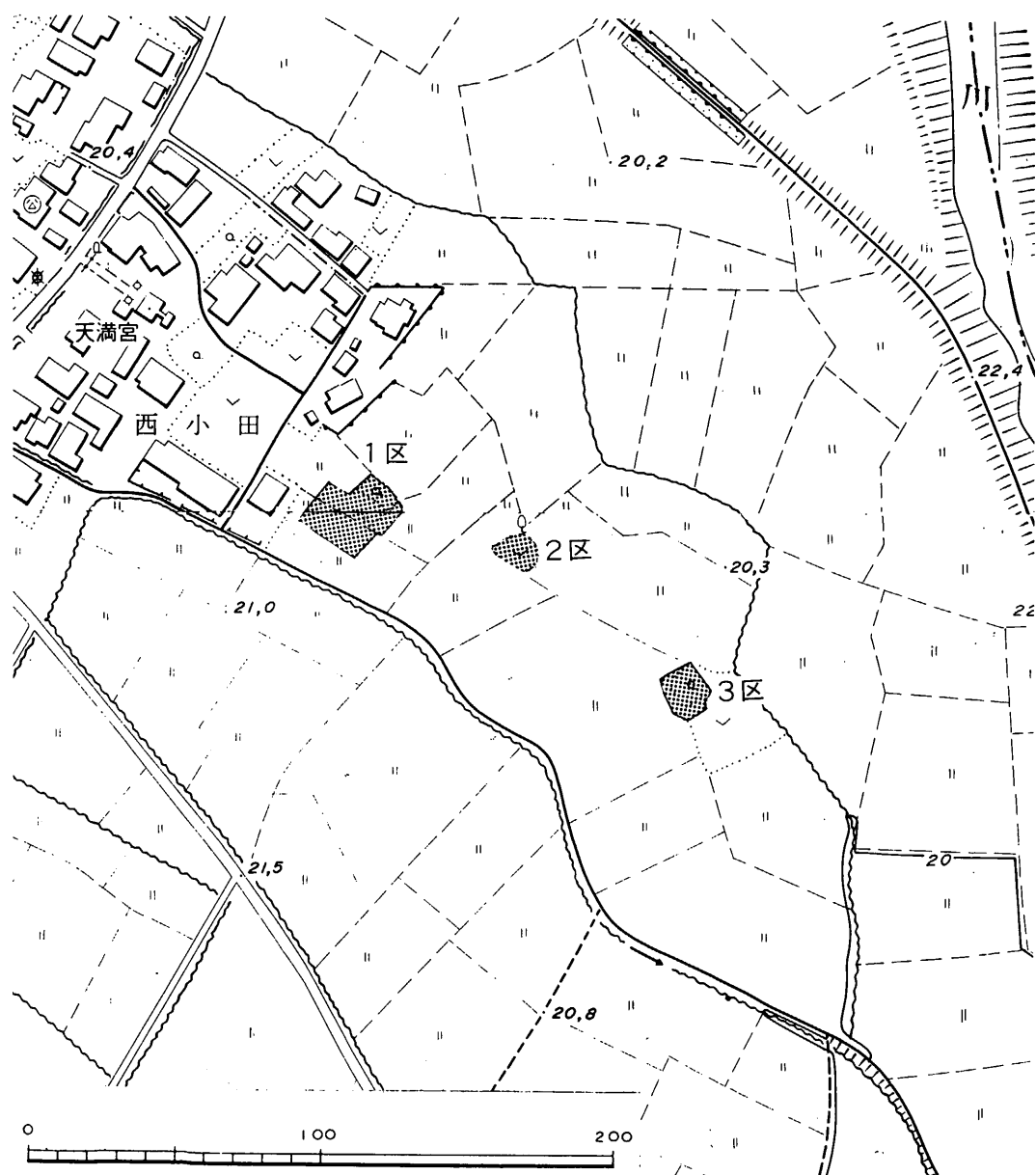


23.00



第42図 「ひかえ堤」土層断面図 (縮尺1/60)

Ⅳ B地区の調査



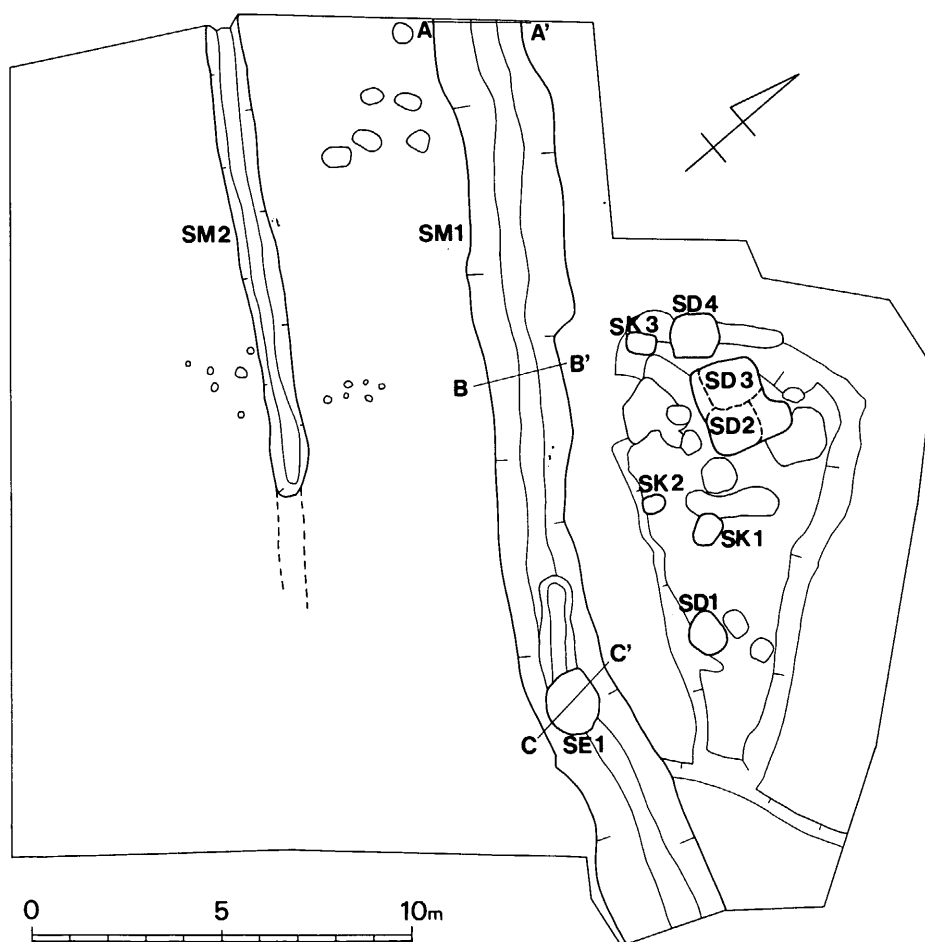
第43図 B地区発掘調査地点地形図（縮尺1/2500）

1 調査概要 (第43・44図)

調査対象地は3地点に分けられる。第1地点は、調査区北東部の小高くなっている所(第1 a 地点)から火葬墓(SK)3基、土墳(SD)4基、その他ピットを検出した。この西側の平坦部(第1b区)からは井戸(SE1)1基、溝2条、ピットが若干検出された。西端の溝(SM2)及びピットは、耕作土に近い土質の埋土で、かなり新しい時期のものであろう。SM2周辺の小ピットも全般に浅く、その性格も明らかでない。

第2地点は、土盛りに「+」字状のトレンチを設定したが、時期不明の幅約1m、深さ20cmほどの溝を検出するに止どまった。

第3地点は最も南に位置する。土盛に「+」字状のトレンチを設定し調査した。トレンチを掘り下げた結果、土盛り下に遺構を確認し、地形測量後、土盛りを除去した。その結果、東西



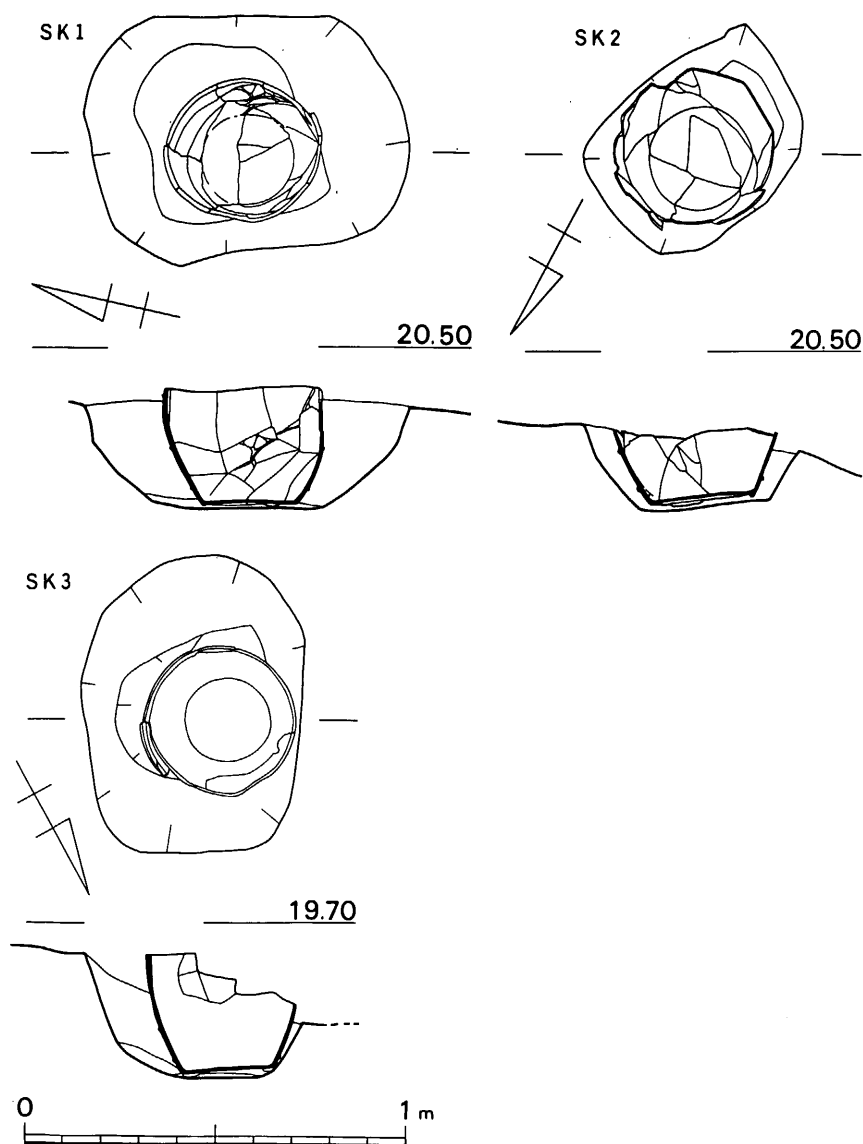
第44図 B地区第1地点遺構配置図(縮尺1/200)

を溝に区割された内側に、土壌墓28基、ピット5個を検出した。

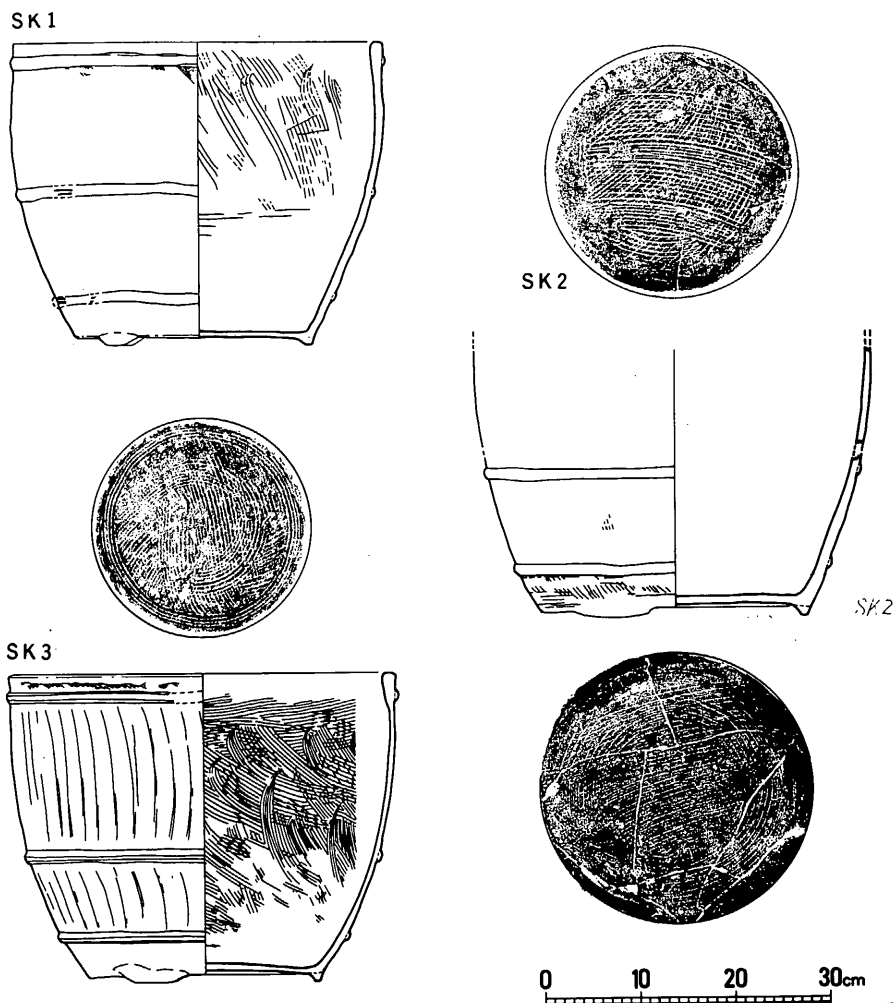
A 第1区の調査

1 火葬墓 (第45図 図版13・14)

SK1は1a地区のほぼ中央から出土した。上面プランは82cm×65cmの円形に近い方形を呈し、深さは約30cmを測る。骨蔵器は掘り方の中央におかれ、木根などの圧力により割れ目が広



第45図 SK1～3 遺構実測図 (縮尺1/20)



第46図 SK1～3 骨蔵品実測図（縮尺1/8）

がっていた。

SK2はSK1の西側から出土した。上面プランは56cm×44cmの長方形の掘り方を呈し、深さ約20cmを測る。掘り方の中央に骨蔵器が据えられているが、上半はすでに削平されていた。

SK3は1a区の北端で出土した。上面プランは78cm×57cmの円形に近い方形を呈し、深さ約32cmを測る。骨蔵器は掘り方の中央に据えられているが、北側を削られ、体部上半の一部を欠失する。

骨蔵器（第46図）

いずれも同じ形態を呈し、瓦質土器の鉢を用いている。

SK1は口径38.1～39.3cm、器高31.9cm、底径25cmを測り、全体に磨滅する。口縁部はやや

肥厚し、胴部は若干張る。底部の縁には3ヶ所に短い脚を貼付する。口縁下と体部中位、底部近くの3ヶ所にそれぞれ一条の凸帯を貼付し、貼付位置には事前に2条の沈線をめぐらす。外面調整は刷毛目調整後、板状工具を横方向に走らせ刷毛目をナデ消す。底部は砂粒が浮き、調整は行なわれていない。内面調整も体部から底部に至るまで刷毛目調整され、その後ナデ消される。刷毛目は外面が細かく、内面は粗い。

SK2は上半を欠失するが、SK1と同様の形態であろう。外面には刷毛目が施されるが、ナデ消されたうえ、磨滅が著しいため不明瞭である。底部内外面はナデ消されることなく、刷毛目がよく残る。

SK3は口径40.7cm、器高32.5cm、底径24cmを測る。焼成が良好で磨滅も少ない。SK1と同様に3本の凸帯をもつものであるが、凸帯断面が台形を呈し、中位の凸帯がやや下方に貼付される。外面調整は口縁直下に刷毛目が見られ、全体に施されていたものと思われるが、上位凸帯と下位凸帯の間はヘラ削りされ、消されている。内面は全体に刷毛目調整され、ナデ消されてはいない。なを外面底部はSK1と同様に調整は行なわれていない。

2 土壇 (第47～49図 図版14)

SD1は1a区の南側に位置し、上面プランは約1.1m×0.9mの不整円形を呈す。埋土と地山が同じ砂で、区別が明瞭でなかった。土壇の北よりの部分から陶器碗が出土した。

陶器碗はやや外傾し、太く短かい高台を有す。体部は朝顔状に開き、端部は水平方向に引き出され、上面は凹状をなす。内面体部と見込みの境に段を有す。外面底部はヘラ削りされる。また、高台と内面見込みには目痕を残す。胎土は褐色を呈し、釉調は青緑色で、内面全部と外面に流すように施釉される。

SD2はSD3に切られるもので、上面プランは一辺約1.3mの方形を呈し、深さ約50cmを測る。

SD3の上面プランは約1.4m×1.2mの方形を呈し、深さ約50cmを測る。

SD4は1a区の南側に位置する。約1.15m×1.25mの方形を呈し、深さ約60cmを測る。

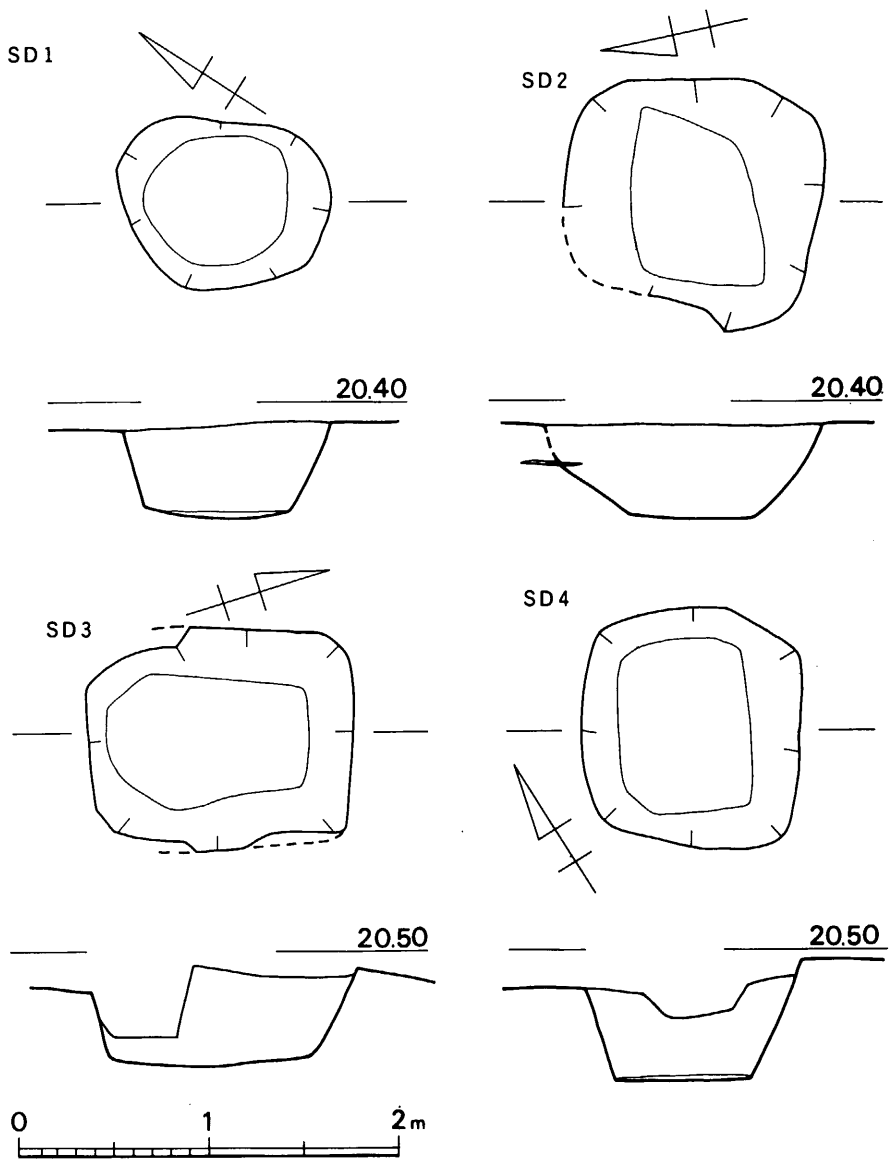
3 井戸 (第50図)

SE1はSM1に切られて検出されたものである。掘り下げる段階で北西部から激しく湧水し、上面プランに至る崩壊をもたらした。床一面には広葉樹の葉が、3cmほどの厚みで出土した。

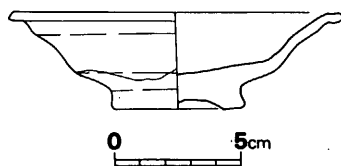
4 溝 (第51図 図版14)

SM1

北西から南側に、Ia区脇を走る溝で、幅2～2.5mを測る。遺物はIV層を中心に出土したが、小片が多い。



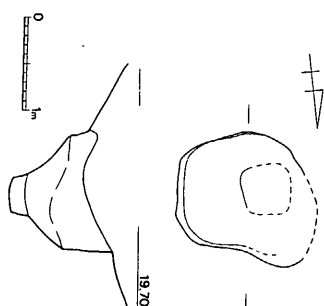
第47図 SD 1～4 遺構実測図 (縮尺1/40)



第48図 SD 1 出土陶器実測図 (縮尺1/3)



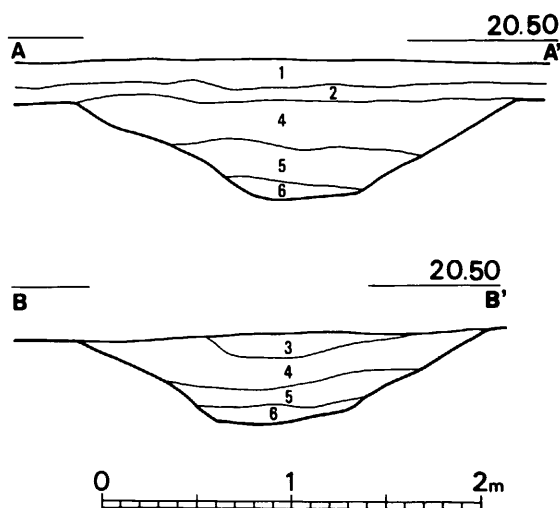
第49図 SE 1 出土土師器実測図 (縮尺1/3)



第50図 SE 1 遺構実測図 (縮尺1/60)

SM 0 1 土層観察表

- | | |
|----|----------------|
| 1層 | 耕作土 |
| 2層 | 旧耕作土 |
| 3層 | 青灰色砂質土層 |
| 4層 | 淡褐色土層 |
| 5層 | 灰褐色土層 (粘質を帯びる) |
| 6層 | 青灰色粘質土層 |



第51図 SM 1 断面実測図 (縮尺1/40)

出土遺物

土師器 (第52図)

皿 a (1・2) 口径7.8~8.1cm, 器高0.9~1.2cm, 底径6.2~7cmを測る。底部は糸切り離しで, 2には板状圧痕が認められる。

杯 a (3~6) 口径12~12.7cm, 器高2.6~2.9cm, 底径7.4~8.8cmを測る。6は磨滅のため底部の状況を確認しえないが, 他は全て糸切り離しで, 3・4に板状圧痕を残す。

瓦質土器 (第52・53図)

鉢 (7) 口径14.2cm, 器高5cm, 底径5.8cmを測る。底部は糸切りである。

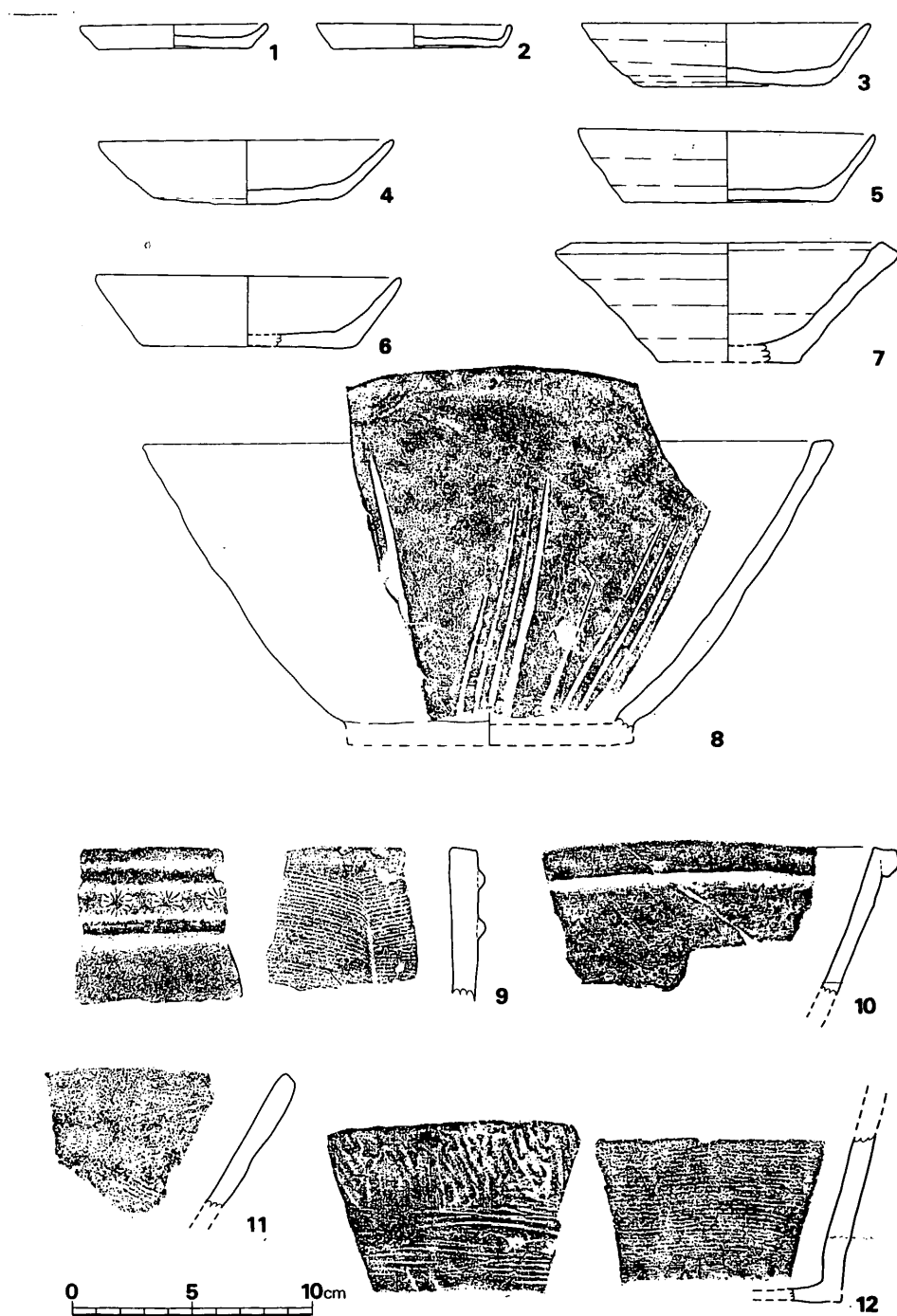
摺鉢 (8) 底部を欠失する。口径18.6cmを呈す。外面は指頭痕による凹凸が著しい。内面はヨコナデされ, 4本を単位とする筋目が認められる。

火舎 (9) 口縁部片である。外面は口縁部下に2条の凸帯を貼付し, その間に菊花文を押圧する。内面は横方向の刷毛目調整を施す。

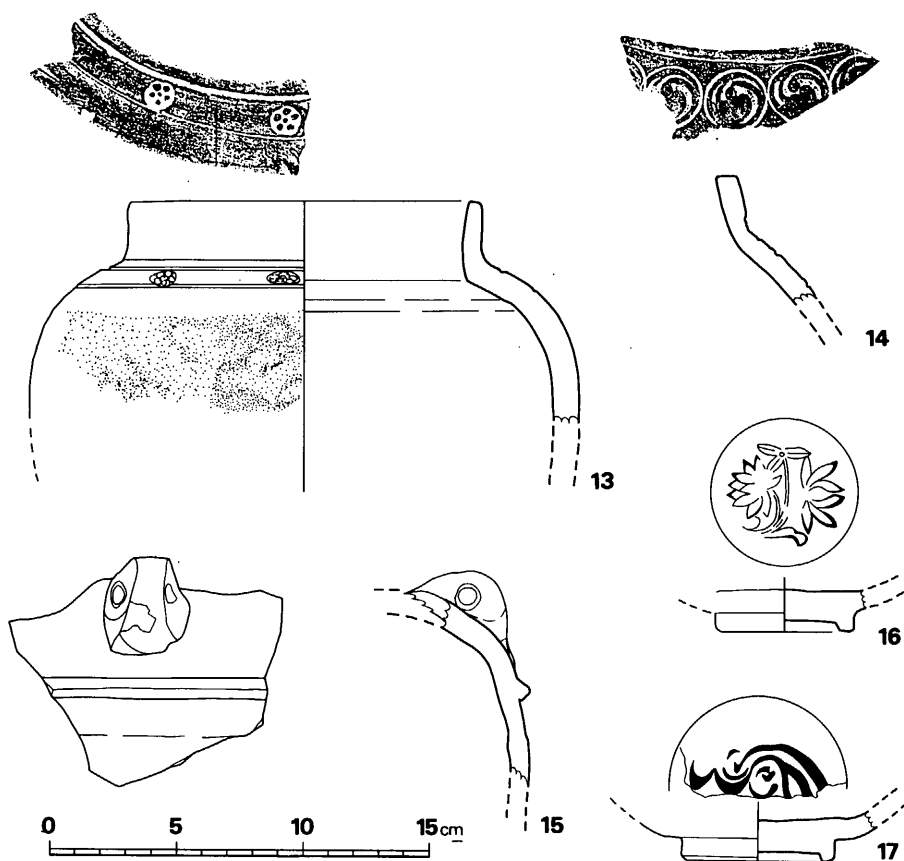
土鍋 (10・11) 10は口縁部を折り曲げ, 肥厚させる。外面はヨコナデされ, 内面は刷毛目が残る。11は内外面に刷毛目が残るが, 外面は明瞭さを欠く。

底部片 (12) 鉢または火舎の底部であると思われる。内面及び底部近くは横方向に刷毛目調整され, その外面上位は縦方向に刷毛目調整される。

釜 (13~15) 12は復原口径14cmである。口縁部は直立し, 端部は角張る。張った肩部には2条の沈線をめぐらし, その間に梅花文を押圧する。口縁部はヨコナデされ, 外面体部はヘラ削りされ, 体部には煤が付着する。14は小片である。口縁部はやや内傾し, 肩は比較的なだらか



第52図 SM 1 出土土器実測図 (縮尺1/3)

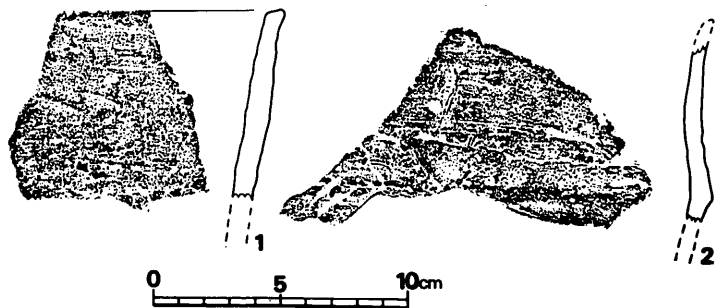


第53図 SM 1 出土土器・磁器実測図（縮尺1/3）

な形状を示す。肩部には一条の沈線をめぐらし、その下に二巴文を2段以上押圧する。15は耳を有する肩部片で、耳下に断面三角形の小さな鐙をめぐらす。

青磁（第53図）

椀（16・17） いずれも龍泉窯系青磁である。16は花文をスタンプするもので、2はヘラ状工具による片彫りで、文様を描く。



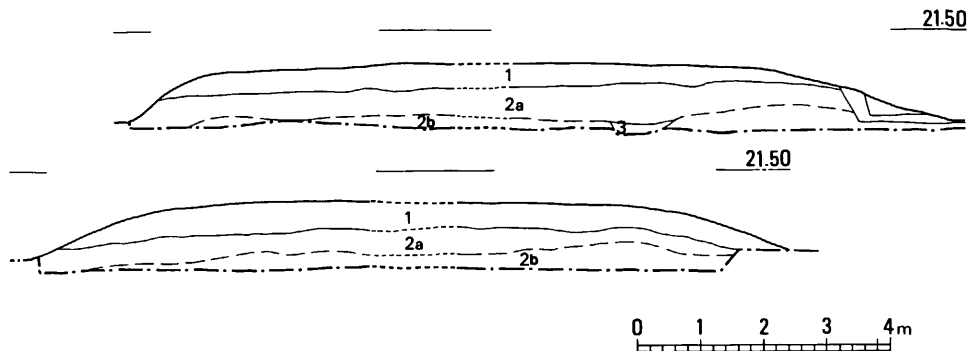
縄文式土器（第54図）

いずれも SE 1 上位から出土したものである。1の器面には僅かに条痕が観察される。

第54図 SM 1 出土縄文式土器実測図（縮尺1/3）

B 第2区の調査 (第55図)

直径12～13m、高さ1mの土盛りである。I層は黄褐色土層で、夜臼式土器の小片から近代の磁器までを含んでいた。II層以下はほとんど遺物を含まない砂層である。



第55図 第2地点土盛土層断面図 (縮尺1/120)

第2地点土層観察表

- | | |
|-----|-----------------------------------|
| 1層 | 黄褐色土層 |
| 2a層 | 淡黄褐色砂質土層 (粒子が細かく、よくしまっている) |
| 2b層 | 淡黄褐色砂質土層 (2a層と同一であるが、鉄分などが浸透している) |
| 3層 | 暗黄灰色土層 (細かい粒子で、しまりも比較的よい。……溝) |

C 第3地区の調査 (第56・57図)

土盛は直径11～13m、高さ1.3mを測る。頂部には最近の攪乱が認められ、I～II層にも比較的新しい時期の遺物が含まれていた。この土盛下には土墳墓(SD)が28基検出された。

土墳墓 (第58～60図)

SD 1

上面プランは約1.8m×1.3mの長方形を呈し、深さ約115cmを測る。主軸はほぼ磁北に向う。

SD 2

上面プランは約1.5m×1.2mの長方形を呈し、深さ約70cmを測る。N-7°-Wに主軸をとる。

SD 3

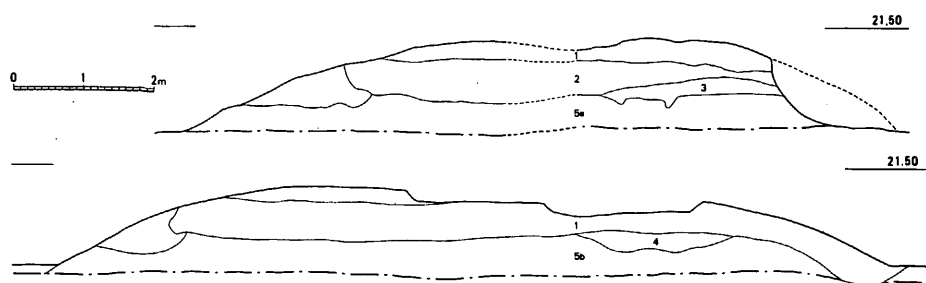
上面プランは約1.5m×1.1mの長方形を呈し、深さ約50cmを測る。N-19°-Wに主軸をとる。

SD 4

上面プランは約1.5m×1.1mの長方形を呈し、深さ約50cmを測る。主軸をN-13°-Wにとる。

SD 5

上面プランは約1.7m×1.3mのやや丸味を帯びた長方形を呈し、主軸をN-1°-Eにとる。床面には北部主軸線上から鉄片が出土し、北西部から頭骨と下顎骨の一部が出土した。



第56図 第3地点土盛断面実測図 (縮尺1/400)

第3地点土層観察表

- | | | |
|-----|--|--|
| 1層 | 褐色土層 | |
| 2層 | 青灰色土層 (細かな砂粒でやや粘質を帯び、近代を中心に中世までの遺物が出土) | |
| 3層 | 白灰色砂層 (1~4.5mm大の砂粒の層であるが、1~2mm大の砂粒が中心の層。しまりが弱い) | |
| 4層 | 暗褐色土層 (5b層とは土質は近いが、色調が暗く全体によごれた感じであり、木根の跡であろうか) | |
| 5a層 | 暗褐色土層 (全体に淡い色調であるが、非常にかたくしまった土層である。西端にいくにしたがって、しまりが弱くなる) | |
| 5b層 | 暗褐色土層 (上位からは2層でみられるような遺物が出土するが、全般に遺物は少ない。しまりは強くない) | |

S D 6

上面プランは約2m×1.5mの長方形を呈し、N-2°-Eに主軸をとる。深さは約40cmを測り、床面中央に漆塗りの木片が残る。また「寛永通宝」2枚が出土した。

S D 7

上面プランは約1.8m×1.3mの長方形を呈し、深さ40cmを測る。N-1°-Eに主軸をとる。

S D 8

上面プランは約0.9m×0.8mのやや丸味を帯びる方形を呈し、深さ約30cmを測る。

S D 9

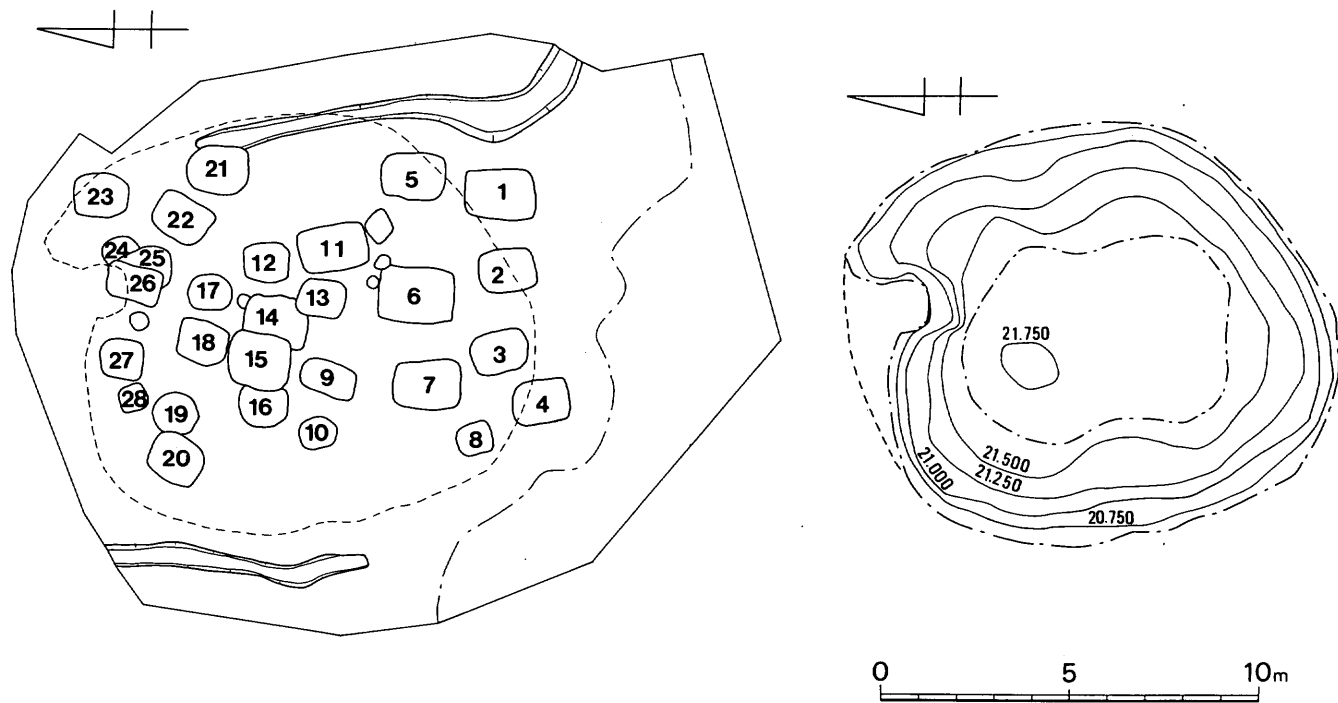
上面プランは約1.5m×0.8mの方形を呈す。掘り方の深さは約50cmあるが、45cmほど掘り下げた所で、棺の跡と人骨を確認した。棺は92cm×41cmの長方形を呈す。人骨は頭骨、上腕骨、前腕骨の一部、および下肢が比較的よく残るが、状態はやっと形状が分かる程度である。頭を北にして屈葬され、主軸はN-19°-Wにとる。

S D 10

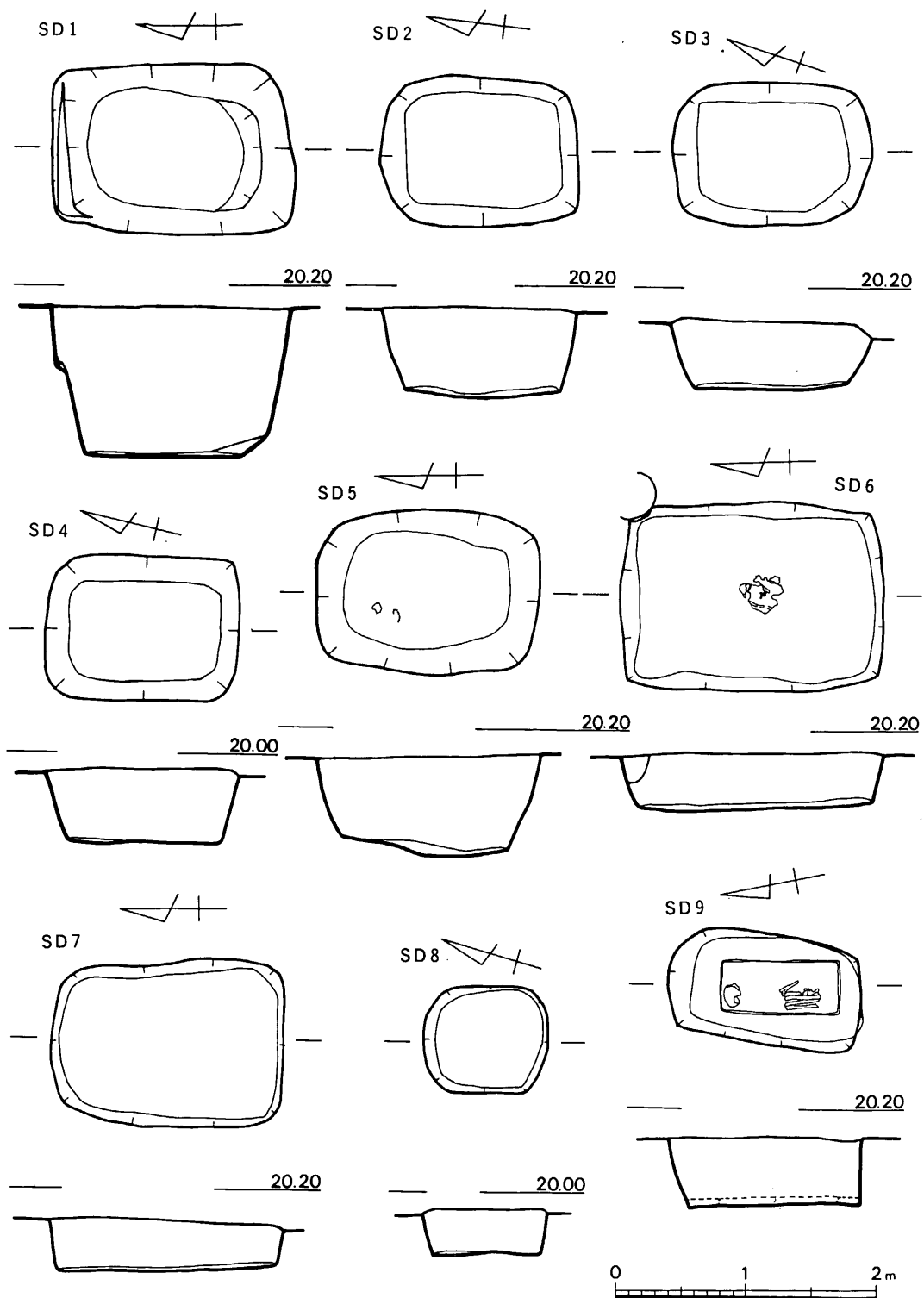
上面プランは1m×0.85mの不整円形を呈す。深さは約50cmを測る。

S D 11

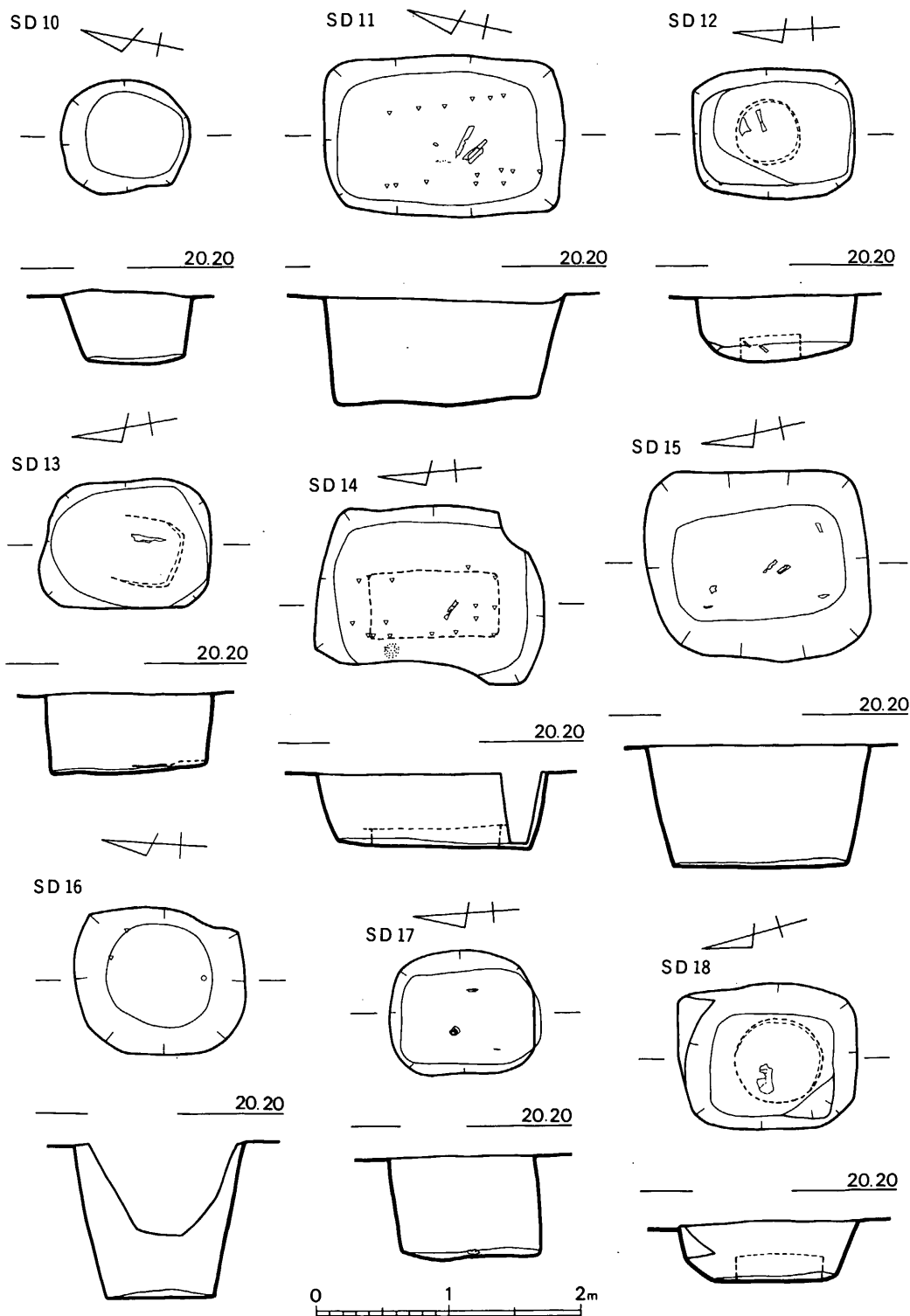
上面プランは約1.8m×1.2mの長方形を呈し、深さは約75cmを測る。調査中、釘が長方形に検出され、木棺が埋置されていたことがわかる。木棺は長さ約85cm以上、幅約55cmと推定される。木棺の主軸はN-21°-Wにとる。床面の中央からは約1.7m×3.2mの鋳物状の小片が出土し、片面に木質が残る。また、その南に下肢骨と思われる骨が出土した。



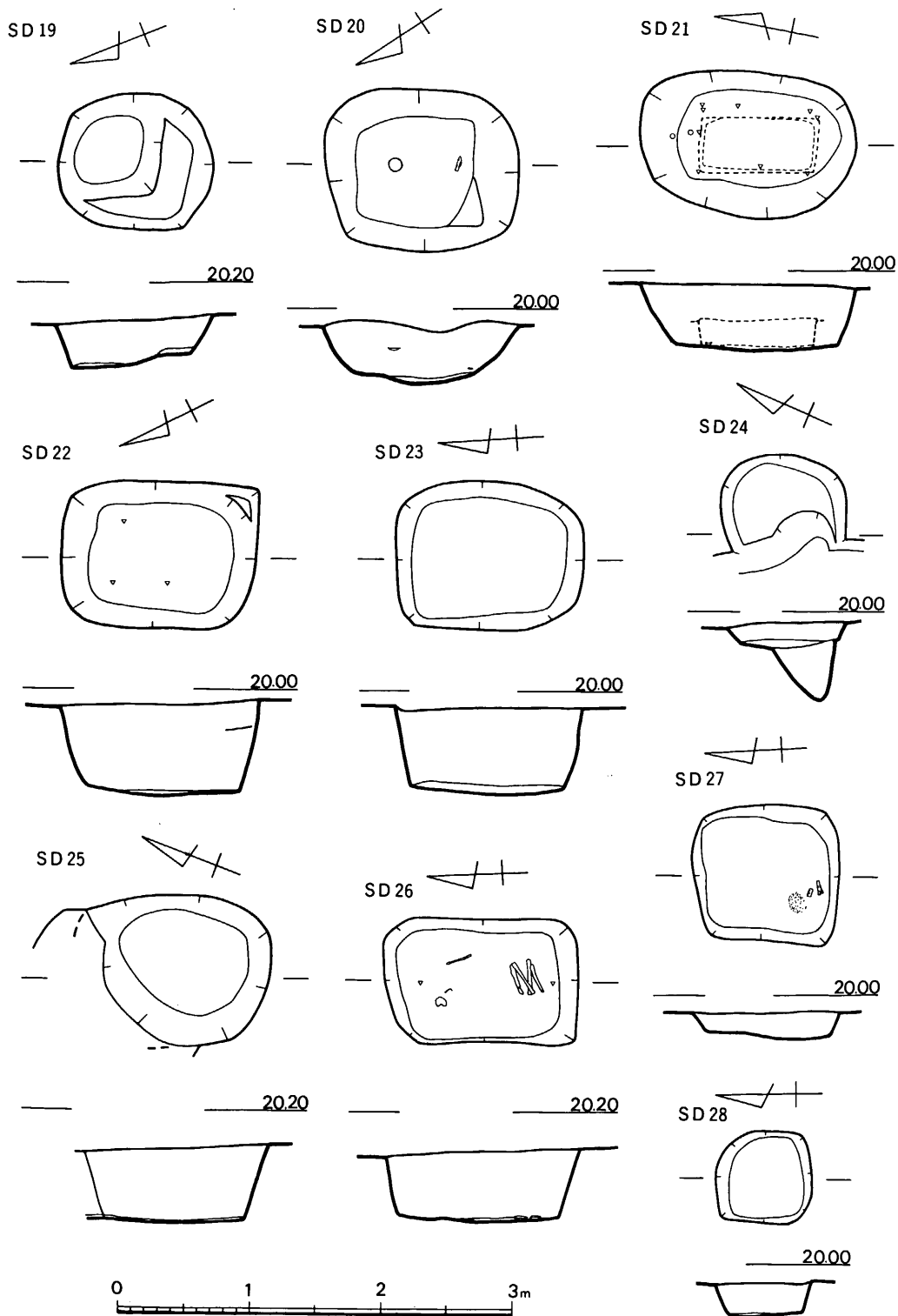
第57図 第3地点遺構配置図 土盛地形図（縮尺1/200）



第58図 SD 1～9 遺構実測図 (縮尺1/50)



第59図 S D 10～18遺構実測図 (縮尺1/50)



第60図 S D 19~28遺構実測図 (縮尺1/50)

S D12

上面プランは約1.2m×1mのやや丸味を帯びた方形を呈す。深さ約50cmを測るが、30cmほど下げた位置で直径約48cmの桶の跡を検出し、さらに3cmほど下げた位置から頭骨の一部が出土し、さらに床面からわずかに浮いて下肢骨の一部と思われる骨が出土した。

S D13

上面プランは約1.25m×1mのやや丸味を帯びる方形を呈す。深さ約60cmを測り、床面に近い位置で棺の跡を検出した。北側は明瞭さを欠き、検出しえなかった。棺は長さ75cm程度、幅約50cmを測り、棺の南東部から下肢骨の一部が出土した。

S D14

S D13-15から東西を切られる。上面プランは約1.7m×1.3mの方形を呈す。深さ約55cmを測り、40cmほど掘り下げた位置で棺の跡を検出した。棺は約9.7cm×50cmを測り、四隅やその周囲から釘が検出され、棺の中央よりやや南側に下肢骨と思われる骨が出土した。また、棺北部の西脇より、数珠玉3個が出土した。

S D15

S D14・16を切るもので、主軸をN-6°-Eにとる。上面プランは約1.7m×1.4mの方形を呈し、深さ約90cmを測る。床面には、北西隅に下顎骨が出土し、その東脇から頭骨が出土する。棺の南半からも肢骨などが認められる。

S D16

S D15に切られる。南北約8mを測る円形の上面プランを有す。深さは約115cmを測り、床面北側縁部から釘が出土し、南部から「寛永通宝」が1枚出土する。

S D17

上面プランは約1.1m×9mの丸味を帯びる長方形を呈し、深さ約75cmを測る。床面には3ヶ所に鉄製品がみられ、出土状況から棺の金具と推定される。形状などは、残りが悪く不明瞭である。また、床面より45cmほど浮いて香爐が出土した。

S D18

上面プランは約1.3m×1.1mの方形を呈し、深さは約43cmを測る。25cmほど掘り下げた所で桶の跡を検出し、それよりやや下から頭蓋骨が出土した。

S D19

上面プランは約1.2m×1mのやや角張る円形を呈し、深さ約35cmを測る。南側に床面よりやや高い平坦面をもつ。

S D20

上面プランは約1.5m×1.25mの丸味の強い方形を呈し、深さ約45cmを測る。床面南側に骨片が残り、北側には床面から20cmほど浮いて陶器碗が出土した。

S D21

上面プランは約1.6m×1.1mの方形プランを有し、主軸をN-12°-Wにとる。深さは約45cmを測るが、25cmほど掘り下げた所で棺の跡を検出した。棺の隅や周囲には釘が出土し、北部には上顎骨の一部と下顎骨が出土した。また、棺外北側から「寛永通宝」が2枚出土した。

S D22

上面プランは約1.5m×1.1mの方形を呈し、深さ約70cmを測る。主軸はN-26°-Eにとり、掘り形の底部で釘3本を出土した。

S D23

上面プランは約1.4m×1.1mを測る。やや丸味を帯びる方形を呈す。主軸はN-4°-Eにとる。

S D24

S D25・26に切られるもので、明瞭さを欠く。ピットの可能性を残す。

S D25

S D26に切られるものである。幅1.2mほどの円形に近い方形を呈すと思われる。

S D26

上面プランは約1.5m×0.9mの方形を呈す。深さ約50cmを測り、主軸はN-3°-Eにとる。床面には頭骨・下顎骨・前腕骨・下肢骨が残っている。人骨の外側に釘が各1本残っており、その距離1mを測る。

S D27

上面プランは約1.1m×1mの四方形を呈し、深さ約20cmを測る。南側に骨片と数珠玉が22個出土した。いずれもガラス製である。

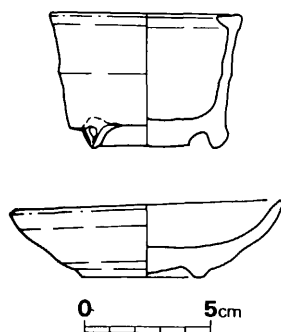
S D28

一辺0.7~0.8mの方形を呈す小形のもので、深さ約25cmを測る。

出土遺物 (第61図)

S D17 口径7.6cm、器高5.3cmを測る陶製の香爐である。口縁部は内方へ屈曲し、体部と底部の境には3個の脚を貼付する。この内側には脚よりやや高い高台を残し、糸切り離しの跡を残す。色調は赤褐色を呈し、硬質である。釉は施されていない。

S D20 口径10.8cm、器高2.9cmを測る陶器碗である。ほぼ全面に緑色の釉が施される。口縁部ほぼ全体にわたって摩られ、一部欠けた所には煤が残り、灯明皿として使用した可能性がある。



第61図

S D17・20出土遺物実測図

(縮尺1/3)

V まとめ

1 A地区の調査

福岡周辺の土師器による編年は、前川威洋氏^{註1}や横田賢次郎・森田勉両氏^{註2}のものが用いられるが、最近、山本信夫氏^{註3}が前述の論を踏まえ論をまとめておられる。本稿では、山本氏のまとめられた論に添い、本遺跡出土土師器の編年的位置を追ってみたい。

SE 1は出土土師器が少なく、必ずしも明確ではないが、皿aはいずれも口径9cm、器高1.2cmを測り、大宰府史跡SK1204に相当するものといえよう。

SE 2は出土土師器の平均値が、皿aで口径9.16cm、器高1.08cmを測り、杯aは口径15.57cm、器高2.89cmを測り、大宰府史跡SK1204に相当するものといえよう。

SE 3は土師器の出土量が少なく、明確ではない。皿aの平均値は口径9.3cm、器高1.05cmを測り、杯a 3、4では口径14.4cm、器高2.8cmを測る。杯aは大宰府史跡SK1085に相当し、皿aも大宰府史跡SK1204に近いが、SK1085の範疇に収まる。井戸の底部から出土した杯a 5はSK1204に相当するものといえよう。

SE 4は多くの土師器を出土した。皿aは計測のみ行なったものに1点、口径7.4cmと小さく、SK830～SK1200に相当しよう。そのほかのものは平均値口径9.12cm、器高1.1cmを測るが、口径7.9～10cmとその幅が広く、大宰府史跡SK1204～SK830の範疇と推測されるが、杯aでは小片からの復原である21を除くと、口径15.1～15.6cmの中に収まり、平均値も15.39cm、器高2.91cmを測る。これはSE1204に相当し、皿aもこの範疇として確定しえよう。

SM 1・3・5～7・9・10は、時期を確定するに足る土師器の出土がなかった。

SM 2は土師器の出土量が少なく明確さを欠くが、平均値は皿aで口径8.2cm、器高1.2cm、杯aで口径13cm、器高3cmを測り、大宰府史跡SK601に相当するものであろう。

SM 4も出土土師器が少ないが、平均値は皿aで口径9.4cm、器高1.37cm、丸底の杯は口径14.91cm、器高3.6cmを測り、大宰府史跡SD860に相当するものである。しかし、杯aはいずれも小さく、平均値は口径12.4cm、器高2.7cmを測り、大宰府史跡SK601～830に属するもので、混入の可能性が高い。

SM 8出土土師器の平均値は、皿aで口径9.17cm、器高0.92cmを測り、大宰府史跡SK1204に相当する。

以上、本遺跡出土の土師器を大宰府史跡の標式遺構に当てたが、SK1204相当とした土師器からは底部がヘラ切り離しのものが見られず、SK1204でも新しい段階、前川威洋氏の編年という所のII 1期に相当するものと思われる。これらを現在推定されている実年代にあてはめると、SE 1・SE 2・SE 4・SM 4・SM 8は12世紀中頃、SE 2・SM 2は12世紀末から

13世紀初頭に位置づけられよう。

SH1・2については、この時期の建物としては、柱間の距離や柱穴が極めて大きく疑問が残るが、SE2・3やSE1も含めて、2時期を考える事ができよう。

以上の事から、A地区はその全容まではつかめないものの、その遺構や輸入陶磁器、石鍋、石製品、銅椀など豊富な遺物から、12世紀代を中心とする時期の豪族の居館と推測されるが、現在の所、その豪族については不明である。

2 A地区SE1・3について

A地区では明確に井戸と認められるものは5基検出された。SE2・4はすでに井戸枠が抜かれていたが、他の3基は井戸枠等の施設が遺存していた。SE5は底部に曲物を据えているもので、上部構造については不明である。SE1は基本的に横田賢次郎氏の形態分類^{註4}にいうII Aと考えられるが、側板に割竹を用いる点^{註5}が異なる。大宰府史跡では側板の一部に竹を用いる例として、極めて稀であるがSE1181、SE2055に見られる。それぞれII A類、II B—C類と形態は異なるが、SE2055はほぼ同時期のものである。構造や竹を利用する点で、SE1は大宰府などで検出された井戸から直接的に出現しえよう。SE3は全て竹で構成しており、SE1のような構造を踏まえて出現したものと考えられる。しかし、SE1・3ともに大宰府に近い位置の遺跡であり、遺物においても豊富なものを持ちながら、板材を使用しなかった（しえなかった）何らかの要因があったものと思われる。

3 A地区出土の石製品

SD、SMから出土した短冊状を呈し、一端に穿孔を有す石製品は、福岡県下では大宰府史跡^{註7}や多々良遺跡などで出土例がある。この石製品については、福田天神遺跡の発掘調査の中で「温石」としてとりあつかわれている。温石の使用例としては『大鏡』第二巻一左大臣時平の項に「…冬はもちゐるとの大なるをば一、ちいさきをば二をやきて、やき石のやうに御身にあってゝもちたまへにけるに、ぬるくなれば、ちみさをばひとつづゝ、おほきなるをばなかよりわりて、御車副になげとらせ給ける。』『明月記』正治元年三月廿一日の条に「終日雨降、辰時許参ハ殿、平中納言参、招予暫言談、午後許僧参聚、御影供丁、布施口別二、無被物、公卿取褰物、二反取之退出、自分朝腰俄通、退出以後焼石、彌以増…」があるが、形態としては言及できない。形態については、安永二年(1773)の作とされる『聞上手』の「狩場の切手」^{註10}に狩場の切手と箱入温石と間違えた笑話が記され、また、寛政二年(1790)刊行の『傾城買四十八手』に「おきゃアがれ、温石か。おらア餅かとおもった。」ともある。『武江年表』の安永年間の項に、「箱入温石始る」とあり、後の温石も箱入温石と考えられる。この2話から「狩場の切手」形、「餅」形を呈し、比較的薄手の四角形であったと推定される。箱入温石は形態的に共通する

所もあるものの時代差が著しく、当遺跡の出土の石製品を温石とするには無理があり、本稿は粗略な資料収集、および検討しかなしえず、より深い研究が望まれる。

4 B地区第1地点の調査

火葬墓の骨蔵器には鉢が用いられている。出土した破片は全て1個体分のみで、他の破片は1点も見られない事から、板材などの植物質のもので蓋をしたものと考えられる。同形態のものはみられないが、波多江遺跡SD003^{註11}や、大宰府史跡今光寺跡の暗青灰色土層・黒色土層^{註12}出土のもの、また、有田・小田部遺跡第19次調査2号溝^{註13}、麦野下古賀遺跡^{註14}などから類似したものが出土しており、時期は限定しえないが、戦国時代のものであろう。

SD2～4はネガティブな正立方体に近い形状を呈し、SD1は陶器碗が出土した事などから土壇墓の可能性が強い。

SM1は縄文時代晩期土器や龍泉窯系碗等も含むが、大半は瓦質土器や土師器である。土師器は口径・器高ともに大宰府史跡金光寺跡Ⅲ期に伴うものの範中に入り、瓦質土器等も類似したものが多く、戦国時代のもものと推定される。

5 B地区第3地点の調査

近世の土壇墓である。28基中箱形木棺を用いたものが6基、小形の桶を用いたものが2基、大形の桶を用いたものが1基、明らかである。土壇の形状から箱形木棺を用いたものが最も多いと思われる。時期は出土遺物からは確定しえない。しかし、この土壇墓がもつ意義は少ない。この土壇群に最も近い集落は西小田であり、距離にして200mほどであるが、この集落の墓地は500mほど西にある丘陵上に数百の墓があり、時期を確定しうる最も古いものは元禄13年である。墓制もまだ十分明らかではないが、試掘調査では全て大甕が用いられていた。これに対し、当土壇墓はほぼ同時期と推定されるものの、墓制も一定ではなく、数も少ない点から、西小田の集落と何らかの関係はあったにせよ、住民と一線を画す人々の墓地であったのではないだろうか。

註

- 註1 『福岡南バイパス関係埋蔵文化財報告書第8集(下)』1978 福岡県教育委員会
- 註2 共著「大宰府出土の土師器に関する覚え書き」『九州歴史資料館研究論集2』 1976
森田勉著 「大宰府出土の土師器に関する覚え書き(2)」『九州歴史資料館研究論集3』
1977
横田賢次郎著 「大宰府出土の土師器に関する覚え書き(3)」『九州歴史資料館研究論
集5』 1979
- 註3 『大宰府条坊跡II』太宰府市の文化財第7集 1983 太宰府市教育委員会
- 註4 「大宰府検出の井戸——とくに形態分類を中心として——」『九州歴史資料館研究論集3』
1977
- 註5 『大宰府史跡 昭和52年度発掘調査概報』1978 九州歴史資料館
- 註6 『大宰府史跡 昭和56年度発掘調査概報』1982 九州歴史資料館
- 註7 註6に同じ
- 註8 『多々良遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第20集 1972 福岡市教育委員会
- 註9 『福田天神遺跡』龍野市文化財調査報告書IV 1982 龍野市教育委員会
- 註10 狩場に入るための通行許可の証明書。四角い木の机の「狩場の切手」と形がよく似てい
たため間違えたもの(『江戸笑話集』日本古典文学大系100 小高敏郎校注 1981第14刷
岩波書店 より)
- 註11 『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第6集上巻』1982 福岡県教育委員会
- 註12 『大宰府史跡 昭和55年度発掘調査概報』1981 九州歴史資料館
- 註13 『有田・小田部第4集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第96集 1983 福岡市教育委員会
- 註14 『麦野下古賀遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第107集 1984 福岡市教育委員会

棟号	番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	切り離し ヘラ	離し 糸	内部の ナアの有無	板状圧痕 の有無	出土部位
S E 1									
土師器 皿 a									
1	1	9	1.2	6.7				○	
2	2	9	1~1.2	7				○	
瓦 器 碗									
3	3	16.4				○			VI
陶 器 壺									
4	4	17.3							VI
白 磁 碗									
5	5	16.6							II
6	6	16.3							VII
7	7			6.5					II
8	8			7					VI
S E 2									
土師器 皿 a									
1	1	8.3	1.2	5.6		○	○	○	I
2	2	8.3	1.1	6		○	○	○	I
3	3	8.4	1	6.9		○	○	○	I
4	4	8.5	0.8	6.2		○	○	○	I
5	5	8.5	1.1	7.2					I
6	6	8.6	1.3	6		○	○	○	I
7	7	8.6	1.1	6.4		○	○	○	I
8	8	8.6	1.1	6.9		○	○	○	I
9	9	8.6	0.9	7.2		○	○	○	I
10	10	8.7	1.1	5.5		○	○	○	I
11	11	8.7	1.2	6.7		○	○	○	I
12	12	8.8	1	6.3		○	○	○	I
13	13	8.8	1	7		○	○	○	I
14	14	8.9	1.1	5.9		○	○	○	I
15	15	8.9	1	7.3		○	○	○	I
16	16	8.9	1	6		○	○	○	I
17	17	9	1.3	6.4		○	○	○	I
18	18	9	1	6.9		○	○	○	I
19	19	9	0.9	8		○	○	○	I
20	20	9	0.8	6.4		○	○	○	I
21	21	9	0.8	7.1		○	○	○	I
22	22	9	1.1	6.4		○	○	○	I
23	23	9	1.1	6.4		○	○	○	I
24	24	9	1.1	6.1		○	○	○	I
25	25	9	1.2	6.6		○	○	○	I
26	26	9	1.4	7.1		○	○	○	I
27	27	9.1	1.1	6.6		○	○	○	I
28	28	9.1	1.1	6.9		○	○	○	I
29	29	9.1	1	6.3		○	○	○	I
30	30	9.2	1.1	6.3		○	○	○	I
31	31	9.2	1.2	7		○	○	○	I
32	32	9.2	1	6.5		○	○	○	I
33	33	9.2	0.9	6.8		○	○	○	I
34	34	9.3	1.2	6.3		○	○	○	I
35	35	9.3	1.4	7.8		○	○	○	I
36	36	9.3	1.2	6.5		○	○	○	I
37	37	9.4	1.3	6		○	○	○	I
38	38	9.4	1.3	6.8		○	○	○	I
39	39	9.4	1	8.1		○	○	○	I
40	40	9.4	1	7.2		○	○	○	I
41	41	9.4	1	6.1		○	○	○	I
42	42	9.4	0.9	6.6		○	○	○	I
43	43	9.4	0.8	6.7		○	○	○	I
44	44	9.4	1.1	6.5		○	○	○	I
45	45	9.4	0.9	6.5		○	○	○	I
46	46	9.5	1	6.8		○	○	○	I
47	47	9.5	0.9	6.5		○	○	○	I
48	48	9.6	1.2	7.3		○	○	○	I
49	49	9.6	1.4	7.1		○	○	○	I
50	50	9.6	1.1	7.9		○	○	○	I
51	51	9.6	1	7.3		○	○	○	I
52	52	9.6	1	8.4		○	○	○	I
53	53	9.6	1.2	7.2		○	○	○	I
54	54	9.6	1	6.1		○	○	○	I
55	55	9.6	0.9	6.9		○	○	○	I
56	56	9.1	1	7.3		○	○	○	I
57	57	9.6	1.3	7.7		○	○	○	I
58	58	9.7	1.4	6.7		○	○	○	I
59	59	9.7	1.1	6.8		○	○	○	I
60	60	9.7	1.1	7.2		○	○	○	I
61	61	9.7	0.9	6.9		○	○	○	I
62	62	10	1	6.8		○	○	○	I
63	63	8.7	1.3	6.2		○	○	○	I
64	64	8.8	1.2	7.5		○	○	○	II
65	65	8.8	1~1.2	7.5		○	○	○	II
66	66	9.3	1.1	6.7		○	○	○	XX II

棟号	番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	切り離し ヘラ	離し 糸	内部の ナアの有無	板状圧痕 の有無	出土部位
土師器 皿 c									
45	67	9.6	1.8	6		○	○	○	I
土師器 杯 a									
46	68	14.6	2.9	10.2		○	○	○	I
47	69	15	2.5	11.2		○	○	○	I
48	70	15.3	2.6	10.5		○	○	○	I
49	71	15.4	2.9	10		○	○	○	I
50	72	15.4	2.7	9.6		○	○	○	III
51	73	15.5	3.2	10.5		○	○	○	I
52	74	15.8	3.2	10.1		○	○	○	I
53	75	16	2.8	10.5		○	○	○	I
54	76	16	3	11.1		○	○	○	I
55	77	16.1	2.9	10.9		○	○	○	I
56	78	15.8	3	9.3		○	○	○	II
57	79	15.9	2.8	13.6		○	○	○	II
58	80	15.6	3	11.5		○	○	○	XX VII
59	81	15.6	3	10.4		○	○	○	下位
瓦 器 皿									
59	82	9.6	1.4	7.7		○	○	○	XXVIII
60	83	10.2	2.1	7.8		○	○	○	II
瓦 器 碗									
61	84	16.8-17.8	6.9-5.9	7~6.5					XX
62	85	17.1	5.4-5.2	7					XX II
白 磁 碗									
63	86			6.6					I
64	87			6.4					中位
65	88	16.6	6.2	5.2					XXVIII
白 磁 皿									
66	89	10.4	2.5	4.9					II
背 磁 碗									
67	90	12.2							I
S E 3									
土師器 皿 a									
1	1	9.4	1.2	6.8		○	○	○	III
2	2	9.2	0.9	7		○	○	○	IV
土師器 杯									
3	3	14.4	2.8	10		○			III
4	4	14.4	2.8	10.3					III
5	5	15.2	2.5						井戸内底面
瓦 器 碗									
6	6	17.6							III
7	7	17.8	6.1	6.6					VIII
褐 釉 系 陶 器									
8	8								II
白 磁 壺 or 鉢									
9	9	14.4							II
白 磁									
10	10			6					II
11	11			6					I
白 磁 皿									
12	12	10.4	2.8	2.9					I
S E 4									
土師器 皿 a									
1	1	7.4	1.2	4.4		○	○		I
2	2	7.9	1.1	6		○			I
3	3	8.2	1	6.5		○		○	I
4	4	8.3	1	6.6					I
5	5	8.6	1.1	6.1		○	○	○	I
6	6	8.6	1	5.7		○	○	○	I
7	7	8.7	1	5.7		○	○	○	I
8	8	8.7	1.3	6.5		○	○	○	I
9	9	8.8	1.2	6.2		○	○	○	I
10	10	8.9	0.9	7.2		○	○	○	I
11	11	9	1	6.2		○	○	○	I
12	12	9	1.3	5.8		○	○	○	I
13	13	9.1	1.2	7.7		○	○	○	I
14	14	9.1	1.2	6.6		○	○	○	I
15	15	9.1	1	7.2		○	○	○	I
16	16	9.2	1.1	7.1		○	○	○	I
17	17	9.2	1.2	6.9		○	○	○	I
18	18	9.2	1	6.8		○	○	○	I
19	19	9.2	1	6.5		○	○	○	I
20	20	9.2	1	6.3		○	○	○	I
21	21	9.2	0.9	6.6		○	○	○	I
22	22	9.3	1.3	6.4		○	○	○	I
23	23	9.3	0.8	7		○	○	○	I
24	24	9.3	1	6.7		○	○	○	I
25	25	9.4	1	7.3		○	○	○	I
26	26	9.4	1	6.5		○	○	○	I
27	27	9.5	1.2	6.8		○	○	○	I
28	28	9.5	1.2	6.8		○	○	○	I
29	29	9.6	1.2	7.4		○	○	○	I

標記番号	番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	切り離し ヘラ	内底部の ナデの有無	板状圧痕 の有無	出土部位
	30	9.7	1.3	7.2		○	○	I
	31	9.7	1.3	7.2		○	○	I
20	32	9.8	1.3	7		○	○	I
21	33	10	1.1	7		○	○	I
22	34	9	1	6.2		○	○	I
23	35	9.1	1.2	7.7		○	○	I
25	36	9.5	1.1	6.4		○	○	I
26	37	9.2	1.1	7.1		○	○	I
24	38	9.3	0.8	7		○	○	II
土師器 杯 a								
27	39	11.9	2.3	9		○	○	形状不明
28	40	15.4	2.6	10.6		○	○	I
29	41	15.4	2.4	9.4		○	○	I
	42	15.4	1.8	11.8		○	○	I
30	43	15.6	3.1	10.5		○	○	I
	44	16	3.1	9.8		○	○	I
31	45	16.2	3	10.7		○	○	I
32	46	16.5	2.9	9.6		○	○	I
33	47	16.8	2.6	12.2		○	○	I
48	48	17.8	2.5	13.2		○	○	I
34	49	15.9	2.9					II
土師器 高台碗 a								
35	50	16						
黒色土器 碗								
36	51		8.75					P.1.P.2
瓦器 枕								
37	52	16.4		7.6		○		
38	53							
瓦器 皿								
6	54	9.1	1.3	7		○		I
白磁 碗								
39	55	16.4						
40	56		7.1					
41	57	16.7	5.5	6.3-5.9				I
42	58			6				IV
43	59	16.8						II
44	60	17.4						VII
45	61	17.2	5.9	6.2-6.4				VIII
46	62	16.7	7.4	6.6-6.1				
白磁 皿								
47	63	9	4.2	2.1				VIII
48	64	16.6	7	6				II
49	65	14.4						
土鍋								
50	66	35.6	13.5	3.5-3				
S E 5								
瓦器 碗								
1	1	17				○		
土鍋								
2	2	47.2						桶内
S D 1								
土師器 皿								
	1	8.4	1.3	6.5		○	○	I
	2	8.6	1.2	6.4		○	○	I
	3	8.8	1.5	6.5		○	○	I
	4	8.9	1.4	6.4		○	○	I
1	5	9.2	1	7.1		○	○	I
2	6	9.4	1.2	6.5		○	○	I
3	7	9.5	1	6.9		○	○	I
4	8	9.6	1.4	7.1		○	○	I
瓦器 皿								
5	9	9.8	1.4	5.8		○	○	I
6	10	10.2						上位
瓦器 碗								
7	11	17	5.1					
白磁 碗								
8	12	16.8						
9	13	16.2						
10	14		6.8					下位
11	15		6.4					
12	16	17.6	6.6	7.6				
青磁 or 白磁								
13	17	16.6						II
S D 2								
土師器 皿 a								
1	1	8	1.3	5.8				
2	2	8.6	1	6.6				
3	3	8.6	1	5.7		○	○	
4	4	8.6	0.9	6.6		○		
5	5	8.6	0.8	6.7		○		
6	6	8.7	1.1	6.5		○	○	

標記番号	番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	切り離し ヘラ	内底部の ナデの有無	板状圧痕 の有無	出土部位
7	7	8.7	1	6		○	○	
8	8	8.8	1.1	6.7		○	○	
9	9	8.8	1	6.7		○	○	
10	10	9	1	6.7		○	○	
11	11	9.1	1	6.8		○	○	
12	12	9.2	1.2	6.3		○	○	
13	13	9.2	0.6	7.6		○	○	
14	14	9.4	0.8	7.1		○	○	
15	15	9.5	1.1	6.8		○	○	
16	16	9.5	0.8	8.8		○	○	
17	17	9.6	1.1	6.5		○	○	
18	18	9.7	1.2	6.6		○	○	
19	19	9.7	1	7.9		○	○	
土師器 杯 a								
20	20	13.2	3	7.8		○	○	
21	21	15.1	2.8	11		○	○	
22	22	15.3	3.2	10.3		○	○	
23	23	15.2	2.9	10.1		○	○	
24	24	15.4	2.6	10.2		○	○	
25	25	15.3	2.9	10.6		○	○	
26	26	15.6	3	10		○	○	
27	27	15.6	3.4	9.7		○	○	
28	28	15.6	2.4	10.8		○	○	
土鍋								
29	29		13					VI
陶器 鉢								
30	30	26.6						
S M 1								
白磁 碗								
1	1	17.8-17.5	6.1-6.5	6.2-6.4				
S M 2								
土師器 皿 a								
2	1	8.2	1.1	6		○	○	上位
3	2	8.2	1.5	5.2		○	○	上位
4	3	8.2	1	5.5		○	○	上位
土師器 杯 a								
5	4	13	3	7.6		○		上位
青磁 碗								
6	5	16.2	5	7.6				上位
7	6			6				
S M 3								
土師器 皿 a								
8	1	9.8	1.1	7.6		○		
S M 4								
土師器 皿 a								
9	1	9	1.2	7.1		○	○	下位
10	2	9.4	1.3			○	○	下位
11	3	9.8	1.6	7.2		○	○	
土師器 杯 a								
13	4	12.4	2.8	8.2		○	○	上位
14	5	12.1	2.7	9		○	○	上位
15	6	12.8	2.6	8.1				
土師器 丸底の杯								
12	7	9.1	2.8					
16	8	15.3	3.7					下位
17	9	15.4	3.4					上位
18	10	15.7	3.4					下位
19	11	15.8	3.5	9.3		○	○	下位
20	12	16.3	3.4					
土師器 碗								
21	13	16.8	5	7.4				上位
瓦器 碗								
22	14	17-17.7	5.1-5.4	6.8				下位
S M 8								
土師器 皿 a								
23	1	8.8	1	5.6		○	○	
24	2	8.9	0.7	7.8		○	○	上位
25	3	9	1	7.3		○	○	
26	4	9.2	0.9	8				
27	5	9.5	1	7.1		○	○	
28	6	9.6	0.9	8.2		○	○	
土師器 杯 a								
29	7	14.6	2.8	11.2		○	○	
30	8	15.4	2.7	11.2		○	○	
31	9	15.6	3	10		○	○	上位
32	10	15.8	2.5	10.8				
33	11	16	3.4	9.9		○	○	上位
34	12	16.4	3.2	9.9		○	○	
35	13	14.8	3	9.3		○	○	下位

標図番号	番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	切り離し ヘラ	離し 糸	内底部の ナデの有無	板状圧痕 の有無	出土部位
36	14	14.9	3	10.2		○	○	○	下位
37	15	15.3	3.5	11.5		○	○	○	下位
38	16	15.6	3.2	10.3		○	○	○	下位
39	17	15.7	2.9	10.2		○	○	○	上位
瓦 器 碗									
40	18	17.2	5.7	7		○			上位
41	19	16.4	6.2	4.5					
陶 器 壺									
42	20		8						下位
陶 器 甕									
65	21	13		6.7					
白 磁 碗									
43	22	17.8	6.9	7.2					上位
44	23	15.4							下位
45	24	15.2							
46	25	16.8							
47	26	17.4							
48	27	17.6							
49	28	17							
50	29	18.2	4.3						
51	30	18.6							
白 磁 皿									
52	31	9.8							
青 磁 碗									
53	32	15.4	5.6	6.2					下位
54	33	7.8							上位
55	34	7.6							
56	35	15.9							
57	36	15.8							I
58	37	16							I
59	38		5						I
60	39		5.6						
青白磁 合子(身)									
61	40	4.4	2.2	3.8					
S M 10									
土 師 器 杯 a									
62	1	12.2	3.2	8.5		○	○		上位
63	2	13	2.3	8.6			○		上位
64	3	15.8	3.3	11.6		○	○	○	上位
S H 1									
土 師 器 皿 a									
1	1	7.2	1.4	5.7		○	○		I
2	2	7.6	1.3	6.3		○		○	I
3	3	7.7	1.2	5.8		○	○		I
4	4	8.4	1.2	6.8		○		○	I
	5	8.4	1.3	6.9			○	○	I
	6	8.5	0.9	7.8		○			I
	7	8.8	2.3	6.7		○			I
	8	9	1.1	6.2		○	○		I
	9	9.2	1.4	6.8		○	○	○	I
土 師 器 杯 a									
	10	11.8	2.3-2.5	8.1		○	○		I
	11	12	2.3-2.4	7.8		○	○		I
8	12	12.5	2.9	9.5		○	○	○	I
9	13	12.9	2.8	8.5		○		○	I
	14	13.2	1.4-1.9						I
10	15	13.4	2.5	7.9		○			
11	16	13.8	2.7	9.9		○			I
12	17	15.9	3.2	10.5		○	○	○	I
瓦 器 碗									
13	18	17							
14	19								
瓦質土器 鉢									
15	20	35.2	7.4						
16	21	26.8		8.8		○			
陶 器 壺									
17	22		6.8						
18	23	7.4							
白 磁 皿									
19	24	10.4	2.1	6.1					
青 磁 碗									
20	25		5.5						
S H 2									
土 師 器 皿 a a									
21	1	9.3	1	6.8		○	○	○	
土 師 器 杯 a a									
22	2	15.8	2.5	10.8		○	○	○	
23	3	16.7	3	10.9		○	○	○	
白 磁 皿									
24	4	8.1	1.6	4.1					
25	5	12	2.8	6.8					

標図番号	番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	切り離し ヘラ	離し 糸	内底部の ナデの有無	板状圧痕 の有無	出土部位
26	6			6.4					
青 磁 皿									
27	7	10.4	2	5.2					
ビット									
土 師 器 皿									
	1	8.6	1.2	6.9		○	○		97
	2	9.3	0.8	8.3		○	○	○	111
	3	7.6	1.1	6.3		○	○	○	113
	4	7.9	1	6.9		○	○	○	113
	5	8	0.7	7		○	○	○	113
	6	8	1	6.7		○	○	○	113
	7	8.4	1.3	7.4		○	○		113
	8	8.5	1	6.8		○	○		113
	9	8.7	0.9	7.9		○	○	○	113
	10	8.9	0.8	8.1		○	○	○	113
	11	9	1.7	7.6		○	○	○	113
	12	9.1	1.1	8.8		○	○	○	113
	13	7.2	1.3	5.6		○	○	○	126
	14	8.7	1.3	6.7		○	○	○	153
	15	9.1	1.7	6.8		○	○	○	153
	16	9.6	1.7	7.2		○	○	○	153
	17	7.4	1.2	6.1		○	○	○	154
	18	8.2	1.6	6.2		○	○	○	188
	19	8.6	1.3	5.8			○	○	188
	20	9.1	1.5	7		○	○	○	188
	21	9.2	1.3	6.8		○	○	○	188
	22	9.2	1	6.9			○	○	188
	23	9.3	0.9	7.4			○	○	188
	24	9.3	1.4	7.1	○		○	○	193
	25	9	1.7	6.2		○			216
	26	8.9	1	6.4		○		○	224
	27	9.3	1.2	7		○	○		226
	28	9	1.3	6.8		○	○		231
	29	8.6	1	7.1		○	○		245
	30	7.9	1.3	5.9		○	○	○	250
	31	8.3	1.3	6.3		○			250
	32	8.2	0.7	7.4					251
	33	9	1.3	6.2		○			251
	34	8.4	0.9	7.2		○	○	○	253
	35	8.4	0.8	6.4		○	○	○	253
	36	8.5	1.1	6.8		○			253
	37	9.4	1	7.8		○	○	○	253
	38	9.5	1.2	7.6			○	○	253
	39	9.1	2.3	5.8			○		255
	40	8.2	1.4	6.8		○	○		262
土 師 器 杯									
	41	12.2	2.7	7.8		○		○	40
	42	12.3	2.8	8.3		○	○	○	94
	43	14.1	2.3	11.4		○	○	○	96
	44	10.7	2.5	7.7		○	○	○	105
	45	16.6	3	12.5		○	○	○	112
	46	13.9	2.5	8.7		○			113
	47	15.6	2.6	11		○	○		232
	48	12	2.9	4.6		○	○	○	250
	49	13.2	2.7	9.8		○	○	○	250
	50	13.4	3	9.2		○			250
土 師 器 鉢									
	51	43							111
	52			10.7					112
瓦 器 碗									
1	53	17							112
瓦質土器 鉢									
	54	10.1							111
	55	28.4							159
	56	29.2							193
陶 器 壺									
	57	8							158
白 磁 皿									
2	58	6.4	3.7	11.4					158
表 土									
白 磁 碗									
1	1	15.6	6	6					
白 磁 皿									
2	2	9.6	2.2-2.1	2.8					
3	3	10.8	3	5.4					
4	4	11.3	3.5	4.7					
青 磁 碗									
5	5	15.8	6.3	5					
青 磁 皿									
6	6	9.6	2.2	4.2					

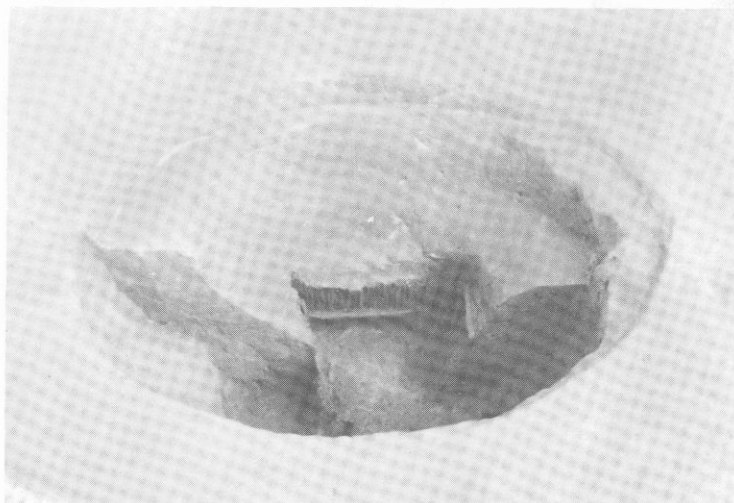
版 図



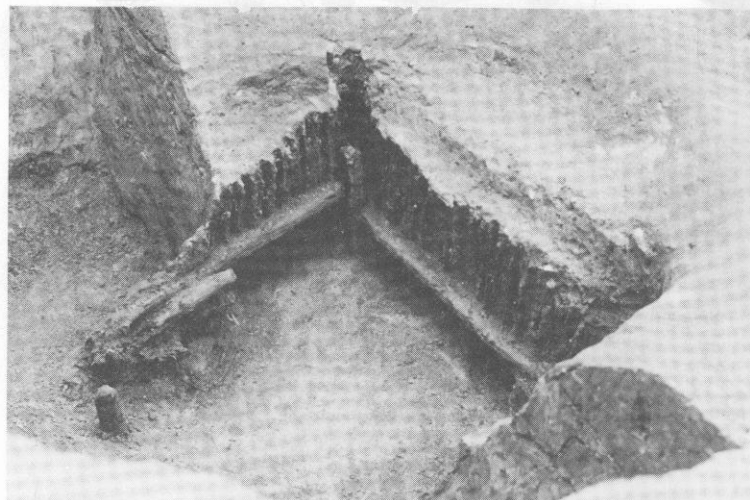
A地区調査区全景（東より）



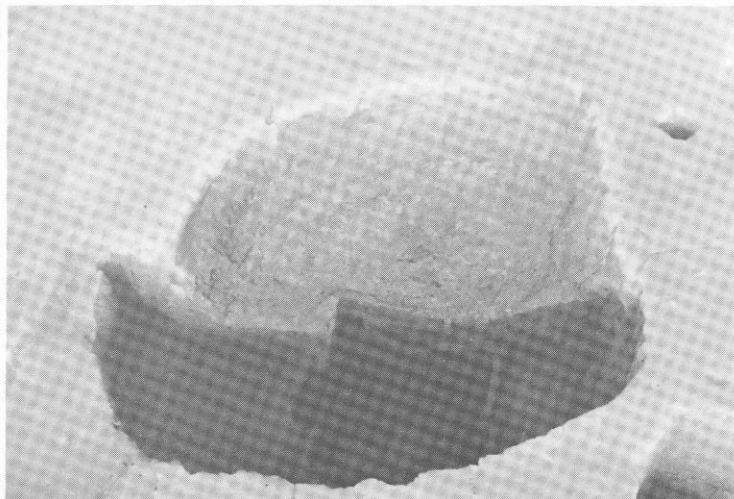
A地区調査区全景（上空より）



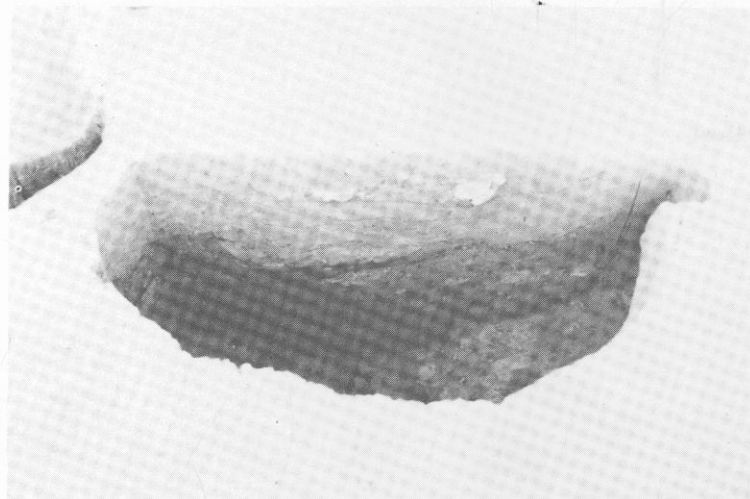
SE1 (西より)



SE1 井戸枠 (南より)



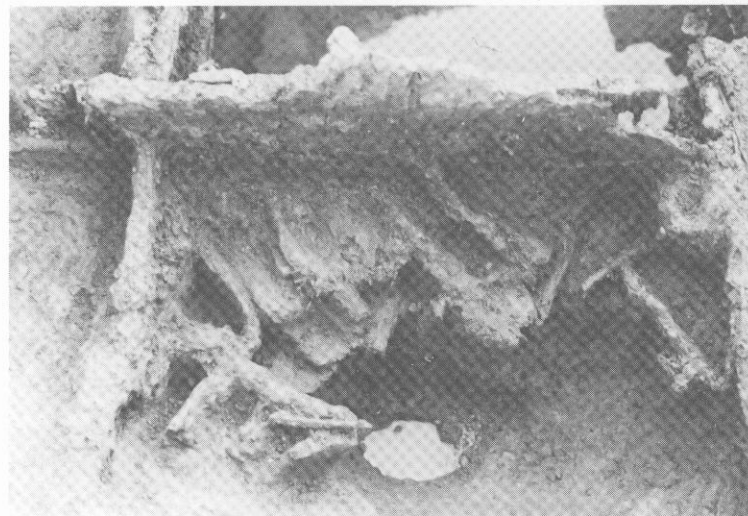
SE3 (西より)



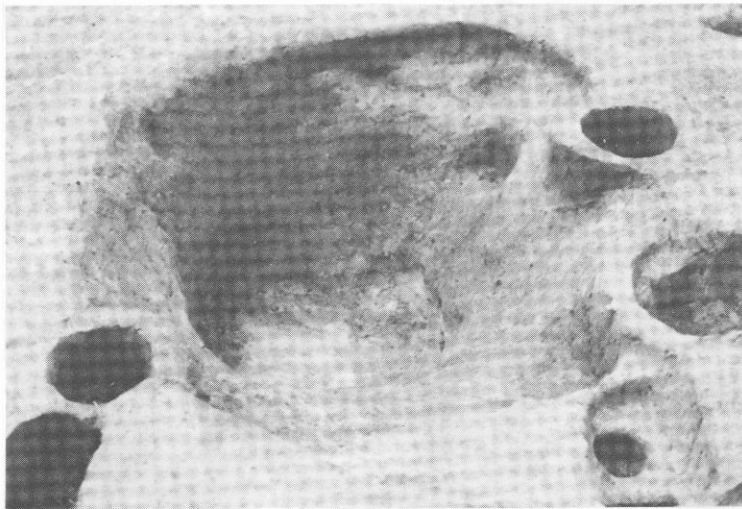
SE2断面 (西より)



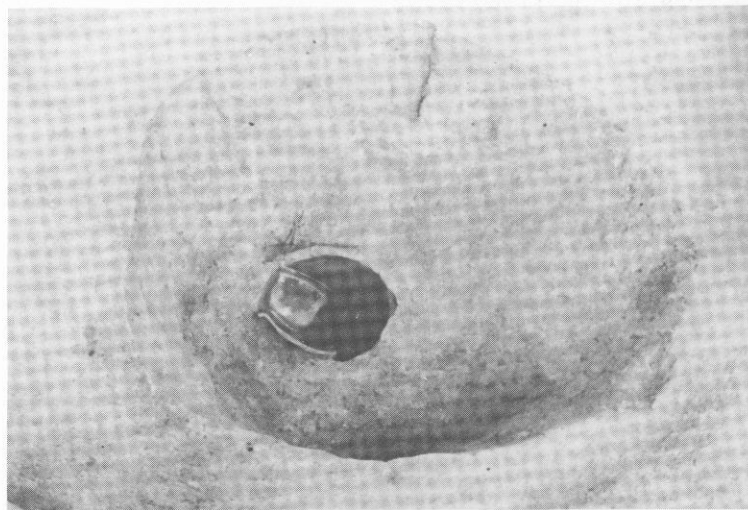
SE3井戸枠（西より）



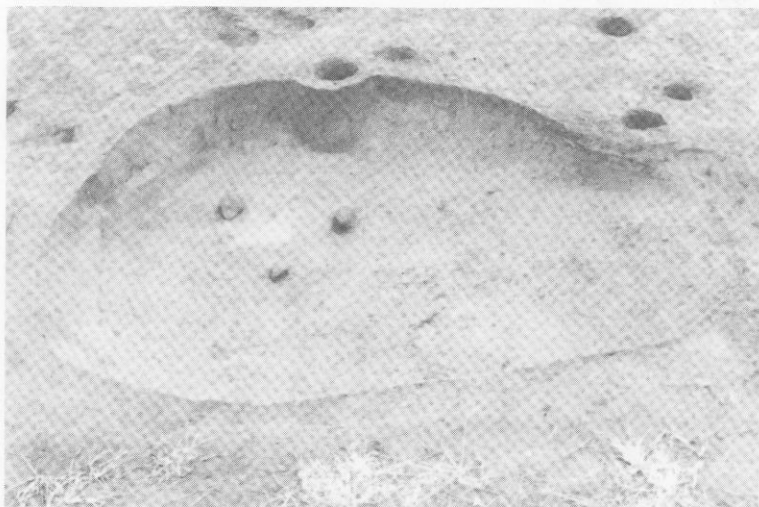
SE3井戸枠裏込め



SE4（北より）



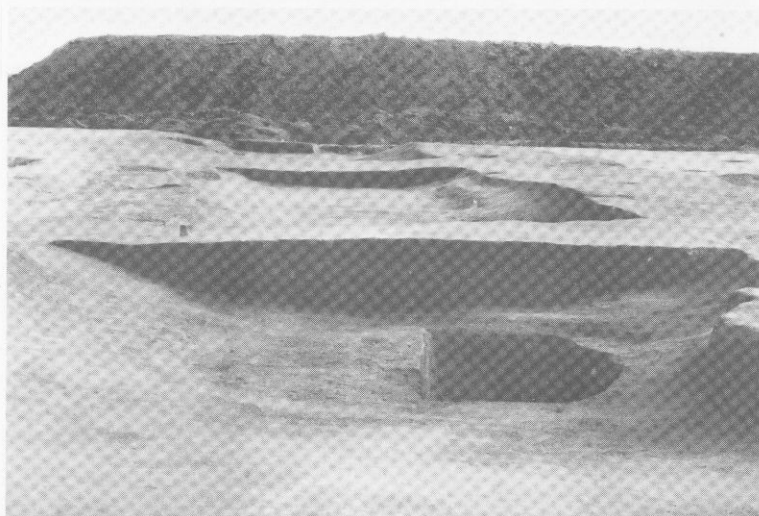
SE5（西より）



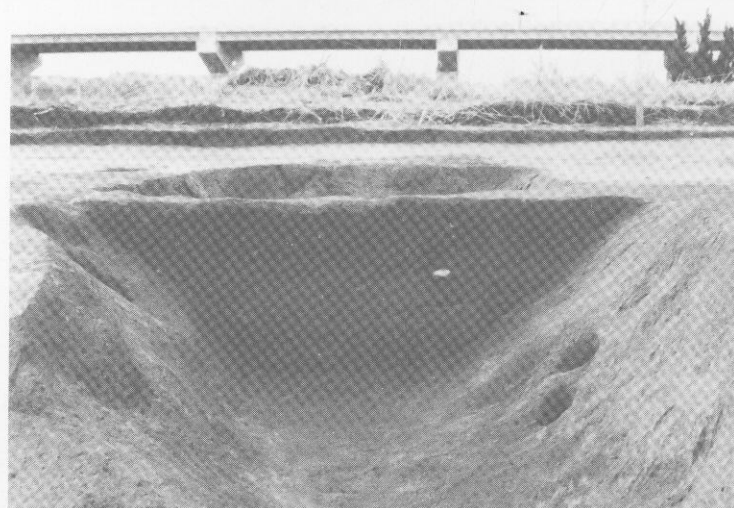
SD1 (北より)



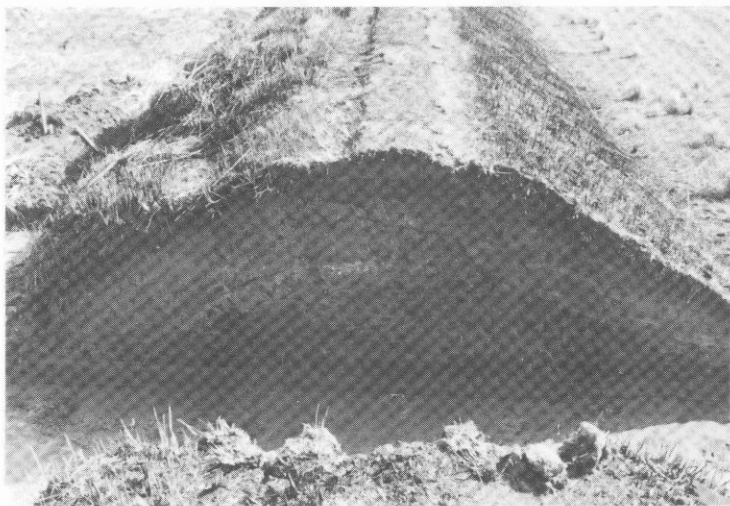
SM4 (南より)



SM7 (北より)



SM8 (南より)



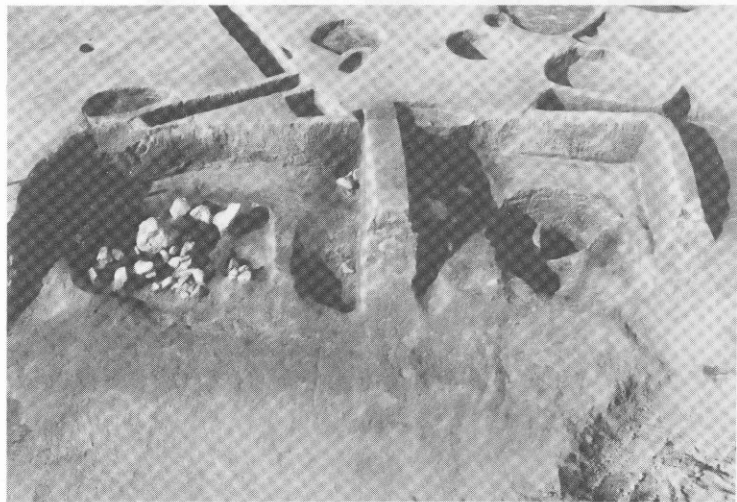
ひかえ堤断面（西より）



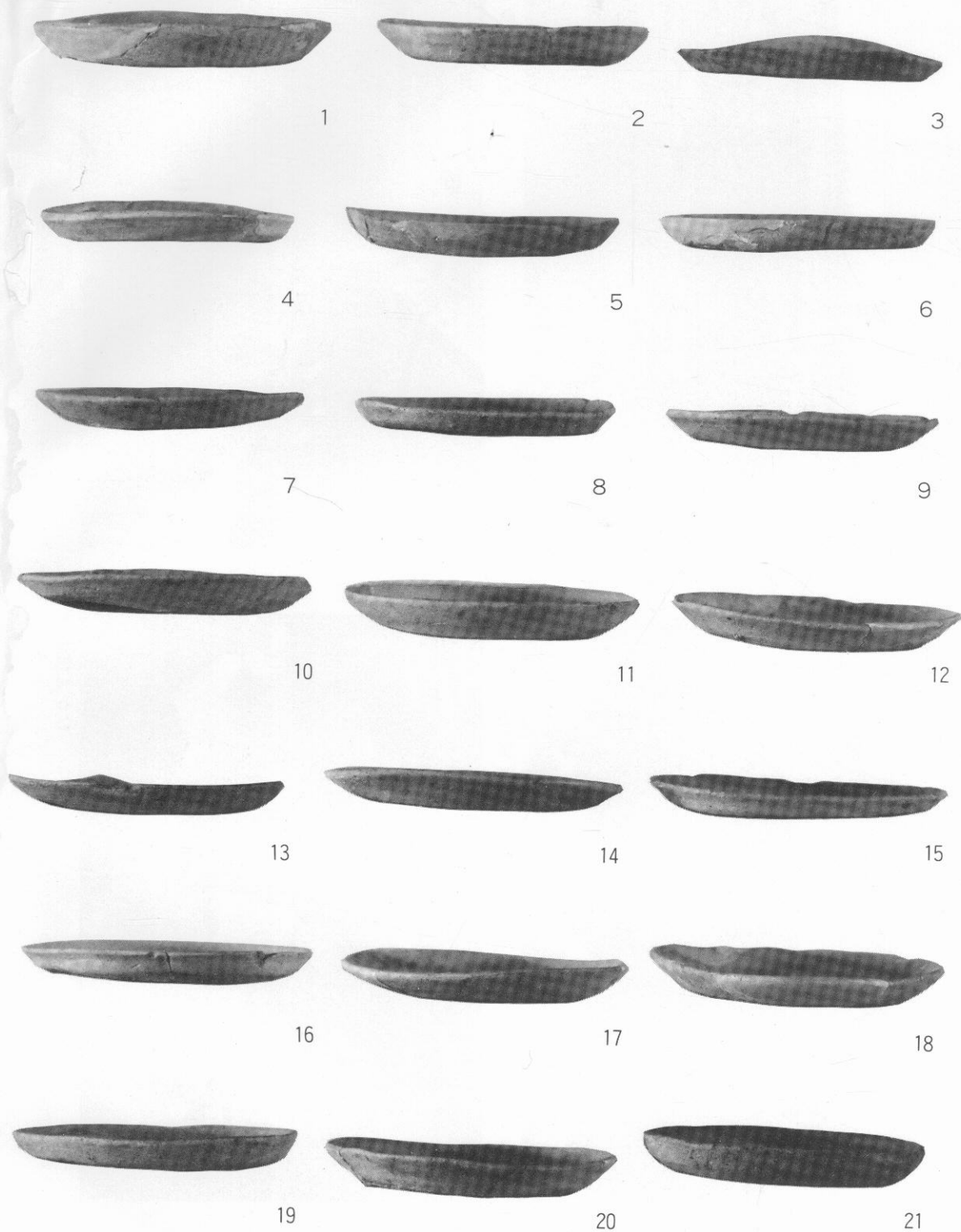
ひかえ堤一部（東より）



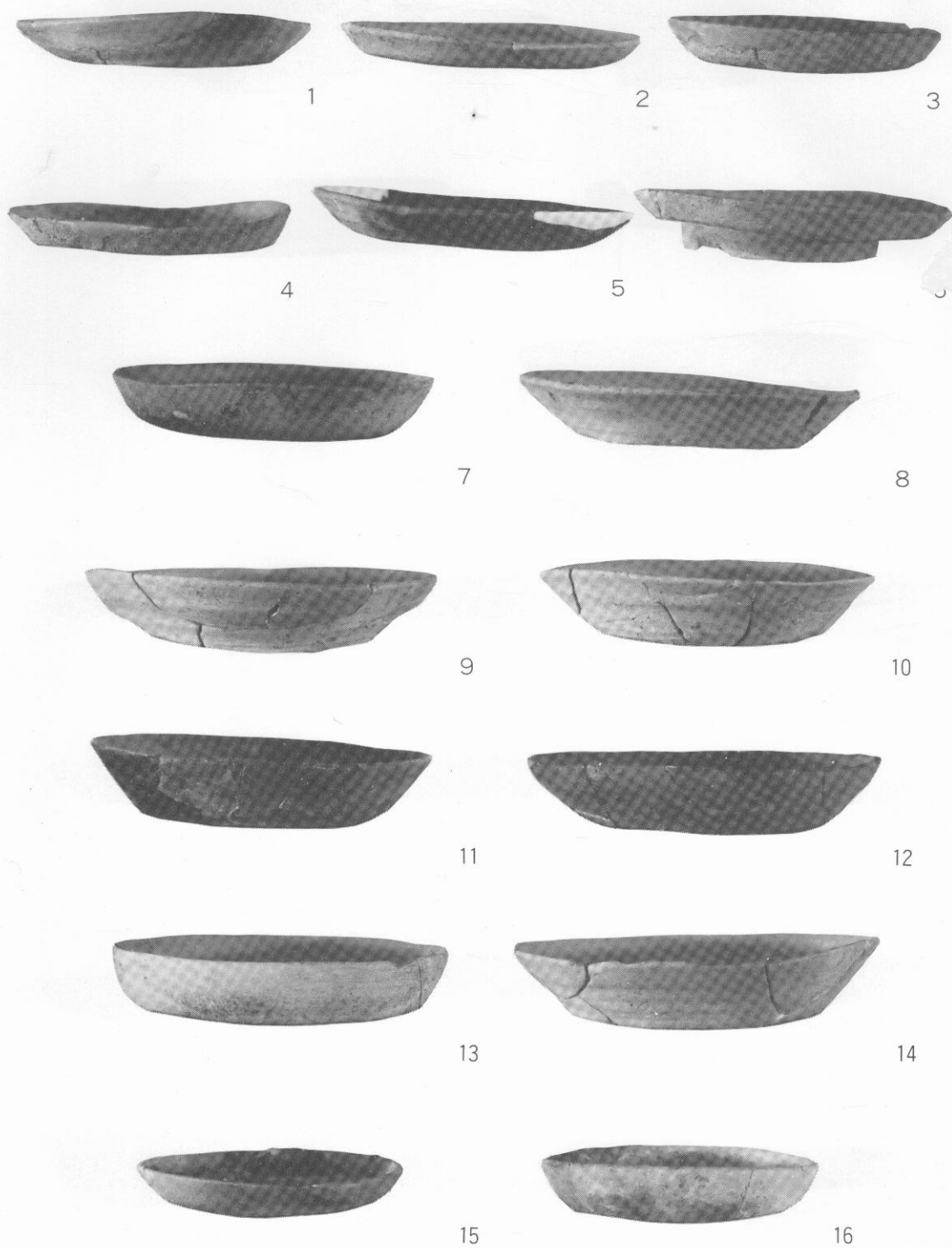
ひかえ堤水門



SH1（南より）

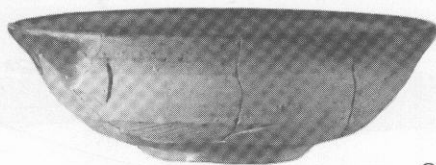


1. A地区SE1出土土師器
2~21 A地区SE2出土土師器





1



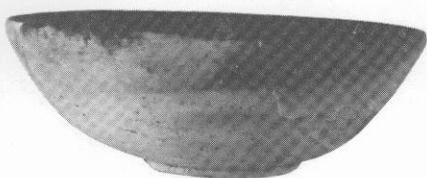
2



3



4



5



6



7



8



9



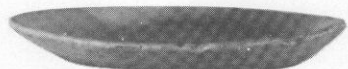
10



11



12



13



14



15



16

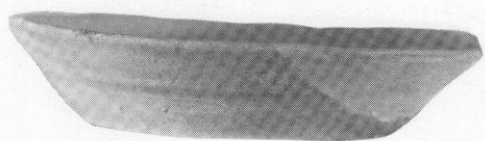


17

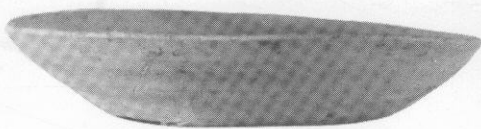


18

1~2 SE2出土瓦器
3~5 SE3出土
6~18 SE4出土



1



2



3



4



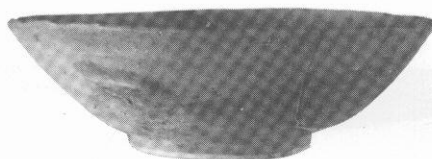
5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15

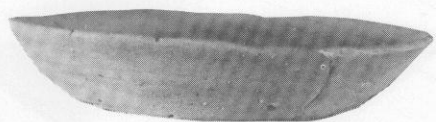


16

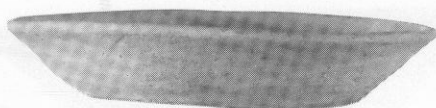


17

1~4 SE4
5~8 SD1
9~17 SD2



1



2



3



4



5



6



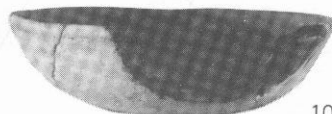
7



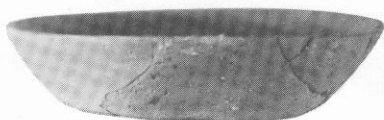
8



9



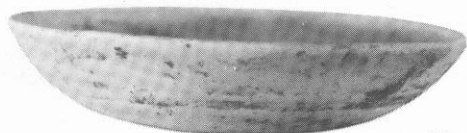
10



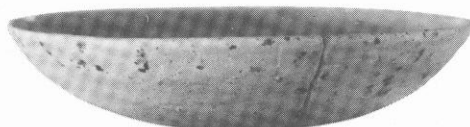
11



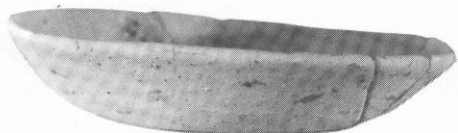
12



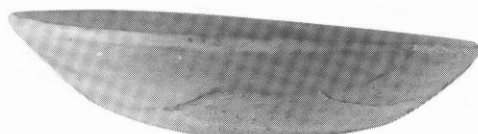
13



14

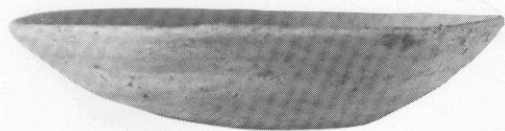


15

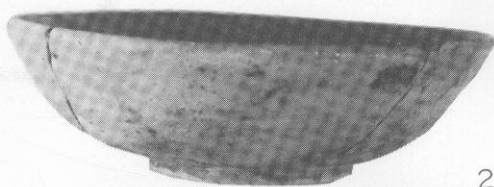


16

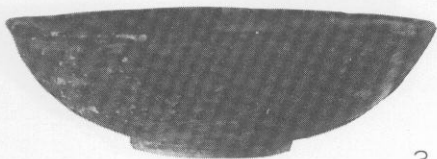
1~4 SD2
5~16 SM4



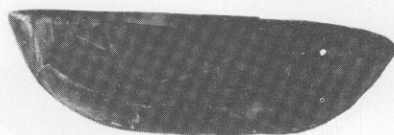
1



2



3



4



5



6



7



8



9



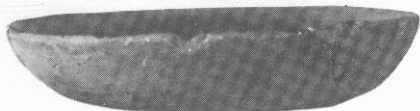
10



11



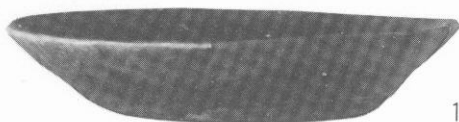
12



13



14

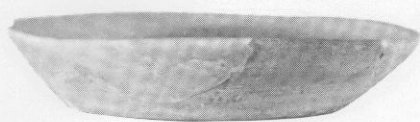


15



16

1~4 SM4
5~16 SM8



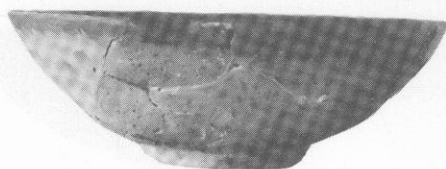
1



2



3



4



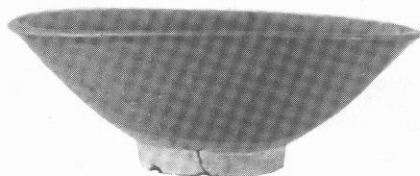
5



6



7



9



8



10

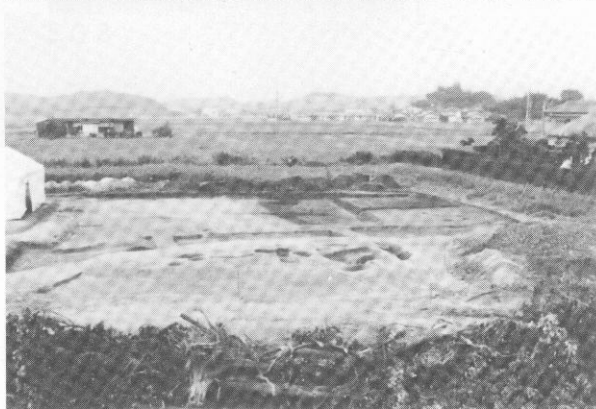


11

1~5 SM8
6 SM1
7~8 SE2
9~11 SE4



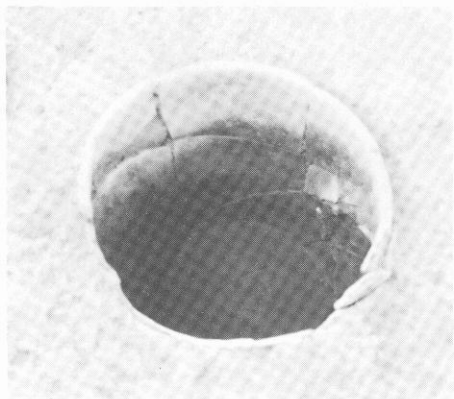
B地区第1地点調査



B地区第1地点調査区全景



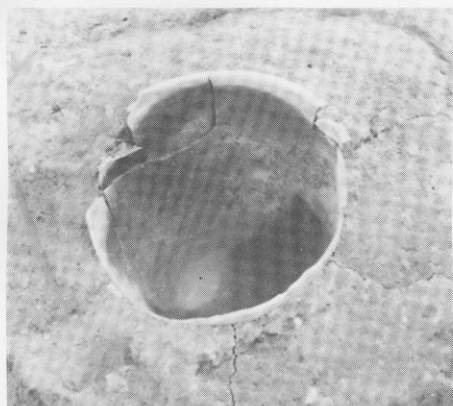
A地区第1地点調査区全景



SK1



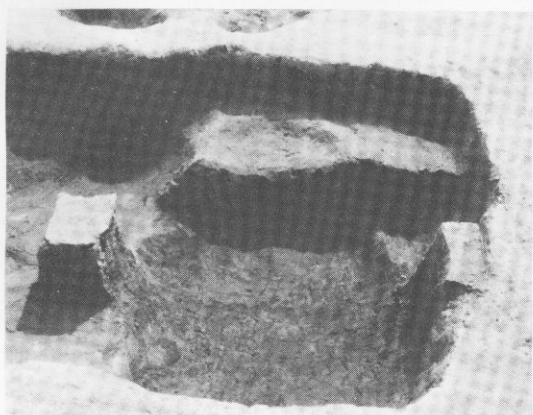
SK2



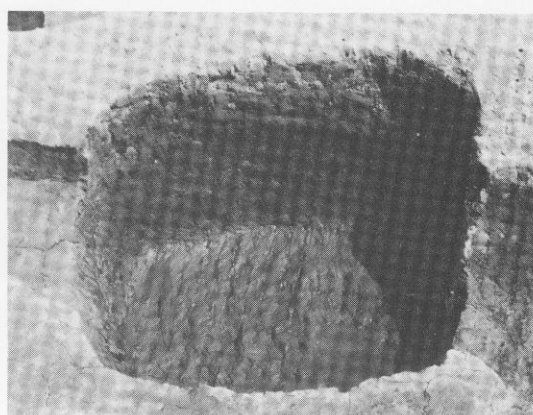
SK3



SD2



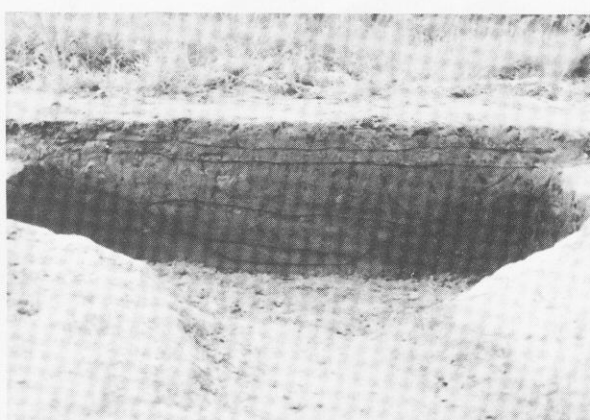
SD3



SD4



SM1



SM1断面

西小田地区遺跡

筑紫野市文化財調査報告書第11集

昭和60年3月30日

発行 筑紫野市教育委員会
筑紫野市大字二日市753の1

印刷 栄光印刷株式会社
福岡市東区箱崎下入道800